

日本スポーツ社会学会
第16回大会

抄録集



平成19年3月26日(月)・27日(火)
金沢大学角間キャンパス

大会概要

- ◆会期 2007年3月26日(月)~27日(火)
- ◆会場 金沢大学角間キャンパス
- ◆交通 金沢駅よりバス(予め運行時刻をご確認願います。)またはタクシー
(金沢駅からバスを利用する場合、便数が少なく時間が30分程度かかります。)
(金沢駅からタクシーを利用する場合、料金が3,000円程度かかります。)

●乗車 金沢駅東口3番乗り場発 91・93・94・97金沢大学行き(兼六園下経由)

●下車 「金沢大学(終点です)」 (34~37分 片道350円)

時刻表は、北陸鉄道ホームページでご確認ください。

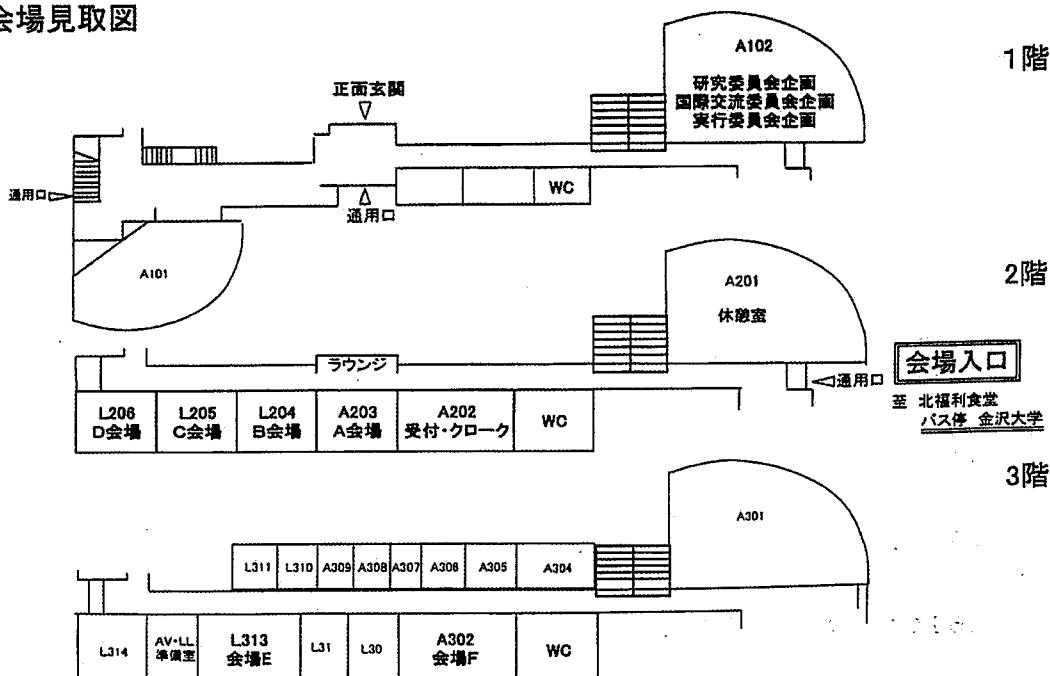
http://www.hokutetsu.co.jp/htd_hp/timetable/rosen/0131_1_1_01.html

◆スケジュール

	3月26日(月)	3月27日(火)
午前	10:00-12:00 理事会 11:30 受付	9:00-10:30 一般発表Ⅱ 10:40-12:40 国際交流委員会企画 シンポジウム
午後	12:30-14:30 一般発表Ⅰ 14:40-17:10 研究委員会企画 シンポジウム 17:20-18:20 総会 18:30-20:00 懇親会	13:20-14:20 実行委員会企画 特別講演 14:30-16:00 一般発表Ⅲ

(学内の生協食堂営業時間:両日とも11:00-14:00)

◆会場見取図



日程

◆ 3月25日(日) ◆

- 後期理事会(2006) 15時00分～17時00分 <法経棟3F 第2会議室>

◆ 3月26日(月) ◆

- 新旧合同理事会 10時00分～12時00分

- 受付 11時30分～ <A202>

- 一般発表 I 12時30分～14時30分

(会場A・A203)

座長:清水謙(筑波大学)

26 IA1 12:30～ 浜田 幸絵(東京経済大学大学院コミュニケーション学研究科)
戦前日本における社会的熱狂の対象としての「オリンピック」の形成過程

26 IA2 13:00～ 王 猛卉(関西大学)
北京オリンピックにおける「市民参加」政策に関する一考察 ～「ボート競技・コッカス選抜」イベントを中心に～

26 IA3 13:30～ 白石 義郎(久留米大学)
オリンピック招致運動の都市効果—福岡市長の戦略

26 IA4 14:00～ 金子 史弥(一橋大学大学院社会学研究科)
スポーツイベント招致と都市 ～UKの事例研究～

(会場B・L204)

座長:菊幸一(筑波大学)

26 IB1 12:30～ 原 祐一(東京学芸大学)
潜在的機能と潜在的カリキュラム スポーツと教育における「かくれた作用」の言説空間

26 IB2 13:00～ 鈴木 聰(東京学芸大学附属世田谷小学校)
小学校教師の職業的社会化における体育科授業研究が及ぼす影響に関する研究 ～ライフヒストリー研究を視点として～

26 IB3 13:30～ 野村 圭(東京学芸大学)
体育教師の「脳みそ」は本当に「筋肉」なのか?～ラベリングと学校文化の近代性～

26 IB4 14:00～ 中澤 篤史(東京大学大学院)
運動部活動における教師一生徒関係の記述的研究 ～都内公立中学校ラグビーフットボールのフィールドワーク～

(会場C・L205)

座長:松田恵示(東京学芸大学)

26 IC1 12:30～ 服部 直(龍谷大学大学院社会学研究科)
型と身体:能楽と武道の比較において

26 IC2 13:00～ 森山 達矢(純真女子短期大学)
武道における精神性と身体感覚

26 IC3 13:30～ 小谷 寛二(福山平成大学)
共振する社会的身体—その①

26 IC4 14:00～ 野村 健(東京学芸大学大学院)
メディアにみられる子どもの身体観

〈会場D・L206〉

座長:森川貢夫(日本体育大学)

26 ID1 12:30～ 小坂 美保(早稲田大学スポーツ科学学術院)
遊歩空間としての公園に関する研究 一日比谷公園を手がかりに～

26 ID2 13:00～ 角田 聰美(福山平成大学)
1910-1920年代における女子のスポーツ活動とその意味 ～茨城県立土浦高等女学校を事例にして～

26 ID3 13:30～ 高尾 将幸(筑波大学大学院)
戦時下における“体位低下問題”とスポーツ空間 ～名古屋市の公園事業を事例として～

26 ID4 14:00～ 中山 健(上智大学文学部 保健体育研究室)
中高年者の身体活動における社会的ネットワーク機能の差異に関する研究

〈会場E・L313〉

座長:西山哲郎(中京大学)

26 IE1 12:30～ 小竹 瞬(奈良教育大学大学院)
ストリートダンスの世界

26 IE2 13:00～ Wu, Sheng-Chi (National Taiwan Normal University)
B-Boy for life? The Evolutional Track of Street Dance in Taiwan

26 IE3 13:30～ Hung-Yu LIU (Department of Leisure Management Ming Hsin University of Science and Technology Taiwan)
The Relationship across the Taiwan Strait and the Bidding of Mega-events in Taiwan—a Strategic Relations Perspective

〈会場F・L302〉

座長:千葉直樹(浅井学園大学短期大学部)

26 IF1 12:30～ 林 伯修(台湾師範大学)
「台湾大学野球とグローバル化」に関する調査研究

26 IF2 13:00～ Chen An Chuang (National Taiwan Normal University)
Exploration to the factors of decrease in fans' attendance in CPBL 17th in Taiwan

26 IF3 13:30～ Toshiyuki Yamanouchi (National Taiwan Normal University)
Three-concerned Relationship:Reconsideration on the Football Association in Taiwan

●研究委員会企画

14時40分～17時10分 <A102>

課題研究「スポーツの空間／空間のスポーツ 戦前期の都市と国家」

報告1 石坂友司(筑波大学)
スポーツがつくり出す都市空間 ～プロジェクトとしての東京オリンピック～

報告2 関直規(弘前学院大学)
戦間期の社会体育行政と都市空間

報告3 吉原直樹(東北大)
戦間期仙台の余暇空間

●総会

17時20分～18時20分 <A102>

●懇親会

18時30分～20時00分 <生協 北福利食堂 1F>

.....◆ 3月27日(火) ◆.....

●一般発表Ⅱ
(会場A・A203)

座長:坂上康博(福島大学)

27 II A1 9:00~ 林 伯修 (台湾師範大学運動與休閑管理研究所)
台湾甲組棒球に関する研究

27 II A2 9:30~ Li-Wei Hsu (National Taiwan Normal University)
Our memory, Our baseball, the Taiwanese Collective Identity

27 II A3 10:00~ Liao Yung (National Taiwan Normal University)
A Sports Hero's birth --- The Deconstructing of Chien-Ming Wang Phenomenon

(会場B・L204)

座長:高橋義雄(名古屋大学)

27 II B1 9:00~ Guo, Ya-Ting (National Taiwan Normal University)
Study of the marketing of Keelung Jung Yuan Festival (基隆中元祭)

27 II B2 9:30~ Wang lin-kai (National Taiwan Normal University)
The Research on participant motivations of consumer, consumer behavior and
consumer satisfaction in fitness center. A case study of Taipei city Betiou
sport center

27 II B3 10:00~ Jia-Jahng Guo (National Taiwan Normal University)
A Research on social development of the soccer participant in Taiwan

(会場C・L205)

座長:平井聰(滋賀大学)

27 II C1 9:00~ Cheng-Hsiu,Tsai (National Taiwan Normal University)
A study in role conflict of semi-professional student players Students in Super
Basketball League and NTNU basketball team as a example

27 II C2 9:30~ 朱 文增 (台湾師範大学スポーツとレジャー経営研究科)
Study on Current Status of the Retired Professional Baseball Players in Taiwan
---With a Focus on the Trace Investigation of Retired Players 台湾プロ野球
選手の引退後の現状についての研究 -引退した選手の追跡調査を中心として-

27 II C3 10:00~ Tzeng Chien-chun (National Taiwan Normal University)
The comparison of the developments of therapeutic riding between Taiwan and
Canada. -The cases of Northern Taiwan and Western Canada

(会場D・L206)

座長:リー・トンソン(早稲田大学)

27 II D1 9:00~ Jun-hao Hu (National Taiwan Normal University Graduate Institute of Sports
and Leisure Management)
The Research on Super Basketball League Players' Values of Games

27 II D2 9:30~ Chen-Wei Lo (National Taiwan Normal University, Taiwan)
The Content Analysis of Gender of News Reporters in Sports Coverage -An
Example of 2006 DOHA Asia Games

27 II D3 10:00~ Chia-Pei Huang (National Taiwan Normal University)
A Study on Media Relations Strategy of the Sport Brand - take adidas originals
in Taiwan for example

（会場E・L313）

座長:橋本純一(信州大学)

27 II E1 9:00~ 岡村 正史 (大阪大学大学院人間科学研究科)
大衆文化としてのプロレスはいつ終焉したのか。

27 II E2 9:30~ 清水 泰生 ((社)日本マスターズ陸上競技連合)
言語学からみたスポーツ実況中継

（会場F・L302）

座長:藤田紀昭(日本福祉大学)

27 II F1 9:00~ 森 政晴 (駒澤大学大学院)
スポーツ<ボランティア>はボランティアか 一ボランティア論からのアプローチ
と定義の再考一

27 II F2 9:30~ 後藤 貴浩 (熊本大学)
生活構造から捉える障害者とスポーツ

●国際交流委員会企画 10時40分～12時40分 <A102>

国際シンポジウム「アジアにおけるグローバリゼーションとスポーツ Globalization and Sports in Asia」

- 1) スティーブ ジャクソン(オタゴ大学 ニュージーランド)
グローバリゼーションとスポーツ:アジアの境界内、そしてアジアを越えての現在
と未来の研究領域
- 2) シン イハン(サウスカラライナ大学 アメリカ)
プロスポーツ競技および競技者の興隆と没落:日本における大相撲の事例を通
して
- 3) 黄 順姫(筑波大学 日本)
2006年のワールドカップサッカー、多文化的なサポーターの空間、ディアスボラ

●実行委員会企画 13時20分～14時20分 <A102>

特別講演「旧制高等学校のスポーツ活動研究」
大久保英哲(金沢大学)

●一般発表Ⅲ

(会場A・A203)

座長:岡田桂(関東学院大学)

27 III A1 14:30~ 菊 耕太郎 (立命館大学大学院)
海外への武道の普及に関する一考察 -1910年代のパラグアイにおける柔術の
受容を中心に-

27 III A2 15:00~ Li Ho-Yu (National Taiwan Normal University)
Night club culture in Taipei

27 III A3 15:30~ 坂本幹 (筑波大学大学院人間総合科学研究科)
第3世界における「パブリック・カルチャー」論の射程 -A.アバデュライの「インド・
クリケットの脱植民地化」を中心にして-

（会場B・L204）

座長：高橋豪仁（奈良教育大学）

27 III B1 14:30～ 宮坂 雄悟（東京学芸大学研究員）
遊び行為における役割の「重複性」に関する研究27 III B2 15:00～ 松田 恵示（東京学芸大学）
“Wii現象”とは何か？－ヴァーチャルスポーツのハイブリッド化の意味について－27 III B3 15:30～ Chang Hung Chi (National Taiwan Normal University)
The Game Generation in Taiwan: The Past, Present, and Future

（会場C・L205）

座長：佐伯年詩雄（筑波大学）

27 III C1 14:30～ 大沼 義彦（北海道大学大学院教育学研究科）
米国プロスポーツ研究における経験的・理論的パースペクティヴ27 III C2 15:00～ 荒川 和民（スポーツライター）
内海和雄氏の理論についての考察27 III C3 15:30～ Lee Shane chung (National Taiwan Normal University)
Looking insight the phenomenon of Wang with the theory of cycle of culture

（会場D・L206）

座長：松村和則（筑波大学）

27 III D1 14:30～ Yu-Jen Chen (Graduate Institute of Sports and Leisure Management)
The Research of Leisure-related Policies for The Elderly in Taiwan27 III D2 15:00～ 笹生 心太（一橋大学大学院社会学研究科）
ボウリングブームに関する諸条件の考察

（会場E・L313）

座長：東元春夫（京都女子大学）

27 III E1 14:30～ 池端 宏之（早稲田大学大学院人間科学研究科修士課程）
帰化選手に描かれる日本人の「境界」～サッカーでの言説を事例として～27 III E2 15:00～ 千葉 直樹（浅井学園大学短期大学部）
Jリーグにみる在日コリアンの民族アイデンティティ27 III E3 15:30～ Wang Szu Hong (National Taiwan Normal University)
The cultural Implications of Sports movie in Native Taiwanese – With movie (My Football Summer) for example-

（会場F・L302）

座長：山本教人（九州大学）

27 III F1 14:30～ 了海 諭（東海大学）
大相撲における女人禁制の研究5－平成17・18年9月東京場所観戦者の比較－27 III F2 15:00～ 生沼 芳弘（東海大学）
大相撲における女人禁制の研究6－平成18年(2006)9月東京場所の観客意識調査－

戦前日本における社会的熱狂の対象としての「オリンピック」の形成過程

The Making of Popular Enthusiasm for the Olympic Games in Prewar Japan

東京経済大学大学院コミュニケーション学研究科 浜田幸絵

Tokyo Keizai University (Graduate School of Communication Studies), Hamada Sachie.

戦前日本のオリンピック(特に1930年代のオリンピック)は、これまで「軍国主義」や「国家主義」という政治的イデオロギーの脈絡で論じられてきた。しかし国際的なスポーツ・イベントに社会全体の关心が惹きつけられるのは1930年代に固有の現象ではなく、現在においても、オリンピックが開催される度に国民的なヒーローやヒロインが誕生している。また近年、オリンピックをナショナリズム／インターナショナリズム／ローカリズム／アウェーターナショナリズムが拮抗する場、あるいはジェンダー・民族・国家といった様々なレベルでアイデンティティが構築される場として捉えた研究がみられるが、こうした立場から戦前日本のオリンピックを分析した研究は少ない。本研究では、今日の日本社会におけるオリンピックやスポーツの位置づけにまでつながる問題として、戦前日本において「マス・メディアの作り出す膨大な物語が人々のオリンピックへの関心をかきたてる」という構図が形成される過程を明らかにした。本発表では、以下の2点について報告する。

(1) オリンピック報道の物語化（「記録」から「物語」へ）

西欧列強の祭典であったオリンピックを日本のマス・メディアが報じるようになったのは、日露戦争後の対外的関心が増大し、新聞社の企業化が進んでいた1910年前後の時期であった。初期の報道は、競技の結果だけを列挙する断片的なものであったが、1920年代の大会では、日本選手団がオリンピックに遠征するまでの様々な出来事が満遍なく伝えられるようになり、オリンピックの競技や祭典などが意味づけ／関連づけられていった。

オリンピックが一般的なスポーツ報道の対象から、事前に周到な準備をして報道する対象となる過程は、1920年代初頭からの身体やスポーツへの関心の高まり、マス・メディアの産業的な規模の拡大や通信技術の発達等と密接に関連している。1930年代には、取材・報道体制が強化されラジオの実況中継が行われたほか、企業も積極的に販売促進活動を開催するようになる。オリンピックは、単なるスポーツのイベントというよりは社会的なイベントとして人々を巻き込むようになり、オリンピック報道は量的にも質的にも膨張した。

(2) 戦前日本におけるオリンピックをめぐる物語の内容

戦前日本のオリンピックの中心的な物語は、「われわれ日本人の身体・精神」についての物語であった。1908年に大阪毎日新聞社の海外洋行員が最初に取材したときから、日本の身体・精神・文化を対外的に顯示する可能性をもつ舞台としてオリンピックは認識されていたが、1920年代半ば頃までは、「代表選手の身体・精神」を『われわれ日本人』の身体・精神を重ね合わせていたのは、一部の関係者だけであった。しかし1928年大会で日本選手が活躍して以降、人々はオリンピック選手を自らの代表としてその動向に注目するようになり、特に1932・1936年大会では、日本人の礼儀正しく慎ましい様子や、最後まで努力を続ける様子が、外国人にはない「日本古来の伝統」として繰り返し語られていった。

一方で、オリンピック報道の膨張によって、國家以外の性や人種といった集団の特徴を強調し、差異化するような物語も増加した。日本の女子選手は「外国の女子選手」や「男性」よりも「体格の劣ったか弱い身体」をもつ存在として位置づけられ、「男子選手」以上に「朗らかな国際親善大使」としての役割を期待された。1936年大会では、日本選手の日常や人生を「理想」として語ることを通じて、日本社会の価値観や規範を劇的に表出させるような報道も行われるようになる。親子・師弟・男女といった社会関係のあり様を強調する報道は、一般的のオリンピックへの関心を一層掻き立ててという機能を担っていたと考えられる一方で、様々な個人を定型化された物語の枠組みのなかに込められていった。

こうした様々な物語の複雑な絡み合いのなかから、戦前期オリンピックの物語は形成された。それらの物語が生産・消費・再生産されていくなかで、オリンピックは社会的熱狂の対象として位置づけられていったのである。

北京オリンピックにおける「市民参加」政策に関する一考察

—「ボート競技・コックス選抜」イベントを中心に—

A study on the government's policy about public participation in the Beijing Olympic Games: Focusing on a media event designed to select the coxswains in the rowing event

王 篠卉（オカ ショウイ）（関西大学）
WANG XIAOHUI (Kansai University)

一、問題提起

「2008年北京オリンピックにおいて、ボート種目のコックス役を選抜するために行われているイベントが、市民の注目を集めている。現在、300名の候補者から80名の進出者を選出すオンライン投票が進行している。（中略）9月から始まった本選抜は、全国にわたって1万人余が参加してきた。年齢18歳から60歳までの中国人はすべて参加資格を持っている。……」（2006.11.7）
 （<http://www.beijing2008.com>）

〈2008年北京オリンピック委員会〉の公式ホームページに掲載された上記の記事は、2006年9月に始まった「ボート競技・コックス選抜」イベントを報じたものである。ボート種目の「コックス」とはオールを持たず、こぎ手に指示を出す舵取り役である。数あるオリンピック種目の中で、それは唯一身体能力が求められず、一般人でも競技に参加することができるものである。〈中国国家体育総局（＝中国スポーツ官庁）〉と〈中国中央テレビ局（CCTV）〉は、北京オリンピックに向かって、男女のボート競技の〈エイト〉という種目において、コックスを一般市民から募集するという異例の選抜システムを採用した。この「コックス選抜」イベントの開催は、現代のオリンピック・ムーブメントにおける新しい出来事であるとともに、現代中国の社会政策の変化を反映する象徴的な社会現象として捉えられる。

中国では、オリンピックに出場するナショナルチームのメンバーは、すべて国家によって育成され、「優れた中国人」という一般人とは異なるイメージが付与されてきた。これに対して、「コックス選抜」イベントでは、「海選」という一般大衆から参加者を広く募るシステムが用いられ、コックスはインターネットや携帯電話による投票によって決定される。国家を代表するナショナルチームのメンバーの選抜に、一般人の意向が取り入れられる背景は何であり、また、そのように選ばれた彼らにはどのようなイメージが付与されるのだろうか。

二、研究目的

本報告では、現代中国における「海選」のシステムを用いる番組を参考しつつ、2007年現在進行中の「コックス選抜」イベントの表象を分析し、「スペクタクル」に関する理論を用いて、本イベントが中国社会の文脈において、どんな象徴的な意味を示しているか、また、今後コックスとして選ばれる「一般人」には、どのようなイメージが付与されるのかについて、現段階における中間報告として明らかにしたい。

三、知見

現在開催されている「ボート競技・コックス選抜」イベントには、2004年から中国湖南省の衛星テレビによって放送された「超級女声」（スーパー歌姫）番組のシステムが多数取り入れられている。「超級女声」はアメリカのリアリティ番組である「アメリカンアイドル」を模倣して作られたオーディション番組であり、放送開始の翌年から、この番組の参加者は15万人、視聴者は3億人に上り、大きな人気を博すようになった。「超級女声」シリーズは、参加者の出身、容姿、学歴を一切問わず、5歳から65歳までの女性であれば、誰でも参加できるという「海選」のシステムを採用している。その番組の視聴者はインターネットおよび携帯電話を介して自分の好きな参加者に投票することができ、審査員の評価以

外にも、視聴者自身の応援によりオーディションの優勝者を決定する仕組みが用いられている。「超級女声」というエンターテイメント番組は、大衆参加の民主性および多数投票で決める結果の公平性を反映するものであり、そこには、自由・平等および人々の意見を尊重する意識の広がりを見出すことができる。番組の成功にしたがって、中国では「草の根スター」という言葉が生まれ、庶民スターの育成システムは次第に社会のメカニズムに組み込まれつつある。「頑張れば、誰でも成功するチャンスがある」という新たな社会発展を促す求心力としての意識が、市場の中で構築されつつあるといえる。

「ボート競技・コックス選抜」イベントでは、以上に述べたような「海選」システムおよび視聴者の投票システムが取り入れられている。これらは社会の人々が民主的に国家の意思決定に関与するような大衆参加の手段だといえる。ところが、コックス選抜イベントは、市場の中で生まれたエンターテイメント番組「超級女声」とは異なり、2008年北京オリンピックを契機として「参加することに意義がある」というオリンピック精神を広めるための政府主導の「公共的イベント」であることが、政府によって明言されている。

現代の中国社会において、市場経済は急速に発展しているが、貧富の格差が拡大しつつあり、さまざまな面で不安定な状況が生まれている。これに対して、政府は從来の「発展至上」政策を調整し、「調和的・社会」の構築を目指すことを打ち出してきた。この「調和的・社会」とは、2020年における中国社会の将来像をあらわすものであり、中国の各地域における経済格差を是正するとともに、民主的な制度を整備し、人々の意見を尊重することをその特徴としている。したがって、「調和的・社会」を目指している政府は、より広い階層の支持を求め、より多数の人々の利益を代表することを図り、新たな政策に乗り出すことが考えられる。

一方、産業化、情報化に基づく現代の社会は D. Kellner (2003) が言うように、スペクタクル社会に向かっているが、その中でも、現代スポーツのスペクタクル性が他を圧倒している。世界において、スポーツはメディアを介して、メディア・スペクタクルという形で取り上げられ、社会を統合する道具としても用いられている。

2006年9月から2年近くにかけて開催される「コックス選抜」イベントは、オリンピックという世界最大規模のスポーツイベントを舞台に、様々なメディアを利用して、あるべき社会を政府の想定する脚本に基づいている。そして、それは一般大衆も積極的に差し込んだ「スペクタクル」として企図されている。本イベントにおいては、大衆参加の「海選」および視聴者自身による投票のシステムが「参加することに意義がある」というオリンピック精神に関連付けられ、イベント全体が政府の政治的な文脈に置かれることで、人々の「市民参加」は「調和的・社会」を構築する象徴としての意味が付与される。

また、北京オリンピックの直前に選出される2名のコックスは、一般人の中から、一般人によって選ばれる「庶民的ヒーロー」のイメージをもつものとなりうることが考えられる。彼らが、国家によって育成されたナショナルチームのメンバーに参加することによって、これまでのナショナルチームのイメージは変容し、より多様化すると考えられる。このことは今後の政府の新しい方針に対する示唆的な意義をもつていると考えられる。しかしながら、「庶民的ヒーロー」として選出された2名のコックスは、実際にナショナルチームに入れば、他のメンバー達と一体化することが求められ、彼らと同様に政府の指示に従うことになると想えられる。2名のコックスに付与された「庶民的ヒーロー」のイメージは、「海選」や視聴者による投票などの「市民参加」のシステムによって作り上げられ、人々の凝集力を高めるものとなるが、そのイメージが政府の「スペクタクル」の文脈に配置されることで、より広い階層の支持を集め、より多数の人々を代表する、いわゆる「調和的・社会」という新しい政府の目標に資するための手段となる可能性が高い。

<参考文献>

- Kellner D. (2003). *Media Spectacle*, Routledge
 杉本厚夫(1998)、「日本から：消費社会とスポーツ文化の変容—スポンサーシップからパトロンシップへ」、日本スポーツ社会学会編、『変容する現代社会とスポーツ』、世界思想社、6-15
 王篠卉(2007)(印刷中)、「中国スポーツ体制改革の葛藤—田亮の『ナショナルチーム除名事件』から」、『スポーツ社会学研究』

第16回 スポーツ社会学会 2007年 金沢大学 3月26日

オリンピック招致運動の都市効果—福岡市長の戦略

The Effects on City policy of Olympic
Invitation: Case study on Fukuoka

白石義郎 (久留米大学)
Shiraishi Yoshiro Kurume Univ.

1 問題の設定

(1) 本発表のテーマ

本発表のテーマは社会システム論に依拠しつつ、巨大スポーツ・イベントと都市コミュニティとの機能的意味連関を問うことである。この一つ事例として、福岡市長のオリンピック誘致運動と選挙運動との連関を分析する。

(2) 研究の目的

事例選定の理由

福岡市長のオリンピック誘致運動は、この事例のひとつである。この事例をとりあげるに値するのは、二つの理由がある。

第一は、都市コミュニティにとってオリンピックという巨大イベントがどのような手段であるかが透けてみえることである。今回の事例は、オリンピック開催決定後でもなく、開催終了後の事例ではない。その前段階の誘致運動の段階である。そこには可能性を語る多くの言説がなされる。この可能性の言説の中に、手段としてのオリンピックの利用価値が透けて見える。

第二は、「担い手」の主観的意図が透けてみえることである。今回のオリンピック誘致運動は市長の選挙運動であった。市長がどのような目論見で、どのように行為したか、それを支持したり、支持しなかったものは何か。この主観的意図とその結果を分析することで、都市と巨大スポーツ・イベントとの機能連関をみることができる。

2 経緯

(1) 発端

今回のオリンピック誘致運動の第一の特徴はその唐突さである。

山崎市長の説明表明は、JOC会長の福岡市訪問から始まった。JOC会長の訪問のすぐ後に、「パートナー都市協定書」が結ばれた(2005年4月)。その内容はオリンピック運動の促進をJOCと福岡市が促進するというものである。同年10月の福岡市・北九州市両市長会議で山崎市長は、「150万都市でもオリンピック開催が可能でなければならない。そういう考え方方がJOC側にもJOC側にもある」と発言した。

これらの一連の市長の意思表明は、事前の根回しのうえになされたものではなかった。とりたてたブレーンも構築しておらず、また支持団体も形成していなかった。誘致運動は唐突に始まったのである。市民の感覚において、この「唐突」感は市長の「独断専行」感でもあった。

(2) 誘致運動の展開

1. 誘致イメージ戦略

オリンピック誘致運動は実際には市長の選挙運動であった。福岡市の開発主義による埋め立て地をめぐるインサイダー事件などで市長の支持率は低下していた。そこで市長は都市の選挙キャンペーンの常道であるポピュラリズムの戦略をとった。ポピュラリズムの選挙戦略の要は3点ある。①有権者へのPRとしてのキャッチフレーズの創出、②有権者への隠れた脱得者の創出、③利益誘導による支持者の誘引。

①キャッチフレーズ

創出されたキャッチフレーズは二つあった。「コンパクトなオリンピック」と「元気ある

都市福岡」である。

「コンパクトなオリンピック」は巨大化したオリンピックへのアンチテーゼであり、地方都市である福岡で開催するための正当化の言説であった。「元気ある都市、福岡」はオリジナルなキャッチフレーズではない。先のユニバーシアード誘致の言説として用いられた。この言説は経済停滞のなかで有権者に浸透しやすい言説であった。

②隠れた脱得者

オリンピック誘致戦略において、二つの「隠れた脱得者」を登場させた。一つは著名人を応援者・賛同者として動員することである。ホークスの王監督などのオリンピック・アドバイザーとして、PR効果を図った。もう一つは市長自身である。市長は精力的に地元マスコミへの露出を図った。「汗をかく市長」、「市民の先頭を走る市長」というイメージを創出するためであった。

③利益誘導による支持者の引き出し

巨大スポーツ・イベントが都市にもたらす最大の効果は、利益誘導である。とりわけ、通常の手段では難しい都市再開発の大義名分となることである。福岡の場合、中央埠頭の再開発であり、無駄な投資として批判されてきた埋め立て地の活用であった。商工会議所などの経済団体からの支持とりつけの手段であった。

2. 東京都との争い一話題の提供

東京都が国内開催地として立候補した。これは今回の誘致ドラマのシナリオにあらかじめ組み込まれていた。JOCのシナリオであった。東京都と福岡市との誘致合戦はマスコミにとって面白いアジェンダであった。マスコミへの露出を図るというポピュラリズムの戦略としてはなくてはならない構図である。結果はあらかじめ決まっているが、市長はそこで数々のパフォーマンスを演じた。33票対22票という票差は「福岡の善戦」というイメージを与えた。

3 福岡のオリンピック誘致運動から何が見えるか。

本事例は、巨大スポーツ・イベント誘致と市長選挙が結びついた事例であった。市長選の結果は、山崎現職の落選、巨大プロジェクト見直し派の新人の当選であった。市長選挙は東京都への決定の後であり、オリンピック誘致の是否そのものが選挙の直接の争点にならなかったわけではなかったが、選挙運動としてのオリンピック誘致は失敗に終わった。

今回の事例から見えてくるものは、都市の政治の手法としてのポピュラリズムとオリンピック誘致運動との機能的連関である。選挙におけるポピュラリズムは有権者受けをねらった候補者自身のパフォーマンスとして表現される。そこで見えてくるものは、イメージ創出としての選挙におけるアジェンダの創出、隠れた脱得者の創出であり、構造のとりこみとしての都市の利益誘導である。とりわけ、都市の再開発にオリンピックは大義名分を与える。

4 インプリケーション

本研究は、社会システム論の観点から、巨大スポーツ・イベントを分析することであり、その分析概念は社会システムで用いられる概念である。いわば巨大スポーツ・イベントに社会システムという網をすっぽりとかぶせるものである。本研究の特徴と限界はここにある。本研究からはオリンピック運動の理念やるべき姿はみえない。しかし、意味連関は見える。これまで巨大スポーツ・イベントであるオリンピックはナショナリズム、国策などの国家レベルの問題として、あるいはマクロ経済レベルの問題として論じられてきた。しかし、より小さな社会システムである地方都市にとっても、オリンピックは、ネイション・レベルではない社会的効果がある。それはむしろプロ・スポーツのフランチャイズをめぐる問題に連動するものである。スポーツ社会学にとって豊かな研究領域を提供するのではないかろうか。

スポーツイベント招致と都市－UK の事例研究－

Bidding for Sports Events in Cities

金子 史弥(一橋大学大学院 社会学研究科 博士課程)
Fumihiro Kaneko

Postgraduate School of Social Sciences Hitotsubashi University

1. 本研究の目的と方法

(1) 問題の所在

昨年の8月末、東京都が2016年夏季五輪招致の国内候補地に決定したのは記憶に新しい。1964年の東京五輪以来2度目の、日本での、そして東京における夏のオリンピック開催に向けて、JOCをはじめ関連諸団体の動きが活発になっている。しかし一方で、国内候補地の最終決定以前の東京都と福岡市による激しい国内候補地認定レースの頃から、「オリンピック招致・開催」の意味が問われている。招致活動や関連施設建設に莫大な予算を必要とし、地方自治体の財政難やそれに付随した「自治体改革」が必要とされている中で、なぜ今「オリンピック招致」が必要なのか、オリンピックは開催都市に何をもたらすのかが、各方面から厳しく問われはじめている。

(2) 本研究の目的と方法

そこで、本研究では①なぜオリンピックのようなスポーツイベントを招致する必要があるのか、②なぜ「スポーツイベント」なのか、③スポーツイベントの招致・開催はどのようなインパクトを開催都市に与えるのか、④スポーツイベントの招致・開催における問題点は何なのか、以上の「スポーツイベント招致・開催」の意味を理解するのに必要であると考えられる4つの問い合わせるために、United Kingdom(以下 UK 通称イギリス)においてスポーツイベントを利用した地域振興策で有名なシェフィールド市の事例を検証した。後に詳しく述べるが、19世紀の第二次産業革命以降、鉄工業で有名だったシェフィールド市は、1980年代の世界的な産業構造の転換・工業の衰退から、失業者対策・都市の再開発などの社会問題の解決を迫られていた。それら諸問題を解決する「起爆剤」として、シェフィールド市はユニバーシアード(以下 WSG)1991年大会の招致・開催を決定した。このWSGの招致・開催を契機に、シェフィールド市はスポーツ・インフラ、都市インフラの整備を進めて「スポーツイベントによる地域振興」を図り、WSG以降も戦略的にイベントの招致・開催を進めて10年間で400以上ものスポーツイベントを開催した。また、同市は1995年に国内初の「National City of Sport」にも認定され、「工業の街」から「スポーツの街」へのイメージ転換に成功したといわれている。このような都市において「ユニバーシアード」というスポーツイベントの招致・開催はどのような意味を持っていたのかを明確することは、東京都の取り組みを理解する上で、有益な示唆を与えてくれるだろう。

本研究では、先に述べた4つの問い合わせるために、以下のような方法に基づいて考察した。まず①と②の問い合わせについては、Denyer(2002)や Paramio(2000)、その他関連資料を参考に、WSG招致に至るまでのシェフィールド市の社会背景を詳しく追った。ここでは、当時のシェフィールド市の政治的、経済的背景ばかりではなく、スポーツに関連した社会的・文化的背景にも着目した。③の問い合わせについては昨年度の本学会発表を紹介した、4つのインパクトに関する視点に基づいて分析した¹⁾。最後に、④の問い合わせについては先に挙げた先行研究や関連資料の分析に加え、UKにおいて当該分野の研究者に対してインタビューを行った²⁾。

2. UK の事例研究－シェフィールド市に注目して－

本節では先に述べた本研究の目的と方法に基づいて、シェフィールド市の事例を考察したい。紙面の都合により、ここでは概略のみを記述する。詳しくは当日の発表、配付資料を参考にしていただきたい。

(1) スポーツイベント招致の背景

政治的背景としては、從来から労働党が根強かったシェフィールド市は、同市が多くの都市問題を抱えた1980年代、中央政府(保守党政権)の援助無しに、福祉政策を通してそれらの問題の解決を図ろうとしていた。しかし、財政的な問題から政策方針を転換せざるを得なくなり、1980年代後半になって、「スポーツ・レジャー・ツーリズム」を軸にしたサービス産業中心の都市再生(再開発)を図っていくことになる。次に経済的背景としては、先にも述べたように、1980年代の世界的な産業構造の転換・工業の衰退から、シェフィールド市は「生産ユニットとしての都市」から「消費ユニットとしての都市」への性質転換と、失業者対策・再開発などの都市問題の解決を迫られていた。最後に、スポーツに関連する背景としては、前述のように労働党の勢力が強かつたシェフィールド市では、住宅・教育・交通などのもつとも根本的な社会政策が重視されていたため、ある種の「贅沢」であると考えられるスポーツに対する投資は十分に行われなかつた。この状況は、「スポーツ・フォー・オール」政策に基づいて、地方自治体がスポーツ施設に対して大規模な投資を行っていた1960~70年代のUKの他の都市と比較すると、きわめて珍しい状況だった。市のスポーツ施設は市民のニーズとは裏腹に、とても貧しい状態にあり、スポーツ施設に対する大規模な投資が必要とされていた。

(2) なぜ「スポーツイベント」だったのか？

「WSGというスポーツイベントを一つの起爆剤として、地域振興を図る」という考えは、アメリカのインディアナポリス市を手本にしたと言われている。インディアナポリス市は、シェフィールド市と同様、1980年代になって経済後退に苦しみ、産業構造の転換と都市の再開発が必要とされていた。インディアナポリス市は、「アマチュア・スポーツの首都」というイメージを形成する戦略を採用し、様々なスポーツ施設を建設した。さらに、その施設を本拠地とするプロスポーツチームを招致して、多くの観衆と2次の消費が生み出す経済効果による、地域経済の活性化を図った。シェフィールド市はまさに「UKのインディアナポリス市」と言えるような都市戦略をとっていたのである。

(3) スポーツイベント招致・開催のインパクト

まず、①社会経済的インパクトとしては、WSGによる直接的な経済効果や観光客の増加に加え、宿泊業・レストラン業・スポーツ施設職員などサービス業や、建設業で多くの雇用が生まれた。次に②社会文化的インパクトについては、「工業の街」から「スポーツの街」へのイメージ転換、一部スポーツ種目での参加率・参加者数の上昇などが挙げられる。そして③環境へのインパクトとしては、シェフィールド市では約1600億円をかけて、国際プールやスポーツセンターなどのスポーツ・インフラに加え、選手村(後に公営住宅に転用)、高速道路・トラム(路面電車)の整備など、都市インフラや交通インフラの充実が図られた。これらの施設を利用して、シェフィールド市はWSG以後継続的にスポーツイベントを招致・開催し、「スポーツイベント都市」としての地位を確立していく。最後に④政治的インパクトとしては、WSG開催をきっかけに、政策決定過程において、行政と民間の公民パートナーシップや、行政と市民団体とのパートナーシップ形成が進み、これらがさらなる都市政策、経済政策の推進や、サービス提供に役立っているという。

(4) スポーツイベントの招致・開催における問題点

WSGの招致・開催において生じた問題点は3点ある。一つは「長期的計画」の問題である。先に述べたWSGの「遺産」とも言うべきスポーツ施設を利用した「スポーツイベント戦略」は一見すばらしい効果を上げているように見えるが、実は招致前にあまり意図されていなかった偶然の産物であり、また、Taylor(2001)の研究にあるように、スマシングに限って言えば、スポーツイベントの招致やスポーツ施設の建設によって、「大衆のスポーツ参加」が必ずしも促進されるわけではないという指摘もある。2点目としては財政の問題がある。インフラ整備への投資や、WSG大会自体の赤字によって、市では福祉関連サービス予算の縮小が行われた。最後に「地域住民への説明責任」の問題がある。WSG開催をめぐる「事前評価研究」をめぐる政治的問題は、市民の労働党に対する不信感を招き、先に述べた2つの問題も重なって、1999年の政治的転換(労働党の地方選挙での敗北)につながったとされる。

3. 今後の課題

今後の研究課題として、シェフィールド市でのさらなる現地調査(資料収集、インクルージョン調査など)を行い、本研究をより深めていきたい。また、近年UKにおいては、「スポーツイベントの招致・開催」に関するマニュアル作りや、評価基準作りが実際に行われはじめている。こうしたUKにおける動向に対する詳細な分析も同時に進めていきたい。

※ 主要参考文献

- ・ 内海和雄『プロ・スポーツ論　スポーツ文化の開拓者』創文企画 2004年
- ・ 原田宗彦『スポーツイベントの経済学 メガイベントとスポーツチームが都市を変える』平凡社新書 2002年
- ・ Denyer, D. Policy Change, Governance and Partnership: Sheffield City Council's Leisure Services, 1974 to 1999 PhD Thesis, Loughborough University 2002
- ・ Houlihan, B et al. Impacts of the Olympic Games as mega-events 2004
- ・ Paramio-Salcines, J. L. Public-Private Partnership, Sport and Urban Regeneration in Britain and Spain Unpublished PhD Thesis Loughborough University 2000
- ・ Taylor, P. Sports facility development and the role of forecasting: A Retrospective on swimming in Sheffield 2001 in Gratton, C. and Henry, I.(ed), Sport in the city: the role of sport in economic and social regeneration. Routledge, 2001 pp214-226

¹⁾日本スポーツ社会学会第15回大会(於:奈良教育大学)での筆者による一般研究発表「スポーツイベントによる地域振興」において、筆者は原田(2002)、内海(2004)、Houlihanら(2004)の研究を参考に、スポーツイベントが都市に及ぼすインパクトを、①社会経済的インパクト②社会文化的インパクト③環境へのインパクト④政治的インパクト、以上4点に分類し、捉えることとした。

²⁾インタビューを行った主な研究者と、インタビューを行った日時は以下の通り。

Chris Gratton教授(Sheffield Hallam University):2004年3月9日、11月3日

Ian Henry教授(Loughborough University):2004年3月18日、11月1日

Peter Taylor教授(University of Sheffield):2004年11月2日

潜在的機能と潜在的カリキュラム
スポーツと教育における「かくれた作用」の言説空間
Latent functions and Hidden Curriculum
Discourse space of "hidden effect" in sports and education

原 祐一（東京学芸大学） Yuichi Hara(Tokyo Gakugei University)

○はじめに

現在、文部科学省によって学習指導要領が新たに検討される中で、これまでのゆとり教育の見直しを含め、学習内容やカリキュラムのあり方が検討されてきている。社会的には義務教育において何を学習させているのかを明確にすることが期待されている。このような社会的要請は、教科体育にも求められ、アカウンタビリティの観点から、体育の学力をどのように保障するかが問われてきている。これに答える形でこれまでの「楽しい体育論」ではなく、すべての子どもに身につけたい運動能力という形でミニマムやスタンダードを設定すべきであると言った議論がなされている。このような教育における政策的な議論の前に、体育の授業において運動を通して子どもが実際にどのような学習経験をし、どのような意味のやりとりの中で内容の理解をしているのかという「かくある」事実をまずは明らかにする必要があると思われる。

学校と社会との関連の中で、学習内容や、社会の中で教育が果たしている機能、及び、どのような価値や意味を教育の中で子どもに教えているのかについては教育社会学及びカリキュラム社会学の中で研究されてきた。1970年代から1980年代にかけて解釈的パラダイム（知識社会学、現象学的社会学、象徴的相互作用論、あるいはエヌノメソドロジーなど）が提案されてから、当為論ではなく、かくあるという事実を浮き彫りにしようとするアプローチによって研究が進められるようになった。この様なパラダイム転換から公的なカリキュラムだけでなく、教育の「かくれた作用」として子どもが何を学習しているのかという潜在的カリキュラム概念が検討されるようになった。潜在的カリキュラムは、子どもは教師が教えたこと以上に様々なことを暗黙のうちに学習していることを明らかにする事を目的としている。この視点から体育授業をみると、教室で椅子に座り、教師の教える内容を習得する他教科とは異なり、身体的な活動を通して学習を進めるなどの特徴から、独特な潜在的カリキュラムの存在が指摘してきた。しかし、「かくれた作用」ははたしてここにとどまっているのだろうか。体育授業はスポーツと密接にかかわりながら、子どもが学習していく。つまり、体育においては教育とスポーツという2つの側面から「かくれた作用」が存在する可能性があり、また両者がどのような関係にあるのかといった問題の存在が予想される。しかし、教育の作用に重点的に目を向けてきたこれまでの潜在的カリキュラム研究からこれらの側面はこぼれ落ちてきたのではないだろうか。本報告の目的は、これまでの潜在的カリキュラム論において「こぼれ落ちていた領域」を体育に関わって理論的に明らかにすることである。

○潜在的カリキュラム

潜在的カリキュラムはジャクソン（1968）が教室の日常生活を観察するなかで発見され、一般的には「子どもが学校生活にうまく適応していくために学び取っていく規範・価値・態度など、実践行動面での知識内容」として研究がなされてきた。また分析のレベルは、①学級・授業場面における相互作用（ミクロレベル）②教育組織での社会関係（ミドルレベル）、③教育システムによる社会的統制・選別（マクロレベル）に分けて分析されてきている。しかし、潜在的カリキュラム研究が概念的に広がり、研究がなされるに従って理論的な曖昧さが指摘されており、実証研究が求められるのと同様に、概念の精緻化が求められた。高旗（1996）は「潜在的カリキュラム」概念をゴードンの議論から再検討をした際に「潜在的」という言葉を「見えない(latent)」と捉える立場と「隠された(hidden)」と捉える立場に分けて整理している。「見えない」とする立場は学校生活を生き抜くために習得している価値内容の特定を重視する立場と、行為者の解釈の分析を重視する立場があり、

「隠された」とする立場は社会的統制、文化的・経済的不平等の再生産に対して隠す主体を想定する立場と、想定しない立場に分けて研究を捉え直している。このように「見えない」「隠された」という概念図式で整理された潜在的カリキュラムと分析レベルと併せて捉えると「見えない作用」はミクロ・ミドルレベルとして研究されており教師と子どもの相互作用に着目している。「隠された作用」はマクロレベルにおいて学校と社会の関係を政策的な視点から捉えている。つまり、潜在的カリキュラム研究は「ミクロ・ミドル分析－見えない作用」と「マクロ分析－隠された作用」という2つの性質において分析されてきたと言えるだろう。これらのことから教科としての体育に目を向けてみる。

○体育とスポーツ

体育における潜在的カリキュラム研究に目を向けると、ペイン（1975）がはじめに取り組んだとされ、ジェンダーや人種といった社会的文脈が教育の成果と関連していることを明らかにしている。また、ティンダル（1975）は体育授業のバスケットボールにおける秩序形成に着目し研究を行っている。これらの研究は、潜在的カリキュラムのミクロレベルの分析から「見えない」作用を明らかにしている。その後のカーク（1992）がディスコースとイデオロギーという視点から研究している。スポーツに関するディスコースの形成として、体育の潜在的カリキュラムがイデオロギーの乗り物としてスポーツを子どもたちに内面化していることを明らかにしている。この研究は、マクロレベルの分析から「隠された作用」を明らかにしている。このように体育における「かくれた作用」はジェンダー・イデオロギーといった教育に対する言説空間を構築しており、これまでの教育のもつ「かくれた作用」と同様に「ミクロ－見えない作用」、「マクロ－隠された作用」として捉えることができる。

一方で体育の学習内容として捉えられている「スポーツ」に目を向けて「かくれた作用」を見てみたい。スポーツにおける「かくれた作用」は「教育的分析」な分析とは異なり潜在的機能として捉えられてきた。潜在的機能とはマートン（1961）によって概念化され、頗在的機能と分けて捉えられた概念で、行為者に意図されず、認知されないもので、主観的意図と客観的結果が食い違う場合を指す。大村（2004）はスポーツが「鎖めの文化」の側面を持つことをみいだし、スポーツにおける「かくれた作用」は、人々を生活世界から解放し、「実力差」を誰にも納得させ、己の“分”を知ることであると指摘している。この「かくれた作用」を潜在的カリキュラムの概念に当てはめると「マクロ－見えない作用」として捉えられる。

このように体育という教科において「かくれた作用」の言説空間を見るとこれまでになかった領域が見えてくる。つまり、体育の研究における「かくれた作用」は教育という行為が持つ言説空間と同様の作用を明らかにしてきたが、学習内容であるスポーツにおける「かくれた作用」は「マクロ－隠された作用」という関係にあり、これまでの潜在的カリキュラム研究においては捉えきれていないことが明らかとなった。教育における「かくれた作用」と学習内容の「かくれた作用」を見ることによって、潜在的カリキュラム研究として「みえなかった」部分が浮き彫りになってきた。

○まとめ

学校教育の中で、頗在的に語られていること以上に、子どもはどのような事を学習しているのかについてこれまでの潜在的カリキュラム研究を「見えない」「隠された」という視点から概観してきた。そこから、潜在的カリキュラム研究は、イデオロギーや権威に対する態度など教育という行為が持っている「かくれた作用」について分析方法と潜在的な用語の捉え方の違いに着目すると「ミクロ・ミドル分析－見えない作用」と「マクロ分析－隠された作用」として明らかにされてきたことが見て取れる。しかし、教科体育における「かくれた作用」についてみると、学習内容のスポーツを取り入れることで「マクロ分析－見えない作用」という領域が浮き彫りになってきた。つまり、これまでの潜在的カリキュラム研究では「かくある」という子どもの姿を捉えきれていなかったのである。

小学校教師の職業的社會化における體育科授業研究が及ぼす影響に関する研究
—ライヒストリー研究を視点として—

A study about the influence that a physical education class study in the occupational socialization of an elementary school teacher gives.
～A life history study as a viewpoint～

鈴木 智（東京学芸大学附属世田谷小学校）
SATOSHI SUZUKI (Setagaya Elementary School Attached to Tokyo Gakugei Univ.)

1. 問題の所在と研究目的

本研究の目的是、現役教師のライヒストリー研究を通して、小学校教師の職業的社會化に見られる要因を、體育科授業研究を視点に提起する点にある。

教師の職業的社會化において、授業研究が及ぼす影響は大きいものと考えられる。今回の研究対象である體育科授業研究のフィールドは、このことを明らかにする上で多くの情報を与えてくれる。體育科は実技教科であるため、授業研究の中身は、教授方法研究、技能分析研究、學習過程研究と多岐に渡る。また、學問体系が明確ではないが故に、教科内容研究、授業論研究、教材論研究というものまでがその対象となりうる。そのため、小学校の授業研究において、体育を研究教科として選ぶ教師は多く、その研究も盛んである。

今回、特に注目したい点は、東京都の管理職の中で體育科を研究中心教科としていた者の割合が多いという現状である。これは、何を意味しているのか。体育を研究する教師は、全科を教える小学校教員であっても教師自身がスポーツ経験者であったりスポーツに対して好意的なスタンスであることが予想される。スポーツの総社会の中で育ってきた経験は、上司と部下という関係に対して、スムーズに受け入れる土壤となっていると考えられる。さらに、小学校において、体育主任という校務分掌の存在にも注意したい。運動会や水泳指導、体力テストやスポーツ大会等、小学校の行事は体育的なものが大変多い。その行事や教育活動の中心となるのが体育主任であり、教師になって数年目の若手が登用されることが多い。その立場と環境において、若手教師は全校児童に対する指導を経験し、職場のリーダーとして活躍することになる。つまり、学級だけでなく学校全体を考える環境が、体育を研究対象にする教師には自ずと用意されているのである。組織の中での役割をわきまえ、周囲からの期待に答えられるように立ち振る舞う経験は、学校をリードする立場になることへの目標意識を生み出すことにつながり、将来管理職になっていく基盤になっていくと考えらる。

一方で、体育教師につきまとうステレオタイプ化について考えてみたい。体育教師は明朗で付きあいやすく、子どもにとっては兄貴分のようなイメージがある一方、威圧的、支配的権威主義的であるというイメージが伴って画一化される傾向がある。（佐伯 1992）このイメージは、時には頼りがいがあり、時には権威性を伴う強いリーダーシップを發揮する事を求められる理想的な管理職の資質としても捉えることができよう。これは、體育科を研究する教師は、職業的社會化の過程において、管理職の特性を身につけやすい環境におかれていると言える。

次に、授業研究という視点で考えてみたい。体育を研究する教師には、研究授業の授業者になることを「名誉なこと」と捉える傾向がある。東京都には、一年間の教育研究員制度というものがあるが、（ただし、平成16年度に廃止）研究員に推薦されるためには、各地区の体育部研究組織での貢献度が重視される。また、研究員になること自体が昇進への登竜門だという捉え方もある。現に、中堅と言われる30代後半から40代初めに研究員に推薦され、1年間の研修期間が終わると主幹、副校長、指導主事などになっていく教師が多いのは事実である。つまり、授業研究は昇進のための手段だという捉え方ができよう。しかし、本来の授業研究の意義は、実践を振り返り明日の授業をよりよくしていくべきものである。そう考えると、授業研究を昇進の手段とする在り方には疑問が生じてくるのである。

新井（1993）は、校内研修や現職研修は、意図的職業的社會化であると位置づけており、その理由を、自己研修は個性は溢れる教員の主体的自己形成に通じるとしている。しかし、教師の職業的社會化を対象とした研究においては、職業規範や期待される役割遂行、経歴形成を視点とするものが多く、授業研究を視点に論じられているものは多くはない。

そこで、本研究では、現役教師の三人のライヒストリーを通して、小学校教師としての成長及び職業的社會化に見られる要因を、體育科授業研究を視点に解明していくこととする。このことは、體育科における授業研究の在り方を問い合わせ直し、また教師教育や研修制度を考える上でも基礎的知見になると思われる。

3. 研究方法

インタビュー法を用いたライヒストリー研究によって研究目的に迫った。調査対象は、民間研究団体において精力的に活動しており、管理職への進路は全く考えていない50代のA教師、官製及び民間の研究会において研究活動を深め、現在主幹を務めている40代のB教師、そして、現在校長として学校経営に携わっているC校長の3名である。教師としての成長過程において、授業研究から何を得てきたのか、また研究会に何を求めてきたのか、さらに、教師としての進路選択の際の決定要因を中心に聞き取り調査を行った。

4. 結果と考察

現在主幹をしているB教師は、新卒以来体育の授業づくりのために民間・官製の研究に専念してきた。授業研究の授業者には、「毎年必ずなる」という目標を持ち、実行してきた。研究授業では、「子どもが主体的に学習する姿と高いパフォーマンスを公開する」ことをめざし、日々の実践へのモチベーションを高めていくための授業研究という捉え方をしている。他校の教師からの授業評価も高く、区の体育研究会の中心人物として活躍し、先述の教育研究員にも推薦されている。しかし、「管理職への昇進」という視点はもっておらず、むしろ自分の研究を校内に広め、学校中の児童が体育が好きになることを望み、同僚に体育の授業づくりを広めるていくことに興味があったという。そのような立場であったため、主幹制度が導入されるとすぐに受験することを周囲に勧められ、41歳の時に主幹になる。そして、数年間主幹を務める中で、体育だけでなく学校運営について関心を持つようになる。必然的にそうせざるを得ない環境であったが、自分の経験を若い教師に伝えたり広めたり、よりよい学校づくりのために校長が求めるなどを具現化する主幹の仕事に誇りを感じるようになる。信頼される学校づくりを考える際、B教師は、「子どもとともによい授業をつくること」を基本に考えている。このスタンスは、紛れもなく若い頃から授業研究を大事にしてきたことが基盤になっていると捉えられる。そして、授業研究を大事にした結果、図らずも「主幹」になったことが、むしろ学校全体を考えることへのきっかけになったと本人は捉えている。そして、現在、地域とともに学校を運営していくことに対して、大きな夢と意欲を抱いている。

この事例からは、授業研究の目的は、あくまでも明日の授業をよくしていくことであり、結果として管理職を目指していくことになる教師のキャリアが認められた。そう考えると、ただ単に、手段としての授業研究を批判的に見ることに対しては慎重になるべきであろう。学校社会において、管理職の存在は必要不可欠であることは言うまでもない。管理職になるという選択は、単なる出世欲だけではなく、校内や地区での教師集団のリーダー的な存在としての期待に後を押されているというルートが存在している。そう考えたとき、教師文化を支える要素として、授業研究が管理職の道への手段的な位置づけになることは、むしろ必要だと捉えることができるだろう。また、管理職になりたいという意欲を実現する上で、授業研究がその効果を発揮しているとすれば、手段としての授業研究という位置づけは悪いこととは言えない。しかし、授業研究のフィールドに人脈づくりや頼つなぎということのみを求めるのではなく、日々の授業のための授業研究であることを忘れてはならないことは、B教師のライヒストリーからも裏付けられよう。勿論、職業的社會化における授業研究の影響はこれにとどまるものではない。発表当日は、更に詳しく述べる3人のライヒストリーから職業的社會化の要因を報告したい。

体育教師の「脳みそ」は本当に「筋肉」なのか?
 ~ラベリングと学校文化の近代性~
 Is it a true that P.E teacher's brain is made by muscle?
 ~Labeling and Modernity of school culture~

野村 圭（東京学芸大学）
 Kei Nomura (Graduate School of Tokyo Gakugei University)

体育教師のイメージと知性

突然ではあるが、ドラマや漫画に登場する体育教師を思い浮かべてほしい。筋肉質でジヤージ姿の男性教師が、遅刻する生徒を校門の前で見張っていたり、校則を破った生徒に厳しく指導していたりというような場面が、頭の中に浮かんできたのではないだろうか。そして、その体育教師の姿からは、決まってあまり知性を感じさせない雰囲気が漂っていて、視聴する側に体育教師の「脳みそ＝筋肉」というイメージを強く感じさせるものが多い。

体育教師に抱くイメージについては、様々な視点からの報告がなされている。伊藤（1992）は、大学生からみた中・高校の体育教師のイメージについて報告しており、「体育教師は、健康で体力があり、部活動の指導に熱心であり、善悪のけじめをつけ、しつけ面に厳しい。そして、積極的であり、学校行事や生徒指導の中心的存在である。また、授業も一生懸命に行っている者が多い」とまとめている。類似した研究においても、およそのようなイメージで体育教師は捉えられている。

また、体育教師の「脳みそ（知性）」と関わるイメージ研究を見ると、森（1982）は、生徒意識として「体育教師は知識や見識の広さよりも、学校のためによく働き、たよりになる責任感の強い教師」という印象がもたれて」といふと報告している。さらに、武隈ら（1986）は、大学生のイメージ調査から、体育教師は評定される際に「知識や教養の広さ」が他教科の場合より重要であることを明らかにしている。この二つの報告から、体育教師は、「脳みそ（知性）」の面において、あまり期待されていないことが伺える。

メリットクラシーと「副教科」としての体育

ところで、近代の学校は、民主主義社会の下、すべての人々に平等にひらくられた機会を提供することが期待され発展してきた。学校では、人は社会的身分や家柄などに左右されず、能力という個人的属性によって評価され社会的地位を保証されるというメリットクラシーの神話が信じられてきた。しかし、評価の物差しが身分の差から能力の差に変わっただけあり、学校において能力が絶対的なものとして重んじられるようになったことは否めない。そこでは、成績下位者は成績上位者には敵わないという観念を植え付けられしまい、学校は社会構造の再生産が行われる場所であるという批判をあびるようになった。

そして学歴社会が進む現代において、重視される能力は主要五科目のテストで高得点を取れる能力であり、その他の教科は「副教科」として授業数が減らされるなど軽視される傾向にある。体育という教科もその例外ではないため、体育を教える体育教師も軽視され、「体育教師の脳みそは筋肉だ」というようなラベルをいつの間にか貼られるようになった。

その体育教師へのラベルは形を変えて学校内に現れている。ある時は体育教師に怒られた生徒がそのストレスを発散するために、「やっぱりあの体育教師は筋肉だ」と感情論でラベルを読み上げることもあるだろう。そしてある時は、同じ立場にある教師側でさえも、そのラベルを利用していることがあるのではないだろうか。

「論力の時代」と体育教師の役割

現在の学校においては、学校の権威の衰退に伴い、それまで堅かつた規範がゆらぎ、学校内の秩序を維持することが困難になってきていると言われている。例えば、「なぜ茶髪にしてはいけないのか」、そんな生徒からの質問に対し、「校則だからだ！」という力任せの

返答では、今どきの生徒は納得しないといった状況である。現代の社会に対して、「論力の時代に入りつつある」と宮原（2005）が述べているように、質問に対しては明確なロジックを立てて答えなければならない時代なのである。しかし、毎回繰り出される生徒からの「挑発」に対し、論力で対応するには限界がある。そのような場面で登場するのが「筋肉」としての体育教師なのである。「ウダウダ言うな。校則なんだ！」というように、論力ではなく、大きな声と威圧的な態度を武器に問題を片付けてしまう。このような形で、役割としての「筋肉」教師を演じさせられ、利用（期待）されているのではないだろうか。そしてそれは、ますます生徒からの筋肉のラベルを強めさせることになるだろう。

このような体育教師へのラベリングは、「論じる」という教師としてのアイデンティティを体育教師から奪うことになる。そこで体育教師は部活動や学校行事という方向へベクトルを向け、それらの活動から評価を得ることで、何とか自己のアイデンティティを守ろうとする傾向が見られる。

ラベリング論から見た「体育教師」

社会学における伝統的な逸脱行動の考え方からすれば、体育教師はスポーツ指導ばかりして勉強をしないから、教師として逸脱していくのだというように、逸脱の原因是体育教師にあると考えられる。

他方で、ラベリング論から逸脱行動を考えると、逸脱は「他者から与えられた特性」として把握される。つまり、逸脱は「行為者とそれに反応する人との相互作用から生まれるもの」と考えられるのである。この視点から考えると、体育教師が学校において逸脱した教師と捉えられる理由は、体育教師に問題が内在するためではなく、他者からの相互作用によって逸脱させられているためだと考えられる。そして、その相互作用が生まれる背景には学校文化の近代性が深く関わっているのである。

そこで本研究では、「体育教師の脳みそは筋肉である」というラベルが貼られることの意味を、ラベリング論の視点から、中・高等学校の体育教師に対しインタビュー調査を行い、体育教師と他教科の教師や生徒との相互作用の一端を明らかにし、そのことを通して学校文化の近代性をめぐる諸問題についてさらに考察することを試みてみたい。

これまでの調査からは、体育教師自身はもちろん「脳みそは筋肉」であることを日常的には意識していないが、行事や活動があるときに担わせられる場面で、求められる役割を意識してしまうことがあるといったことや、体育教師は、「脳みそは筋肉である」といったラベルを貼られることに対して反感を抱きつつも、そのことが自身にとって有利な状況を作ることができるために一部受け入れている面も見受けられている。体育科以外の教師へのインタビュー調査を加えながら、当日の発表で詳しく報告してみたい。

【主な引用・参考文献】

- ・長尾彰夫・池田寛編（1990）「学校文化—深層へのパースペクティブ」、東信堂
- ・宮原浩二郎（2005）：「論力の時代 言葉の魅力の社会学」、勁草書房
- ・伊藤正信（1992）：「体育教師像に関する研究（その1）—大学生からみた中・高校の体育教師に対するイメージについて」香川大学教育学部研究報告 第1部（通号 86）,p17～34,
- ・森孝子（1982）：「教科別教師に対する学生の態度調査」、国立音楽大学研究紀要第16集 pp.181
- ・武隈晃・岡田猛（1986）：「体育教師の社会的地位に関する研究（II）—大学生による評価—」鹿児島大学教育学部研究紀要 人文社会科学編（通号 38）,pp.117～130
- ・木原孝博・武藤孝典・熊谷一乗・藤田英典編（1993）：「学校文化の社会学」、福音出版
- ・森田洋司（1977）：「犯罪社会学とラベリング論」、犯罪社会学研究 Vol.2 pp.120-141

運動部活動における教師一生徒関係の記述的研究

A Descriptive Study of the Teacher-Student Relationship in Extracurricular Sports Activities

—都内公立中学校ラグビー部のフィールドワーク—
Fieldwork in the Rugby Club at a Public Junior High School in Tokyo—

○中澤篤史（東京大学大学院）Atsushi Nakazawa(Graduate School of Tokyo University)

1. 問題の背景と先行研究の検討

運動部活動は、現行の学習指導要領から「クラブ活動」が削除されたことで学校教育内の位置づけが一層不明瞭になった。さらに顧問教師の不足なども相俟つて、その制度的な基盤が崩れつつある。こうした状況で、外部指導者の導入、地域との連携／への移行といった運動部活動改革が行われている。ここで注意すべきなのは、その変化が指導者や子どもの関わり方およびその関係に影響を与え、引いては学校が果たしてきた機能を変化させると予測される点である[西島他,2002:101]。こうした予測を検証するためには、第1に運動部活動における教師・生徒関係(teacher-student relationship)の実態を、第2にその変化の過程を記述する作業が必要である。本研究では、この内、第1の作業を主題としたい。

ここで、まずその顧問教師が生徒へどのように振る舞うかを捉えようとする時、彼らが「教師／コーチ役割(teacher/coach role)」の二重性を帯びている点に留意する必要がある[Locke&Massengale,1978; Bain,1978; Sage,1987,1989]。ここで言う教師役割とは授業や公務、生徒指導といった学校教育に関わって遂行される振る舞いを、コーチ役割とは勝利達成に向けた技術指導などのスポーツに関わって遂行される振る舞いをそれぞれ指して、定義されている。つまり顧問教師は、授業場面では教師であり、運動部活動場面ではコーチであるという訳だ。確かに、顧問教師の行動は両場面で違い[Rupert&Buschner,1989]、またそもそも両場面では対象集団や課題特性も違う[Chelladurai&Kuga,1996]。それゆえ、両場面を掛け持つ顧問教師は、両者への時間・エネルギー配分を巡り役割緊張(role strain)や役割葛藤(role conflict)を抱え、両者の役割関係(role relationship)についても、例えば教師役割よりもコーチ役割へコミットメントの重み付けを与えたり、逆にコーチ役割から撤退したりもする[Sage,1987:222-223]。

ただし以上の研究では基本的に、役割とそれを遂行する場面が1対1対応していると仮定されている。すなわち、教師役割は授業場面で、そしてコーチ役割は運動部活動場面で遂行されると仮定されている。けれども、本研究の主題に引き付けた場合、運動部活動場面での顧問教師の振る舞いは、果たして、コーチ役割のみを純粹に遂行しようとするものなのか。こうした疑問が沸くのは、特にわが国の運動部活動では、その目的や性格において教育なのかスポーツなのかの弁別が不明瞭であり[福田,1988;久保,1998:259-269]、また佐伯[1988]が指摘するように、それが学校教育システムに密接に結びながら生徒指導の手段として認識されているからである。こうした指摘を踏まえると、運動部活動において顧問教師は、コーチ役割だけでなく教師役割も同時に、あるいは両者を整合的に接合させようと振る舞うのではないか。実際、サッカー部の選手選考の条件として、技術よりも生活状況や生活態度を優先させる公立中学校教諭の事例が報告されている[奥村,2000]。こうした事例は、顧問教師が運動部活動場面で、コーチ役割のみを遂行している訳ではない可能性を示唆している。とすれば、運動部活動で構築される教師・生徒関係は、顧問教師が、自らの価値観や経験に従って教師／コーチのどちらの役割を重視し、また生徒の特徴に合わせてどちらの役割遂行を目指そうと振る舞うかで、違ったパターンを示すのではないか。

2. 本研究の目的と方法

本研究の目的是、運動部活動における教師・生徒関係を、顧問教師の教師／コーチ役割を視点として記述することである。方法として、観察調査・インタビュー調査および文書資料解析を組み合わせた質的方法による事例分析を採用した。対象は、長期的に継続した観察が可能な都内公立ミナミ中学校ラグビー部(仮称)を選定した。観察調査は2005年1月から開始し、放課後の活動や大会も含めて、月2回ほどのペースで行い、現在も継続中である。またミナミ中全体の様子として、他の部活動の練習風景や公開授業等も観察した。観

察調査結果はフィールドノートに記録した。インタビュー調査結果はフィールドノートに記録した他、フォーマルインタビューに関しては許可を得た上でテープ録音した。

3. 顧問教師の教師／コーチ役割とその優先順位

ラグビー部の顧問を務めるオカダ教諭(男性,34歳,仮称)は、教師生活12年を迎えた体育科の教師である。オカダ教諭は、ラグビー協会と日本体育協会公認の指導資格を持っており、部の目標については、「チャンピオンスポーツだから、公式戦は勝つことを目標にして」と語る。しかし一方で、生徒を「プロに送りたいとは思わない」とも語る。その理由は、彼が、勝利以上に優先する目的として「教育的効果」を考えているからである。オカダ教諭は、「教育的効果」を「当たり前のことを当たり前にする」と定義し、その範囲は曖昧ながら、具体的には「時間を守る」「挨拶をする」「規則を守る」など、生徒指導面での効果を指していた。オカダ教諭は、ラグビーを通じた生徒との関わりが「生活指導上のしつけの部分に繋がってくる」と信じ、こうした働きかけを積極的に行おうと意識していた。オカダ教諭は、自らの教師／コーチ役割の二重性を認識した上で、教師役割に優先順位を置き、その役割を重視して生徒に対して振る舞おうと意識していたのである。

4. 顧問教師の主觀による生徒の分類と、それへの関わり方

オカダ教諭は教師役割を重視していたが、彼の場合、教師役割の中でも、規範の内面化を目的とした生徒指導の遂行が特に重視されていた。こうした視点からオカダ教諭は生徒をまなざし、部活動も含めた学校生活での遅刻や宿題の提出といった生徒の生活態度に目を光らせていた。つまり〈生徒態度の善悪〉が、オカダ教諭の主觀による生徒の分類基準であった。当然、オカダ教諭は、生活態度が悪いと認識した生徒を改善しようとする。だがその関わり方は生徒の特徴によって異なる。たとえば競技志向の強いレギュラー選手が夏休み明けに宿題を提出しなかった時、オカダ教諭はその生徒の公式戦出場を許可しなかった。さらにこうした生活態度面で問題があると判断された生徒には、「やめちまえ」「もう来るな」などと、部への参加自体を禁止する威圧的な発言を投げかけました。否定的なサンクションでもって生活態度の改善を図ろうとしていた訳である。ただしオカダ教諭は、威圧的な発言を浴びせる対象は、「(ラグビーに)食いついてきてるヤツだけ」であり、「だからだらやってて、ほんとにラグビーに食いついてきてないのには、言わない」のだと言語る。彼はその理由を、こうした競技志向の弱い生徒は部をやめてしまうからだと説明する。オカダ教諭の生徒への関わり方は、生徒の〈競技志向の強弱〉で異なっていたのである。

本事例で観察された顧問教師の振る舞いは、教師役割に優先順位を置きながら、巧みにそれをコーチ役割と交換／接合させることで、「教育的効果」を得ようとするものであった。

発表当日は、さらに顧問教師の振る舞いとそれに対する生徒の受け止め方について、特に、こうした振る舞いによって生徒は果たして規範を内面化していくのかに焦点を絞って、より多面的に運動部活動の顧問教師・生徒関係を記述的に整理して報告したい。

[付記] 本研究は、平成17-18年度科学研究費補助金基盤研究(B)「中等教育における部活動の実態と機能に関する臨床教育学的研究」(研究代表者:西島央)の研究成果の一部である。

文献

- Bain,L.L.(1978).Differences in value implicit in teaching and coaching behaviors. *Research Quarterly* 49(1),pp.5-11.
- Chelladurai,P.&Kuga,D.J.(1996).Teaching and coaching :Group and task differences. *Quest*,48,pp.470-485.
- 福田俊治(1988)「学校運動部」森川貞夫・佐伯聰夫編著『スポーツ社会学講義』大修館書店,pp.263-266.
- 久保正秋(1998)『コーチング論序説—運動部における「指導」概念の研究—』不昧堂出版。
- Locke,L.F.&Massengale,J.D.(1978).Role conflict in teacher/coaches. *Research Quarterly* 49(2),pp.5-11.
- 西島央・藤田武志・矢野博之・荒川英夫・中澤篤史(2002)「部活動を通してみる高校生活に関する社会学的研究—三都県調査の分析をもとに—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』42,pp.99-129.
- 奥村亮一(2000)「外部指導者」を導入するにあたって押さえるべきポイントとは」『体育科教育』48(9),pp.34-37.
- Rupert,D.&Buschner,C.(1989).Teaching and coaching :A comparison of instructional behaviors. *Journal of Teaching in Physical Education*,9,pp.49-57.
- 佐伯聰夫(1988)「転機に立つ運動部活動」『体育科教育』36(3),pp.18-20.
- Sage,G.H.(1987).The social world of high school athletics coaches :Multiple role demands and their consequences. *Sociology of Sport Journal*,4,pp.231-228.
- Sage,G.H.(1989).Becoming a high school coach :From playing sports to coaching. *Research Quarterly* 60(1),pp.81-92.

型と身体：能楽と武道の比較において
 "Kata" and the body: A Comparative Study of Noh and Budo

服部 直

龍谷大学大学院社会学研究科博士後期課程

Nao Hattori

Doctoral Program, Graduate School at Ryukoku University

はじめに

日本の伝統文化が崩壊しつつあると言われて久しい。この問題はまた、つねに「型」という言葉とともにあるといえる。文化と型は密接に関連しているからだ。したがって型の意味内容は多岐にわたる。ところで、文化の崩壊を目の当たりにした人々は、その状況に対してどのような態度・行動をとるのだろうか。私たちが想定できる一つのパターンは、崩壊する以前の、あるいは崩壊間近の伝統文化に回帰するというものではないだろうか。そのきっかけとなるのが型である。本発表もまた、対象として能楽（世阿弥）と武道（嘉納治五郎一柔道、阿波健三一弓道）を取り扱うために、その流れのなかにある。まずは、型の意味内容を明らかにしておく。（*発表の全体を要約して提出するべきであったが、部分的な内容に留まることをお詫びする。）

型について

型の問題については、すでに源了圓（1989、1992）や山口昌男（1983）などが取り組んでいる。ここでは、私たちの目的に必要な限りにおいて、源脱を要約しておく。現在使われている型という文字は、「法則になる士がた」つまり「鉄型」に由来している。この文字の意味は、「それに従えばいくつものコピイが作られるもとになるもの」である。しかしこのような型の意味は、型の持つ多義性のほんの一部でしかない。そこで、型という言葉が、西洋語の pattern, type, style, form という意味内容を異にする4つの言葉の翻訳話としてあてられたということに注目し、ここでは type, style, form の3つをとり上げる。

それらの定義を暫定的に行なえば、*<type : 類型、典型>*、*<style : 様式>*、*<form : 型、形>*となる。このうち type, style は、相互に関連している。type の一例は、M. ウェーバーの行為の4類型である。ウェーバーは、行為者の主観的に思念された意味に従って、行為を4つに類型化した。つまり type は、ある分類軸（思念された意味）にしたがって、複雑に入り組む実在（行為）の諸様相がある程度整理される方法、あるいはされた結果である。それは他との比較においてひとつの特徴的な内容を持つために、「典型」でもあります。つぎに style であるが、これはたとえば目的合理的行為が行われる様式といった意味である。あるいは方法（茶の湯における「作法」）と言い換えてもいいかもしれません。そして最後の form における型とは「形の形」である。「『型』は『形』を通してあらわれるが『形』そのままでない」（源、前掲書、p.28）。また源（1989）は、形は空間に描き出されるものとしている。以上の断片的な記述から、①型は形の上位概念である②型は不可視性を特徴とし、形は可視性を特徴とする③型は時間に関わり、形は空間に関わる、という3つの命題を導きだすことができる。さらに源はこれらの型や形はいずれも、身体にかかわるという。しかし彼の身体論は明確ではないため、この点を補っておく必要がある。

身体について

身体は制度の内部における物でありながら、物であることを越えてゆく、生きたシステムである。この生きたシステムは、上層と下層に区別することができる。まず上層には、分節された身体が位置づけられる。私たちは、特定の文化の内に生きるのだが、たとえば歩き方、箸の使い方ひとつをとっても、特定の身体の動かし方（パターン）を有している。（*ここでいうパターンとは、さきに考察の対象から除いた、pattern としての型とは次元が異なる。パターンは、全体としての文化に下層する部分であり、pattern とは、そうした部分としての諸パターンの体系から、全体としての文化の特徴的なテーマ——たとえば「日本文化は『箸の文化』である」という命題——を直観的にとらえたものである。）このパターンはある程度文化によって規定されているが、

もちろんパターンの変容ということもありうる。ともあれ、身体の上層にはこうした諸パターンが貯蔵されており、同じ文化に所属する人々によって共有されている。つまり、この身体運動のパターンは文化によって分節化された制度をなしているといえる。逆にいえば、文化とは身体の諸パターンの体系であるといふことができる。この分節化された身体は、文化がそうであるように、〈文化／自然〉、〈自／他〉のような世界を分節化する根本的な範疇（カテゴリー）を前提としている。自己の身体と他者の身体は区別され、そのことは疑われることもない。亀山佳明（1998）にならって、この上層の身体を〈制度身体〉とし、さらに下層の身体を〈錯綜身体〉とすることができる。

この錯綜身体は、制度身体と異なって分節を持たず、「つねに志向する対象に巻きついで一体化（unity）を達成する身体」である（亀山、前掲書、p.262）。つまりいま・ここ・私は、〈いつか・あそこ・誰か〉に向かうとともに、この両極はたえず入れ替わる。この錯綜運動のために、錯綜身体は多様な対象と一体化し、また多岐にわたる方向にも移行する。身体は多様に拡散する複雑多岐な身体性をもたずにはいないのである。しかし逆にいえば、この拡散する身体性を有することは、生体としては世界に適合するには浪費が大きく、不適合となる。そこで生体として生存してゆくためには、この多方向に限定を加える以外に道はない。錯綜身体は、みずからの内部からみずからの複雑性を縮減する身体を生み出し、いわば自己が自己に枠をはめる。この自己の先方に投射された身体が、上層に位置する制度身体である。下層の錯綜身体が対象との一体化によって生成（新たな対象との新たな関係（パターン）の創造）を担うなら、上層の制度身体は生成の無方向性と無限定性を制限することによって、安定した方向づけを与えるのである。実際の身体活動においてはこの両層が作用している。たとえ「同一のパターンの反復とみえる日常的な身体活動（たとえば食事の仕方）においても下層の錯綜身体が働いている」（亀山、前掲書、p.262）のである。したがって、本節の冒頭で、身体は一面において物であると規定したが、精確にいえば制度身体もまた微細に変容しているのである。

おわりにかえて

おわりにかえて、型と身体の関連、発表の全体的見通しについてのべておく。まず form としての型であるが、これは形と解釈したい。身体論の立場からは、形は上層における特定の身体の動かし方である。では型はどのように位置づけられるのか。先にも述べたように、型は多様な意味——type, style, form——を帯びていた。したがって型は、それを部分的に示す多様な概念の上位概念であると解することができるのでないだろうか。さらにいえば、型は時間に関連するのであった。ここでいう時間とは、時計によって刻まれる、つまり分節される時間ではなく、A. ベルクソンのいう分節化されることのない、流れる時間ではないか。とすれば、型とは身体の下層に位置する錯綜身体のことである。私たちはこの意味での型を「原型」としておく。日常生活において私たちは、錯綜身体を知覚することは困難である。それは知覚されるもの（制度身体）の背後にあって、それを成立させているものである。このように型（原型）を定義した場合、type, style, form も幾つかその意味が明確になる。さきに述べたように type は、複雑に入り組む実在について、その複雑性を整理したうえで得られるものである。そして style は、源によればこれは「複合された型」であって、能楽や武道などにおける稽古・修行の過程として、時間の要素がそこには加味されている。また form (形) について源は、「鉄型」に由来する型の文字との関わりにおいて、彼の対象とする型（形）が共通性と差異性を持つという。さきに述べたように、一方においてそれは「それに従えばいくつものコピイが作られるもとになるもの」という意味を持つが、しかし「人間の型（発表者：形）の場合は、絶えず練習・修練を反復しないと、型（形）それ自体が型（形）でなくなってしまう。身体を型（形）とする場合に不確かなもの上に確かにものが形成されている」という（源、1992、p.11）。つまりは、形は原型によって揺らめき、その稽古・修行の過程は、いわば錯綜身体の複雑性の縮減のために行われると言つてよい。本発表では、こうした立場から、能楽と武道における型の習得を類型化（type）し、そこでの様式（style）を明らかにすると同時に、さらにそれぞれに特徴的な形（form）について提示する予定である。

武道における精神性と身体感覚
The cosmology and somesthesia in Aikido

森山 達矢（純真女子短期大学）
Tatuya Moriyama
Junshin Women's Juniorcollege

私は自分の身体を手段として世界を意識するのである。 —メルロ・ポンティ

本報告において中心となる問題は以下のことである。武道において「身体感覚」はいかにして伝達されうるのか、ということである。

武道の稽古において重要なのは、身体感覚である。この場合の身体感覚というは、「技」が滞りなくうまく遂行できたときの身体内部の独特的な感覚のことである。稽古の目的は、「型」を何度も行いそれを覚えるということでもあるが、それ以上にこの「独特の感覚」を獲得するということである。しかし、それは非常に文字通り感覚的で個人的・主観的なものであり、客観的には捉えられないものである。しかし、道場における稽古というのは、独りで行うものではなく相手が必要であり、また技量が一様でない人たちの中で稽古が行われている。自分の技量がある程度に達すると、初心者に教える機会が出てくる。つまり、教えられる存在でありながら、「教える役割」を担うようになるのである。そして教える役割を果たす場合、先の非常に主観的な身体感覚を伝えることが必要となる。

このように、非常に個人的・主観的な感覚的なものであり、また言語化するにも非常に困難な対象を伝達の実践が道場では行われているのである。問題は、この実践において、言葉の担う機能はいかなるものなのかということである。そして、この実践において、その武道の持つ世界観（=精神性）がいかなる機能を果たしているかということ、これらのことことが本報告の論点である。本報告では、報告者自身の武道の稽古経験を通して、「身体的実践・その伝授のあり方」と「精神性と言葉」の関係についての一断面を記述することである。

身体技法の伝授という実践に関する議論として真っ先に挙げられるのは、生田（1987）や倉島（2002）のそれである。本発表は、倉島の議論を比較の対象としながら論じる。

倉島の議論においては、身体技法における「感覚」が、どのような諸実践において身に付くのかということを中心的に論じている。その過程において、武術の精神性の強調や「イメージ」先行の練習は身体の感覚を抑圧するという、彼の武術の先生の言葉を引いている。倉島は、この時点の議論においては、この言葉を全面的に受け入れている。

「精神性」や「イメージ」が身体感覚を抑圧するということは、彼自身の体験が証明しているけれども、その逆も言えるのではないかということが、報告者の論点である。すなわち、「精神性」、それと結びついた「イメージ」（言葉）によって身体感覚を呼び起こすこともあるのではないか、ということである。

報告者を行っている武道は合気道である。報告者がフィールドワークを行っている合気道の会派は、「呼吸力」の養成ということを中心に稽古を行っている。この会派の稽古は、この「呼吸力」（という力の出し方）を体得するためのものである。この「呼吸力」とは、それこそまさしく説明し辛いものである。とにかく、普段われわれが使いような力ではない、なにか不思議な力としか言いようがないものである。できる限り言語化すれば、次のように記述できる。呼吸力を受けるときは、明らかに筋力に頼ったものではない「力」を感じ、気が付いたら腰と膝が碎けたように体勢が崩れるような感じである。このとき、「個人的な感覚」として、「嫌な感じ」はない。また、呼吸力を發揮することができたときの感覚は、ほとんど力を入れていないのに相手が勝手に浮き上がったり、勝手に相手が崩れるような感じである。このときの感覚は、自分の身体が「すうっと」透明になるような感じで、なんの隠みもなく相手に力が流れているような感じである。このような「感覚」が稽古の手掛かりとなっている。そしてこの感覚を身に付けることにおいて重要な指針となっているのが、師範の語る「合気道の精神」であり、師範の「言葉」である。

我々の会派のS師範は自分の使命を、手を取らせ、技を通じて「合気道の精神」を人々

に伝えていくことであると常々言われている。そして師範の考える合気道の精神とは、次のことである。武道とは、腕力や凶器をふるって、相手の人間を倒したり、戦争などで、世界を破壊に導くことではなく、真の武道とは宇宙の気をとらえ、世界の平和を守り、森羅万象を正しく生み、守り育てることである。そして、万物は「むすび」で生成発展し、これが「天の理法」であり、天の理法とは陰と陽の結びである。こうした「むすび」をわが身心の内で鍛錬することが、真の合気道である。常に師範が強調されるのは、「合気道は精神性が技として表される」ということである。つまり、心のあり方が技にそのまま反映するということを何度も言われる。

S師範は、「呼吸力」を次のように説明している。呼吸の調和が取れているときが安定しているのであり、その安定した状態から力が出たとき、真の強さが出る。しかし、相手を意識したとき安定を失う。すべてを任せきる気持ちにならないと呼吸力は出ない。呼吸力は、体力的な力ではなく、心の世界が相手と一緒になる気持ち、万有と一つになる気持ち、むすびの心にならない限り發揮できないものである。相手を体力で倒そう、やっつけでやろうと思う心からは呼吸力は出ない。相手と一緒になるとする素直な心があつて初めて力が抜ける。力が抜けないと、相手の中に自分の力は流れない。相手の中に流れる力が呼吸力である。そして、この呼吸力こそが「合気道の精神」を表現したものである、と言われる。

また、師範は稽古の中で次の言葉をよく言われる。「無敵ということは、肉体的に誰よりも強くなることではなくて、決して敵を作らないようにすることなのです。このことを言葉ではなく、（呼吸力を通して）体的なものとして現して、伝えてゆくのです。」

稽古時においても、上記のことが反映されている。実際の稽古においても、先生や指導者が繰り返し強調するのは、「捉える」「相手にまかせる」「相手と一緒になる」「敵をなくす」「天地と一緒になる」ということである。

実際にS師範の技を受けたときの感覚は、いつの間にか投げられているという感じであるし、投げられて「嫌な感じ」はほとんどない。無理やり投げられるという感じは起きない。言ってしまうと、「敵懾心」は起きない。それに比べて、初心者の技は、目に見える型ばかり真似し、やはり（筋）力に頼るような投げを行うので、身体的な抵抗が起き、「嫌な感じ」＝「敵懾心」が起きてしまう。つまり、「敵」を作ってしまうのである。

また、報告者が直接指導をいただいている先生の説明のあり方も、師範の教えに従つたものとなっている。技を実演しながら、「こうすると相手と切れてしまう方向で、こうすると相手と一緒になる方向…」というように説明することが多い。

この会派では、「捉える」とか「相手にまかせる」という非常に抽象的なアドバイスは、この「嫌な感じ」（敵懾心）を相手に持たせないとということと結びついており、普段の稽古の中での重要な指針となっているのである。そしてそうした指導は、単なる精神性の強調ということのみを意味しておらず、「技の感覚・技のあり方」それ自体が、合気道の精神性や世界観と結びついているとされている。それがゆえに、非常に精神的とも宗教的ともいえる言葉が、稽古者の身体感覚の開発を媒介しているのである。道場生は、師範から技を受けた感覚、そこに表れているとされているこうした精神性・世界観や言葉、そこから醸し出されるイメージなどを導きの糸しながら、稽古を行っているのである。

このように、合気道においては、身体技法・身体感覚がその世界観・精神性と強く結びついている。身体性と世界観の結びつきはこれまでも指摘されてきたが、身体感覚の伝達という視点から見れば、身体技法・身体感覚と世界観と非常に密接な繋がりがあるということも指摘できる。「身体」の分節化という視点から社会を見ることもできるが、「身体感覚」の分節化という視点から社会・文化を分析することもできるのではないか、ということができる。

＜参考文献＞

- 生田 久美子 1987 『「わざ」から知る』、東京大学出版会
倉島 哲 2002 「武術教室における身体技法の習得——「線」の感覚を手掛かりに」（『日常実践のエスノグラフィー』田辺・松田編、世界思想社、p.142-p.167）

共振する社会的身体——その① Synchronizing Social Physic--1

小谷寛二（福山平成大学）
Kotani Kanji (Fukuyama Heisei University)

キーワード：
共振する身体、社会的身体、共通感覚

序　論

かつて「身体を共振させる」機会は日常生活に溢れていた。父・母・兄弟は見事に呼吸を合わせながら餅つきをした。歌いあい、遊びあい、挨拶しあうといった他者との接触の場は、「身体共振」の豊かな土壤であった。人間は「自らの身を共振の場」に投することにより、他者との関係性はもとより自身に対する理解を深めたのである。「ともにある身体」「交わる身体」から「共通感覚」に呼びかけ、それを震わせるのである。

元来、スポーツはこうしたコミュニケーション能力、特に共感・共鳴、共働的能力を養う場でもある。よって、スポーツは教育の場に取り入れられた。このような「身体の共振」は、自チームのプレイヤーのみならず、相対している相手、果ては観客をも巻き込んでゲーム全体（エーブル）を動かすのである。スポーツ場面は「身体が共振しあい」ながら、生命の宿るリズムを創成する場である。

身体文化は、業績主義的で「見世物化」するものや、健康・福祉のためのもので「規律・訓練化」するもの、そして、自然とかかわり祝祭的でコミュニケーションする身体として生きられた「共振する身体」をよりどころとするものが考えられる。では、「共振する社会的身体」の問題をより深めてみよう。

本　論

1) スポーツに見る「共振身体」

元来、スポーツはコミュニケーション能力、特に共感・共鳴・共通性の能力が養われる場でもある。したがってスポーツは教育の場に取り入れられてきた。体育科の目標は、心と体を一体と捉え、積極的に運動に親しみ、健康の保持増進の実践と体力の向上の3つの目

標が互いに関連しているようにしてきた。

内野ゴロをショートが補給してセカンドにトス、セカンドはすばやく2星ベースを踏んでファーストへ、ゲットウ、アウト。こういった身体の共振は、自チームのプレイヤーのみならず、相対している相手、観客をも巻き込んでゲーム全体を動かす。

2) 共振できない子ども達の誕生

少子化する環境の中で、孤独に電子ゲームする子ども達は、やがて「共振できない子ども達の誕生」となるであろう。子供のコミュニケーションは、家でもなく、地域でもなく、中間集団でもなく、今や学校しかないという状況になりつつある。学校でいじめられると、一人でゲームをして遊ぶしかない。だから学校ではできるだけ自分を殺し、主張せず虚構の世界に生きている。

図1において、圧倒的に優位とされる「言葉の世界」においては、生後2,3歳でしゃべることが期待されている。

(概念世界 > 言葉世界 > 感覚世界)

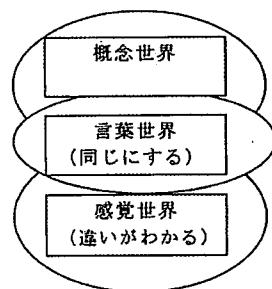


図1 子どもの世界

2・3歳で、「概念の世界」による「言葉の世界」優先の子ども達。。。無意識に同一化を求める子ども達。「感覚の世界」からの生成的言葉の発見からは程遠い。

言葉の世界を概念の世界からのみ引き出し、理解を強要される子ども達。経験世界での感動から、それを言葉にし、実感する人生の送り方を如何に身につけるかが問われている。

3) 共振する身体

① 海鳥の孵化：親子の共振本能

太平洋の無人島にて、チーチーと海上でなく親鳥、ピヨピヨと鳴く孵化したが飛び立たないヒヨドリ、やがて、島の崖から海へ親

求めて転げ落ちていく何千羽というヒヨドリの群れ。しかも何千羽の中での光景。それでも確実に親は子、子は親を見つけ出す。

② 「共振しない身体」と「共振する身体」：

清水；近代の規律訓練された「共振する身体」、身体と身体をつなぐ「間身体」。身体をよりどころとした北欧の体操。そしてそれが社会運動へと続く。第3の身体文化としての、「共振する身体」、すなわちコミュニケーションする身体文化の創造。

③ 「リズムと共振する身体」：

亀山；私のリズムとあなたのリズムが出会うとき、ともに波動であるなら、両者のリズム間に共鳴作用による<共振>が生じるはずである。拍子とリズムは違う。リズムは生きているもの、拍子は機械的なもの、死んでいるもの。リズムが消え入りそうに弱いとき、拍子を立てながら、拍子が抵抗となって弱体化したリズムを增幅する。拍子はリズムを誘導・調整することも可能である。リズムは、拍子が欠けていても、きわめて完成された形で現れるが、拍子はそれに対して、リズムの共鳴なくしてあらわれ得ない。シーズン中、チームは試合=拍子を機械的に反復しながら、最大の目標としながら、ある試合にチームが最高のリズムで臨めるよう調整される。

④ 「3人乗りボート社会実験」：

3人乗りボート漕ぎの分析を通して、協力のもう一方の側面である連携の過程を検討するこのボートでは3名が各々の方向に1本のオールを出すため、左右で推進力の不均等が生じる。乗員は操舵技術によることなくパワーのみによって操舵と推進力を確保しこの不均等を解消しなければならない。岸を離れたボートは蛇行する。いかにして共振しあい、たどり着けるか。必死の形相の子ども達。



写真1 3人乗りボート社会実験

⑤ 心理学・生理学者たちの「共振する身体」：健康維持・増進の方法を検討する上で身体

内部組織（臓器・筋・脳など）の協応整備という視点が必要であること、個人内における四肢の動作協応と個人間の動作協応との間に共通の一定パターンが存在する可能性が示された。このような共振は人工的・離散的なタクトではなく、自然が本来的に有する連続リズムといえ、スポーツはタクト（人工的）追従の社会生活から離れ、リズムを形成する場となり、大きな喜びを得る機会となることが明らかになった。

⑥ 文化人類学の「共振する身体」

フィールドワークを通じて、彼らの日常生活で起こっている、「からだのふれあい」「風取り」「ふざけあい」「けんか遊び」「挨拶」「おしゃべり」といったありふれた行動を、カリハラ砂漠の人々の相互身体的な日常行動とその徹底した平等主義に見せられた文化人類学者である菅原が、人間の身体がそなえている素朴な共感能力に、熟くて緻密な分析を注ぐ、「身体共振の記録」として、鷺田清一（哲学者）を驚嘆させた。

結　論

「共振する身体」を探り、明らかにすることで、感覚の世界と言葉の世界との関係性の深化大化や、体験することの意義・意味、身体を通した共通感覚の知悉等々を含め、体育・スポーツの価値や意味の再認識と新たな発見を導くであろうことが予見される。

（引用・参考文献）

- ・清水諭 (2006)『作られる身体と実践知』(福山平成大学 福祉健康学部 健康スポーツ科学科「第1回健康・スポーツ科学シンポジウム」報告書)。
- ・亀山佳明 (2001)「子どもと悪の人間学」以文社、(2003)『スポーツとリズム』(黄順姫「W杯サッカーの熱狂と遺産」世界思想社)。
- ・鷺田清一 (1998)「悲鳴を上げる身体」PHP研究所。
- ・菅原和孝 (1993)「身体の人類学」河出書房新社。
- ・菅原和孝・野村雅一 編 (1996)「叢書 身体と文化 第2巻 コミュニケーションとしての身体」大修館書店。
- ・大澤真幸 (1990)「身体の比較社会学Ⅰ」勁草書房、(1992)「身体の比較社会学Ⅱ」勁草書房。

メディアにみられる子どもの身体観
 a View of Children's Body in the Media
 野村 健（東京学芸大学大学院）
 Toru Nomura (Graduate School of Tokyo Gakugei University)

身体のモデル化と学校

日本人古来の身体動作として、「ナンバ」という動きがあったということはよく知られた話である。「ナンバ」とは、簡単に言えば右手と右足が同時に出て、左手と左足が同時に出るという歩き方のことであるが、力をこめた動作においては、人は自然に「ナンバ」の動きになっているという。農耕民族であった日本人は、大地に向かい力をこめて作業をする。そのような中で「ナンバ」の歩き方になることはむしろ自然なことであると言える。ではその日本人古来の歩き方はどのようにして消えていったのか。結論だけ述べれば、明治時代、軍国主義を掲げる学校教育の中で、「ナンバ」歩きが兵隊としての動きにそぐわないからと徹底して身体管理がされたことが原因の一つだと言われる（三浦、1994）。つまり、現在の歩き方は、学校教育によってつくられたものであるということである。

身体と学校教育をめぐっては、体育に関わるものとして議論が展開されることが多い。松田はその著書の中で、M. フーコーの論をもとに、「体育では、運動、動作、姿勢、速さといった尺度から身体を「能力」として捕ら（捉）えることを要求する。」と言い、さらに、「有用性（能力）を高めるという基準から統制することで、潜在的に危険な力を持つ身体を服従関係に取り込む。」としている。つまり、高い能力を持った理想的な身体というものが、学校文化における権力作用の一つの現れであるということである。

しかし、学校教育の営みとして行われることであるならば、それは社会からの要請や、その時代において必要とされる能力と関わりをもつことになる。平野の言う、「社会的身体」モデルである。戦時中であれば、兵隊として必要な逞しい身体ということになろう。さらに具体的に言えば、逞しい身体であるから、高い身体能力であり、大きな体格であるということが言える。

これらのことから考えると、メディアとしての学校の機能が浮かび上がってくる。つまり、情報の媒介者という意味においては学校もメディアであり、その学校が、子どもの身体観形成に大きな影響を与えていていると言えるのではないか。では学校を含め、様々な情報がメディアを通じて提供される現在、どのような身体が理想とされ、モデルとなっているのだろうか。言い換えれば、理想的な身体モデルにかかる社会意識は、どのように変わってきているのかということになるだろう。楠原は、「現在、日本人の伝統的な身体観を再発見しながら、日本人の身体の不自然な緊張を解きほぐすための試みが始まっている。」と述べる。しかし、戦後から現在に至るまでに、身体の理想とするモデルは変容していないだろうか、また、モデルの変容が確認できたとしたら、それはどのような理由をもって説明できるだろうか。

モデルとしての身体に対する大人と子どものズレ

ところで、現在の学校教育に目をむけてみると、身体能力と知的能力から子どもを捉える価値観が優位である。また、両者を比較すると、いわゆる「大人」には知的能力の方に価値が置かれているように思える。とりわけ現在は、学力重視が叫ばれ、より一層そういった風潮になっているようにすら感じる。また、教科における教師間比較を行った岡田・竹隈は、体育教師を含んだいわゆる技能系教科の先生の地位が低いとしている。つまり、知的なものに支配される身体とでもいうような価値観の存在を感じるのである。

しかし、実際に子どもを見ていると、それとは逆の価値関係の世界に生きているよう

に思えてならない。つまり、学校教育段階においては、身体能力が高いことの方が、知的能力が高いことよりも優位にたっていないかということである。

そこで本報告の目的は、子どもにとっての身体能力と知的能力との関係を、社会意識論の視点から考えることにある。この比較をもって、理想とされる身体がどのように変容してきたかということを探る第一歩としたい。

メディアを通しての身体モデル分析の可能性

子どもの知的能力と身体能力との比較関係を明らかにするために、どのような方法が有効であろうか。今回の報告では、メディア、とりわけテレビドラマを分析することに、それを求める。量的な分析や、子ども像を「語る」ことで、何らかの特定の主張をすることが可能である。しかし、そのことで大人や子どもが持つ進退に関わる社会意識を捉えることは困難ではないか。それは生きられた日常の意識から乖離する可能性があるからである。そこで、映像に表れる学校や教師、児童生徒を分析することで、大人や子どもが持つ社会意識を解釈することを試みてみたい。

もちろん、テレビドラマというフィクションを扱う以上、現実の子ども像を忠実に描いているとは言い切れない。また、教師を対象にメディア分析を行った陣内は、「一時期人気を得た教師像は、いくらくら形を変えながらもその後もしばしば登場して今まで続いている」といい、ドラマ分析では時代と教師像とが対応するという設定が困難であるとしている。しかし、例えばシリーズとして続いているドラマであれば、シリーズを通して登場する先生と違い、児童生徒役は一つのシリーズ限りであり、シリーズ毎に児童生徒の描かれ方は異なる。つまり子ども像に関して言えば、テレビドラマはむしろ時代をある程度丁寧に写していると言えるのではないかと思われる。

分析の内容としては、まず小・中学校を舞台にした学園ドラマが多く作られるようになった1970年代から現在に至るまでの作品の中から、多くの視聴者を得、広く支持された作品を選定する。そして選定された作品に描かれる子ども像を、身体の特徴や身体能力に対し、知的能力との関係や、パーソナリティとの関係を中心に分析、比較していく。そうすることで現れた特徴に対し、解釈を加えていくこととしてみたい。

当日は、より詳しく分析した結果について報告する。

【主な参考文献】

- ・陣内靖彦, 2000,『メディアに描かれた教師像』, 東京学芸大学大学院修士課程「教育社会学講義」平成11年度調査報告書
- ・松田恵示, 1999,「体育とスポーツ - あるいはスポーツ文化の「二重性」について」, 井上俊・亀山佳明編『スポーツ文化を学ぶ人のために』, 世界思想社
- ・三浦雅士, 1994,『身体の零度 何が近代を成立させたか』, 講談社選書メチエ

遊歩空間としての公園に関する研究
—日比谷公園を手がかりに—
A study on the park as walk space

小坂美保（早稲田大学スポーツ科学学術院）
OSAKA Miho(Waseda University)

はじめに

日比谷公園は、誰もが自由に入り出しきり、利用できる空間である。そして、多くの人びとが「緑があり、広々とし、のんびりでき、魅力的な施設がある、都会のオアシス的存在」[進士ほか, 1983: 164]というイメージをもっている。また、公園の利用形態は、進士らの公園利用者実態調査によると、「ベンチに腰を掛けて憩う・芝生に寝転がる」などの静的利用と、「歩行」などの運動にみられる動的利用の2つに大別される[進士, 1970: 26]。そして、公園が静的利用される際、利用される空間は、利用者に偶発的に選択されるのではなく、「相手の存在は認め得る距離はあるが相手の表情は見分けられない程度に離れている」場所が意図して選択される[進士, 1970: 27]。このような動的・静的な公園利用には、「公園」そのものの場所や空間の特徴が反映されていると考える。というのは、「ベンチに腰を掛けて憩う」ことや「歩行する」といった行為は、公園という空間にベンチが設置されていなければならないし、歩行が可能となるような空間整備が行われていなければならないからである。また、これらの行為を行う際、「他者」の存在が少なからず影響していることがわかる。

では、公園という空間を人びとはいつから「憩い」の場所として利用したのか、また、「歩行」(遊歩)することを楽しみだしたのであろうか。そこで本研究では、日比谷公園に焦点をあて、公園を利用する多くの人びとにとって、「日比谷公園」という空間がどのような空間であったのかについて明らかにすることを目的とする。とくに本研究では、主に明治・大正期に設置された公園を扱う。

公園に期待された役割

日本では、明治6(1873)年に太政官布告第16号によって公園制度が設けられた[日本公園百年史刊行会編, 1978]。この布告を受け、全国に14の公園が選定された(明治6年中)。東京府においては、上野・浅草・芝・深川・飛鳥山の5公園が制定された。東京府は、東京市を中心に日本の「帝都」にふさわしい都市整備が行われるようになる。明治5(1872)年から進められた銀座の煉瓦街計画は、都市の防火策とともに美観にも重点がおかれたものである。明治10年代になると都市整備が、本格的に進められるようになる。明治20年代には、「政治都市江戸をどんな性格の東京に作り直すのか」という根本にはじまり、築港計画、道路、鉄道といった交通計画、あるいは市場、劇場、講演、広場、墓地などの施設計画、さらに用途地域制、防火制、加えて都市のイメージ」[藤森, 1982: 78]までを掌握する東京市区改正審査会、東京市区改正委員会という専門機関が設置された。「公園」に関する議論もこの機関において行われた。都市に公園を必要とする第一の目的は「衛生」であり、その理由として、新鮮な空気を供給できる空間があれば、人びとの疲労回復が図られ健康に日常生活を送ることができるとあげられている。また、衛生上の利益を得るだけでなく、都市の美観や避難場所の確保といった役割が期待されていた。

しかし、明治30年代までに東京府下で制定された公園の多くは、社寺境内地に「公園」という名称をつけたものにすぎなかった。また、公園の必要性は議論されるが、公園の利用や利用者に対して期待することは、ほとんど議論されていない。

「日比谷公園」の誕生

明治36(1903)年6月1日に開園した「日比谷公園」は、明治20年代に進められた市区改正事業の成果の一つである。この公園の設置は、近代に生まれた「強い公共介入」[渡辺, 1995: 5]という社会的技術として形成された都市計画とともに行われたものである。このように都市にあらわれた「日比谷公園」という空間は、当時の人びとにとって「近代都市」を具現化するモノであり、疑似ヨーロッパを体験できる空間でもあった。人びとは、公園に身を置くことで、あるいは公園をみることで新たな都市空間の登場を身をもって感じたとい

えよう。日比谷公園に注目するのは、同園がそれ以前の公園と異なり、「社寺境内地」あるいは「群衆遊覧ノ地」に由来しない場所だからである。市区改正事業に携わる人びとにとって日比谷公園の計画は、「公園」そのものをつくることを意味し、帝都「東京」の中央公園として、また時代の要求にこたえるべき公園像を国民に提示しなければならなかつた。

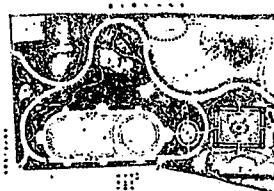


図1 創設当時の日比谷公園設計図

明治26(1893)年に示された日比谷公園の設計方針には、「同地(注:日比谷公園)ハ廣闊平坦ノ場所ナルニ依リ、周囲ニ植込地ヲ設ケ、中間ハ芝生ノ野地トシ、如何ナル多數者ノ遊歩ニモ差支ナカラシメシ為メ、別紙略図ノ如ク周囲ニ松樹ヲ植栽シタル墙壁様ノモノヲ造リ、数ヶ所ニ入口ヲ設ケ、之ニ添テ幅員十間ノ道路ヲ開テ園ヲ一周セシメ、自由ニ車馬ノ馳驅ヲ許シ…(以下省略)」(傍点は筆者による)[東京市, 1953: 559]とあり、日比谷公園の最大の特徴は、多くの人びとの「遊歩」を可能にする「遊歩地」としての機能が期待されていたことである。また、開設当時の設計図をみると、それぞれの園内施設をつなぐ道が園内に張り巡らされており、明治26年の開設方針が反映されている。このように、日比谷公園には、人びとが遊歩を楽しむことができるよう意図されていたことがわかる。

「運動空間」／「遊歩空間」としての公園

日比谷公園には、開園当初から「運動場」が園内施設として設置されており、運動場が公園に設置されたのは日比谷が日本で最初である。加えて、日本体育会によって建設・寄付された運動器械(回転鎧、水平階梯、鉄棒、遊動円木、米国式梁木、双輪、固定円木、鞦韆)が芝生地の西側に設置されていた。これらの運動施設が園内に設置されることによって、公園という空間で運動やスポーツをすることが可能となった。運動することが可能になつただけでなく、運動することが積極的にすすめられたともいえる。というのは、日本体育会が公園に運動器械を設置したのは、日本人の体位・体力を向上させるため、日常的な運動機会を保障しようという意図からである。運動場や運動器械は、当時の体育あるいは身体教育の考えに基づいてつくられた「鍛える」ためのものであり、スポーツを楽しむ、あるいは公園を楽しむことの延長と捉えがたい。また、これらの運動(体育)施設の利用者の多くは、学生や児童であった。日比谷公園の利用者は、学生や児童だけでなく多岐にわたっていた。多くの人びとは、園内に設置された花壇の花をめでたり、音楽堂で西洋音楽にふれたり、噴水のある池の周りを歩いたりと自由に公園を楽しんでいた。当時の人びとにとって「公園」という空間は、江戸時代の庶民の娯楽であった社寺の参詣や物見遊山を都市のなかで体现できるものであったのではないだろうか。

公園は、市区改正事業において整備される過程で、公園を設置する人びと(=為政者)の「公園」に対する社会的価値は公園の形態に見いだすことができる。しかしながら、「公園」という空間が、明治・大正期の人びとにとってどのような「場所」であったのかは、公園利用の実態を詳細に検討する必要がある。明治期に都市に登場した「公園」が、どのような社会的価値を体现する場所であり、利用者によってどのような価値が付与された場所であったのかについて①運動空間としての公園、②遊歩空間としての公園、③擬制としての自然空間、といった点から分析していくことで、本研究のかかる課題が解決されると考える。

【引用文献】

- 藤森照信(1982)『明治の東京計画』、岩波書店
- 日本公園百年史刊行会編(1978)『日本公園百年史』、日本公園百年史刊行会
- 進士五十八(1970)「公園設計に関する基礎的研究」日本造園学会誌『造園雑誌』vol.33(3), 22-29
- 進士五十八ほか(1978)「日比谷公園の総合的研究」、日本建築学会関東支部編『研究報告集、計画系 vol.58』, pp145-177
- 東京市(1953)『東京市史稿 遊園編7』、東京市
- 渡辺俊一(1993)『「都市計画」の誕生』、柏書房

1910-1920 年代における女子のスポーツ活動とその意味

—茨城県立土浦高等女学校を事例にして—

The Girl's Sporting Activities and the Meaning in the 1910's-1920's

角田 晴美（福山平成大学 非常勤講師）
TSUNODA Satomi (Fukuyama Heisei University)

1. はじめに

現代の日本では、女性がスポーツをすることに対し嫌悪感を抱く人は少ない。また、肌を露わにファッショナブルなスポーツウェアを着こなす女性アスリートが、雑誌のグラビアを飾ることも珍しくない。女子体育・スポーツ普及には学校体育の影響が大きく、大正時代に大きな飛躍をしたと言われている。そこで、本報告では事例校における高女生の記述をもとに女子体育・スポーツの普及過程の詳細を明らかにしていく。

2. 1910-1920 年代の高等女学校

高等女学校は、1896（明治 28）年の高等女学校規定により制度化され、1899（明治 32）年には各県に 1 校設置することが義務づけられた。高等女学校の教育内容は、男子の立身出世と異なり、良妻賢母を前提としている。この時期、「新しい女」のインパクトもあり、以前の良妻賢母教育から若干内容に変化が見られる。例えば、第一次世界大戦の影響で体育の充実が図られるが、それは明治期から続いている「次代の母」というコンセプトに加え、「代替労働力」として見なされるようになつたことが上げられる。

1920 年代には、中学校の数を高等女学校が上回り、その後、増加の一途をたどつていった。その結果、「高女くらいは出ていないと嫁のもらい手がない」とまで言われるようになつた。

明治時代の女子体育は、未だ啓蒙段階に止まっていた。しかし、1910 年代以降、各地に高等女学校が設立されたことと、そこでの体育が推奨されたことによって、女子体育の実践者が増加したのである。

3. 女子体育・スポーツの普及

高女生を読者層にする雑誌を元に、全国的な女子体育・スポーツの傾向を把握する。当時は未だ女子が太腿をさらすことに対する嫌悪を抱き、女子体育や女子スポーツに反対する保守的な考え方消滅したわけではなかった。

加藤によれば、運動会や遠足などは 1918（大正 7）年をピークに減少するが、これはニュースソースとしての価値低下によるものとしている。その一方で、スポーツに関する記事は、1921（大正 10）年以降増大し、特にテニスに人気が集まっていることを指摘している〔加藤, 1986〕。また、高橋は女子運動選手が雑誌のグラビアを飾り、アイドル化していることを明らかにしている。こうした現象は、雑誌の中だけではなく、各女学校も同様にあこがれの女子運動選手がいたと推察している。このように、テニスに代表されるスポーツは、高女生に熱狂的に受け容れられていたという〔高橋, 2005〕。

次では、事例校に焦点をあて、女子体育・スポーツがどのように描かれているのかを見していく。

4. 土浦高等女学校における体育・スポーツ

茨城県立土浦高等女学校は 1903（明治 36）年、県内 2 番目の高等女学校として設立された。本報告では、教職員、在校生、卒業生を会員とする尚絅会の『尚絅会報』を主な資料とした。

(a) 和歌や作文

『尚絅会報』には、高女生たちが詠んだ和歌や作文が多数掲載されている。自身がスポーツを楽しむ様子以外にも、寄宿舎の自由時間や放課後、友だちが遊んでいる様子も描かれている。こうした記述は 1920 年代の初めまで見ることができる。

(b) テニス大会

校内テニス大会は、教員も参加して催された。1907（明治 40）年から開催され、すぐさま高女生たちの文章にも表れ、徐々に登場回数が増加する。1913（大正 2）年から年 1 回の開催だった大会が、年 2 回になっている。『尚絅会報』の巻頭は校長の話と決まっているが、1916（大正 5）年には「庭球大会所感」と題され掲載された。

(c) 運動会

運動会は明治期から開催されているが、高女生たちの記述は 1923（大正 12）年に初登場する。当時、運動会が体操中心からゲームやスポーツが加わり、プログラムの充実が見られた。リレーに熱中する様などが書かれており、高女生がスポーツを楽しんでいることがわかる。また、同世代の男子は見学禁止だった。

(d) 対外試合と第 2 回万国女子オリンピック大会

1926（大正 15）年、「施行規則」第 13 条「体操、教練及び遊戯」に「競技」が加えられた。この時期から対外試合が増加した。また、土浦高女は神宮大会に選手を派遣、県下女子中等学校競技大会を開催しているが、直接これらに対する記述はない。しかし、人見絹枝の金メダル獲得に関する喜びの作文は書かれていた。また、この頃から運動は老若男女、西洋東洋問わず必要であるという趣旨の文章が見られるようになった。

5. まとめ

土浦高女生たちにとって、スポーツは常に魅力的なものだったといえる。当初は、自由時間に行ったこと、もしくは友だちが行う姿を描いている。そして、運動会は、全国誌では掲載されなくなる一方で、当事者にとって興味をしめすこととなった。それは、競技スポーツの浸透と時期を同じくする。初めは校内に止まっていたスポーツが、1920 年代後半より対外試合、そして海外へと視界が開かれていった。スポーツを楽しむ高女生の増加に支えられ、女子スポーツは実践可能となった。しかし、運動会への中学生入校禁止措置がとられたように、良妻賢母、そして高等女学校という囲いの中という条件付きであった。

参考文献

- 天野郁夫編, 1991, 『学歴主義の社会史』, 有信堂高文社.
加藤節子, 1986, 「雑誌『女学世界』にみる女子体育」, 『常盤大学体育』20:45-70.
高橋一郎他, 2005, 『ブルマーレの社会史』, 青弓社.

戦時下における“体位低下問題”とスポーツ空間
—名古屋市の公園事業を事例として—

A study on "the issue of decline in physical strength" and the sport space under the wartime : From the Park Planning in Nagoya city
高尾 将幸（筑波大学大学院）

TAKAO Masayuki (University of Tsukuba)

【緒言】

歴史学者である成田龍一は、農村をモデルに構築された近代日本像が日本の「半封建制」と「特殊性」を強調したのに対し、都市をモデルとすることにより近代を捉え返す視点としての都市史を構想する。すなわち、「都市は、空間として存在し、その空間は一方で均一性をつくり出すとともに、他方で（均一性のコントロールのもとで）多様な重層的な関係一結合を生み出す」ものとされる。そして「近代都市空間の編成—都市空間の秩序を維持するための規律や規範」は、都市法規、病と衛生をめぐる場、都市下層社会への言説、都市施設などを舞台として展開するという〔成田、2003: 2-9〕。その中でもとりわけ衛生や健康に関連する事がらは、近代都市空間の特徴である均一的・均質的空間の形成の契機としての重要性を持っていたとされる。また、1931年9月の満州事変以降の準戦時・戦時体制において、戦時体制遂行のための動員と組織化によってこの都市空間の「制度化」が進行していくが、それは戦時期特有の「逸脱」した形ではなく、「人びとの要求をすくいあげることを通じて遂行され」るものと捉えられる〔成田、同上: 37-8〕。成田はその方法論的視角として都市を「出来事が生起し展開する単なる背景ではなく、様々な装置を持ち、資本や人口が集中したり集積したりする場所=空間」として捉える議論を展開した〔伊豫谷・成田編、2004: 276〕。

こうした成田の指摘は、これまでのスポーツ社会学・歴史学の視点に何をもたらしてくれるだろうか。本報告の観点から顧みると、それはスポーツや各種の身体活動が行われるために、それが政策的であるか、自発的なものであるかに関わらず、まずそのための場所が、ある空間の中に／＼として位置付けられる必要があるということである。これまでの体育・スポーツ社会学における議論では、戦時下的体育やスポーツのあり様を、主として軍国主義政策や戦時体制における上意下達式の動員という姿で描いてきた。具体的には、各種の政策理念や体育人の論調に対するイデオロギー分析や、各省庁と軍部の結びつきを前提とした上の国家的施策や機構の分析などが挙げられよう。

しかしこうした議論は、その重要性にも関わらず次の点を看過することによってはじめて成り立つように思われる。すなわち、「体位低下」ⁱなどにまつわる問題と、その解決を目指す各種施策をめぐっては、少なくとも何らかの具体的な施設・設備の存在を要求するものもあるということである。ただし、ここでいう施設・設備は、物事が生起する背景としての静態的で固定的な物理的建築物を意味するだけではなく、計画から建設、さらにはその利用といった様々なアクターが関わり、それぞれの思惑において都市空間の中に位置付けられていくものとして想定される。こうした施設・設備という観点から考えるならば、戦時下における“体位低下問題”は保健政策の問題としてだけではなく、（都市）空間的な問題、具体的には「都市計画」の中に、さらに言えばそれをめぐる様々なアクターの動きの中に位置付けられるものとなりうる。

体育やスポーツに関する政策理念は、それを受け入れる何らかの場を必要とするという前提に立てば、この議論は空間論的な視角を抱え持つはずである。先の成田の議論を敷衍させるならば、都市におけるスポーツ空間の登場は「都市計画」における公園や運動場といった、人為的に計画された均一的な空間の「制度化」、という事象に対応するものとして捉えなおすことが可能になる。

本報告は、“体位低下問題”を通じて生成した都市のスポーツ空間の分析、すなわちこの“問題”が実在空間の中でどのような効力を発していくのかを、都市における公園・緑地事業の事例を元に考察することを目的とする。この空間論的視角を取り入れることは、上意下達式の図式で捉えられるがちな“体位低下問題”が、実際には「地方都市」の自治体や都市計画の専門家、あるいは地元の土地所有層らのそれぞれの思惑によって道具的に使われて

きたものであることを論じることへと繋がるだろう。そして、戦時下における“体位低下問題”を前後する時期に都市に登場してくるスポーツ空間は、実はそれ以前から存在する「都市間競争」という舞台の延長線上に位置付けられるのではないか、という仮説を検証することで議論を展開していく。

【事例としての名古屋市】

日本における公園やスポーツ施設に対する法的な規定は、1919（大正8）年に制定された都市計画法に登場した。当時の都市計画の専門家団体は、後藤新平を中心とする内務官僚を中心としていた。都市におけるスポーツ施設を含んだ運動場や運動公園、児童公園は、1920年代以降だいに増加していくが、それらは全て都市計画法に基づくものであったという意味で、公園事業は都市計画の専門家や行政担当者によって都市計画事業の一部として位置付けられていたのである。しかしながら、こうした内務官僚主導の計画は、区画整理による土地の収用を中心に進めるという方針を探ったこともあり、政友会を中心とする当時の台頭著しい政党勢力によって激しい抵抗を受けていく。

こうした中で、公園事業で大きな成果を収めていくのが名古屋市であった。名古屋市の成果は、土地区画整理による公園用地収用の成功に多くを負っていた。この土地区画整理による用地収用の成功は、特に動物園を有していた鶴舞公園の盛り上がりが地価の騰貴をもたらし、その状況を見た多くの区画整理組合が公園事業を起こそうとする動きの中に見て取ることができる。また、こうした動きを積極的に支えていくのが当時の市長大岩勇夫（在任期間：1927～1938年）であり、彼は区画整理事業による都市開発によって、東京市や大阪市に次ぐ「大名古屋」の建設を積極的に主張する役割を果たしていく。さらに、市と区画整理組合の間にあって計画的な公園事業の推進を図っていくのが、内務省出身で都市計画地方委員会技師を勤める石川栄耀、狩野力、石神甲子郎らであった（彼らの思想や動きについては発表時に報告する）。

本報告では、都市計画におけるスポーツ空間の登場が、都市計画の推進によって都市間競争に勝ち抜こうとする市、それに乗じて地価の騰貴を狙う土地所有層（区画整理組合）、さらには計画的な都市の管理を目指す内務出身の技師たちの思惑が交錯する形で生まれてくることを示す。このような空間論的視点からのアプローチの採用によって、従来の議論では見過されてきた、国家と地方都市、さらにはそこに関係してくるスポーツのあり方を論じなおすうえ一つの可能性があることを提示していただきたい。

【文献】

- 伊豫谷登士翁・成田龍一編、2004、『再魔術化する世界一絶力戦・<帝国>・グローバリゼーション』、御茶の水書房。
成田龍一、2003、『近代都市空間の文化経験』

※詳細なデータ及び文献については発表当日に提示する。

ⁱ “体位低下問題”は、1936年（昭和11年）6月19日の閣議において、当時の陸軍大臣寺内寿一が徴兵検査の成績の著しい悪化を指摘したことに端を発し、その後新聞報道を中心に「社会問題」として大きく取り上げられていった。その後、陸軍を中心に保健国策の樹立、保健・衛生を主管する新省の設立（後の厚生省）に向けた動きが起こってくるが、特に陸軍医務局長である小泉親彦は、「科学的」データに基づいた装丁の体位低下の現状とその改善策について、様々な場で積極的に発奮していった。

中高年者の身体活動における社会的ネットワーク機能の差異に関する研究
A study of difference of social network functions for physical activity in middle-aged people.

発表者：中山 健（上智大学文学部保健体育研究室）

Takeshi Nakayama "Department of Health and Physical Education, Faculty of Humanities, Sophia University"
 共同研究者：川西正志・北村尚浩（鹿屋体育大学生涯スポーツ実践センター）

Masashi Kawanishi・Takahiro Kitamura "Department for Interdisciplinary Research Center of Lifelong Sports and Physical Activity, National Institute of Fitness and Sports in Kanoya"

I. 緒言

日本の高齢化率は今後2020年まで増加が予測されている。この予測では高齢者人口中に占める75歳以上のいわゆる後期高齢者の増加についても言及されており、それは日常生活において他者の介助を必要とする要介護高齢者の増加を意味する。高齢者が要介護となる原因である脳血管疾患や転倒・骨折などは、一定の質や量を満たした運動やスポーツをすることである程度の予防が可能である。しかし日本の高齢年代層では他の年代層に比べ運動・スポーツといった身体活動の実施者が少ないだけでなく身体的な効果を期待できるだけの運動量を満たす実施者も少ない。高齢年代層における身体活動実施者を増加させるためには、身体活動実施に対する高齢者の主体要因のみに焦点を当てるのではなく、当該個人を取り巻く人の環境すなわち社会的ネットワークを考慮する必要がある。発表者は上記のような関心から、日本における65歳以上の高齢者の身体活動実施に対する他者からの働きかけ、すなわち社会的ネットワーク機能を測定する尺度を作成し、その性能と尺度得点の差異について検討した（中山ら, 2003, 2006）。

しかし、その研究における分析対象が現在の高齢年代層に限定されていたため、研究結果に基づく実践的な介入が将来の高齢年代層にとって妥当なものであるか否かという点については未解決の問題としてある。「21世紀の超高齢社会におけるスポーツ・レクリエーション活動に関する示唆を得るためにには、現在の高齢者だけでなく、中年者に関する知見が必要」（山口, 1996）である。

そこで、本研究では高齢者を対象として開発された社会的ネットワーク機能の測定尺度を中高年者の人々に適用して尺度の性能を確認し、さらに身体活動の定期的実施者と非実施者との比較から社会的ネットワーク機能の差異を明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

1. 調査対象

2002年の7月から8月かけて鹿児島県熊毛郡中種子町の国民健康保険の受給資格を有する20歳以上の男女を対象に所定の質問票を用い、調査員による訪問留置法によって調査を実施した。質問票の配布数は4013部で回収数（率）は3009（74.9%）であった。本研究では、分析に使用した調査項目のすべてに有効回答であった40歳以上64歳以下の男女1075名を分析対象とした。

2. 測定尺度

本研究では、発表者が作成した社会的ネットワーク機能の測定尺度（中山ら, 2003）¹⁾を使用した。この測定尺度は、「社会関係が利益とともに費用もともなう」（Rook, 1984）²⁾という交換理論に基づき、高齢者の身体活動に関わる他者からの働きかけを促進的機能と阻害的機能との2側面から把握している。その内容は、身体活動実施を促進すると仮定されるものとして、①協働（一緒に運動をしよう誘ってくれる）、②情報提供（健康に必要な運動の質や量について教えてくれる）、③賛賛（運動をよくやっていると誉めてくれる）の3要因、また身体活動実施を阻害すると仮定されるものとして①抑制（怪我をするかもしれないからやめた方がよい、と言われる）、②正当化（これ以上健康になる必要はない、と言われる）、③強制（運動することを強いる）の3要因の計6要因である。これら各要因に対応する質問項目を1項目ずつ作成し、6項目からなる測定尺度を作成した。働きかけの主体を家族や友人などの非公式な関係と運動指導者や医師、看護士などの公式な関係と

に分け、過去1年間のうちに実際に働きかけられた頻度を5段階リッカートタイプ尺度でたずねた。

3. 分析手続き

測定尺度の信頼性は、尺度の内的整合性を表す指標であるCronbachのα係数を算出した検討した。また妥当性については、因子的妥当性および基準関連妥当性的観点から検討した。因子的妥当性は、当該尺度について仮定された因子構造が実際に測定されたデータと、どの程度適合するかによって評価される。本研究では、測定尺度の2因子構造を仮定した確認的因子分析を行なった。基準関連妥当性は、問題としている行動特性と関連のある外部変数あるいは基準測度と実際に測定された尺度の得点とを比較することによって評価される。本研究では、運動・スポーツ行動と強い関連を有する「運動実施に対する自己効力感」尺度（中山ら, 2002b; 2004）を基準測度とし、その合計得点と働きかけの主体ごとで算出した各要因の合計得点との相関係数を算出することで基準関連妥当性を検討した。ついで社会的ネットワーク機能を測定する各項目の平均値について、身体活動の定期的実施者と非実施者とで比較し有意差の検定をおこなった。分析に使用した統計パッケージはSPSS12.0JおよびAmos5であった。

III. 結果

1. 信頼性

尺度の内的整合性を表す指標であるCronbachのα係数を算出した結果、非公式な関係からの促進的機能.799、阻害的機能.771、公式な関係からの促進的機能.843、阻害的機能.861であった。一般にα係数は、その値が.700以上であれば、内的整合性による尺度の信頼性が高いものと評価される。

2. 妥当性

1) 因子的妥当性の検討では、測定尺度の2因子構造を仮定した確認的因子分析を行なった。モデルの適合度指標であるGFI (Good of Fit Index) およびAGFI (Adjusted GFI) は、基準値.90以上をもってモデルのあてはまりの良さを評価する。

GFI、AGFIは、非公式な関係では、.973、.929であり、公式な関係では、.967、.914であった。各要因において因子負荷量が.69以上を示しており、測定項目から除外する値ではないと考えられる。

2) 基準関連妥当性の検討では、運動・スポーツの実施と有意な関連を有する「運動実施に対する自己効力感」尺度の合計得点と働きかけの主体ごとで算出した各要因の合計得点との相関係数を算出した。非公式な促進的機能.305、阻害的機能.169、公式な促進的機能.247、阻害的機能.214、であった。

3. 身体活動の定期的実施・非実施による社会的ネットワーク機能の差異

尺度項目の平均値を身体活動の定期的実施者と非実施者とで比較した結果、非公式関係および公式関係の促進項目では、定期的実施者が非実施の平均値を上回り、有意であった。阻害項目では、非公式関係および公式関係を問わず、働きかけは少なかった。しかし、非実施者が定期的実施者の平均値を全項目で上回り、非公式な関係からの2項目で有意差が確認された。

IV. まとめ

本研究では、中高年者の身体活動における社会的ネットワーク機能について測定尺度の適用可能性およびその差異について検討した。結果として、社会的ネットワークからの身体活動実施に対する働きかけは、阻害的なものよりも促進的なものが多いことが明らかとなった。身体活動の定期的実施者と非実施者には働きかけの量に差異がみられたが、身体活動が個人に与える生理学的および心理学的恩恵の認知は社会的ネットワーク内の共通理解となっているものと思われる。今後の課題として、「社会的ネットワーク構築の努力を通して獲得され、個人や集団にリターン、ペネフィットをもたらすような創発的な関係資産」（金光, 2003）、すなわち社会的関係資本（=ソーシャル・キャピタル）をいかに形成し、身体活動の非実施者を定期的実施者へと行動変容させるかという介入研究があげられる。

ストリートダンスの世界

A World of Street Dance

小竹 瞬(奈良教育大学大学院)

KOTAKE Shun (Nara University of education)

1.はじめに

都市では、様々な下位文化が生み出されてきた。その代表的な担い手である若者たちは、ファッショングや髪型、身振りを共有することで集団を形成し、メディアなどによって逸脱的なもの、異様なものとして扱われてきた。また、ときには都市の公共空間の利用めぐって地域住民や警察と衝突を引き起こし、それらは「排除」すべき対象として問題視してきた（田中、2004）。

一方で、下位文化を営む若者たちにとって社会的監視はレッテルをはられ管理されるという否定的な面からだけでなく、「見られる」快樂を通して主体性を確立するという肯定的な面があることを忘れてはならない。若者たちは都市空間の中で、自らの身体を「見せる」事で主体性を獲得し「見られる」と快乐をえる。街頭型のサブカルチャーの本質は、この一瞬の可視性における若者たちの自己肯定の経験にあるといった認識もされてきた（成実、2001）。

本稿では、現在多くの若者たちによってスタイルや音楽などが支持され、都市広場や公園、路地といった都市空間=「ストリート」を文化の営みの場へと変容させるストリートダンスを取り上げる。そして、彼らが「見られない」空間を求めていくという、「見られる」ことにアイデンティティを見出していくという從来なされてきた下位文化の認識では理解することのできない現象に着目した。具体的には、奈良市において「ストリート」の管理が強化され、ストリートダンサーたちが「ストリート」を移動させる過程と、ストリートダンスを営む空間が「ストリート」の外部で多様に創出されている状況を描き出し、若者たちがこれらをどう経験し、ストリートダンスとどのようにかかわっていくのか、約2年間のフィールドワークによって収集した蓄積をもとに明らかにする。

2.「ストリート」からの締め出しと移動

現在、奈良市中心部においてストリートダンスを営む場のひとつとなっているのが、「県庁」と呼ばれる空間である。ここは、近鉄奈良駅から北東に10分ほど歩いた県庁に隣接した奈良県文化会館の前にひろがる「つどいの広場」の一角である。広場は県の庁舎などに隣接するため民家や歩道などから離れており、夜になり職員たちが帰宅すると街灯のみが広場を薄暗く照らし出し、行きかう人々の姿はほとんど見られなくなる。若者たちは人目を避けるように夜の11時を越えた頃になるとここへやってきて、持参した小型スピーカーや携帯型の音響機器でなんとか聞き取れるほどの音量で音楽を流し、会館入り口のガラスを鏡代わりとしてダンスに励む。そして、日が昇る頃には片づけをして帰宅していく、広場はいつもの風景をとり戻す。

一方、2005年頃までストリートダンサーたちの主な活動場所となっていたのは、「ビブレ」と呼ばれる若者向け商業施設の入り口前の空間だった。ここは、近鉄奈良駅から「県庁」とは反対方向に位置する商店などが立ち並び、人通りも多い。昼間ここには、買い物客たちの自転車が数多く駐輪されており、夜になつても何台かの自転車が放置されていた。若者たちはここにたむろし、ストリートダンスを営んでいた。しかし、このスペースを保有するビブレは、経営の交代に伴つて駐輪を店の反対側に限定し、入り口前のスペースに対する駐輪に対して警備員による対処が行われるようになった。さらにこの対応は、駐輪だけでなく夜間たむろすることに対しても向けられた。追い討ちをかけるように、深夜の騒音などの迷惑行為に関する県の条例が改正されたことによって、そのような行為に対して、警察の対応と法的な処置がとられることになった。そのために「ビブレ」でたむろすることは事实上禁止となつたのである。

3.「ストリート」の変容

「ビブレ」から締め出されたことに対し、ストリートダンサーたちは「抵抗」するのでも「社会運動」を起こして別の「たまり場」を獲得するのでもなく、新たな「ストリート」を求めて移動した。そのひとつが「県庁」であった。

「県庁」と「ビブレ」は、どちらも駅近隣に位置する都市空間であり、利便性に優れ、鏡代わりとなるガラスと滑らかな地面そして十分な広さを有している。しかし、「ビブレ」から「県庁」へと「ストリート」を移すことによって、街を行き交う人々の視線はほとんど失われた。それに伴い、彼らにとつて「ストリート」が担ってきた機能は大きく変容した。「ビブレ」は、パフォーマンスや交流を伴う「たまり場」であった。「ビブレ」や「別に用事ないけど行こっか」って感じやけど、県庁や「たまらん」とは行かんもんなあ。『練習しに行く』って感じやもんな（2006.11.23）と、クボサンはこの当時にについて振り返る。このように、「県庁」は「練習する場」と位置づけられているのである。「県庁」に集まる若者たちは、そこにたむろするのでも、通行人たちに自分たちの身体を「見せる」のでもなく、「見られない」空間を選び取り、「ストリート」に集うようになった。具体的にそこで行われる営みとは、個人もしくはインフォーマルに形成したチームで取り組む「クラブイベント」や「コンテスト」に向けての練習が主体となつたのである。

4.ストリートダンスを営む空間の創出

ストリートダンスとはすでに「ストリート」のみで営まれる下位文化ではない。ストリートダンスは専門学校や大学サークル、ダンススタジオに取り込まれ、そこで多くの若者たちが鏡や音響機器が設備された空間で練習に励む。週末になるとクラブイベントや民間企業などのコンテストが数多く開催され、そこには様々なストリートダンサーたちが集まり、複数の照明によってショーアップされ大音量が流れる空間でパフォーマンスをしあう。このように、ストリートダンスを営む空間が「ストリート」の外部に創り出されること、ストリートダンスに対する多様なかかわり方や地域を越えた連帯が生みだされる契機となっている。

さらに、若者の下位文化が「ストリート」を「見られる」空間として位置づけてきたのに対し、ストリートダンサーたちは、むしろ「見られない」空間を探し求めていく。彼らは、「クラブイベント」や「コンテスト」でのパフォーマンスのために、警察や地域住民のまなざしができる限り届くことのない空間へと深夜に出向き、ビルのガラスなどに自分たちの姿を映し出しながら練習をしている。このようにストリートダンサーたちは、「ストリート」を「見られない」空間へと移し、そこでの営みを練習と位置づけ、「見られる」空間を「ストリート」から「クラブイベント」や「コンテスト」へと移し替えているのである。

5.「ストリート」への固執

「ストリート」の管理が厳しくなる一方、ストリートダンサーたちは学校などの公共施設やダンススタジオなどといった「ストリート」の外部ある新たな空間を獲得している。しかし、一部のストリートダンサーたちは「見られない」にもかかわらず、なお「ストリート」に固執する。

彼らはなぜ「見られない」空間へとわざわざ向かうのか。彼らの営みと都市のポリティクスがどのように絡まりあつているのか、このことを過剰に意味づけてしまわないよう留意しながら、彼らの日常的な実践や語りに向き合い、描き出してみたい。

参考文献

- 成実弘至（2001）「サブカルチャー」吉見俊哉編『カルチュラル・スタディーズ』講談社メチエ。
- 田中研之輔（2003）「都市空間と若者の『族』文化—スケートボーダーの日常的実践から」『スポーツ社会学研究』11】
- 田中研之輔（2004）「都市空間の管理と路地裏の身体文化」『日本都市社会学会年報』22』

B-Boy for life?
The Evolutional Track of Street Dance in Taiwan

Wu, Sheng-chi (National Taiwan Normal University, Taiwan)

Street dance is a component of hip hop culture. Hip hop was born in South Bronx, a shantytown in New York City, is a reaction against some social appearances, like racial discrimination and conflicts between gangs. Through a powerful gangster named Africa Bambaataa's integration, hip hop was formed in the early 1970, street dance, MC, DJ, and graffiti became four central elements of hip hop.

However, through globalization and business domination, hip hop has become a huge culture appearance from something only belonged to minority and been regarded a symbol of fashion and style. Above four elements also extensively spread around the world. To grow with each passing day, much more people engaged in street dance in Taiwan, such a circumstance led me to write this study.

With the method of document analysis and deep interview, this study discusses the evolutional track of street dance in Taiwan by depicting the conversion of professional hip hop dancers' roles. Only a few deeds of significant people are recorded in history, so it is difficult to discuss the evolutional track or history without viewing a few specific people like professional hip hop dancers. On the other hand, professional hip hop dancers are much more easily observed and interviewed than any other amateurs, that's why this study chose such a point to understand the evolutional track of street dance in Taiwan.

The evolutional track could be separated into below stages by the changes of professional hip hop dancers' roles in Taiwan:

1. from late 1980s to 1994—development stage: American hip hop music videos broadcasted by TV caused Taiwan youth to imitated the dances. Most of the recently mainstream professional dance crews were established at this time, a few of them became famous because of winning the contests hold by TV programs or sponsorship from enterprises. Meanwhile, hip hop dance club appeared in some senior high schools and colleges.
2. from 1992 to 1996—star dream stage: young boys and street dance were regarded as marketing strategies, and many dancers became stars after publishing their own disk records at these years. Because Taiwan entertainment industry was centralized in Taipei, many dancers in other regions went to Taipei one after another to look for the chance of success.
3. from 1996 to 1999—post star dream stage: Taiwan professional hip hop dancers still played a decisive role in entertainment industry, but they had transformed to be

dancing partners for those truly stars. Dancers kept bodies and souls together as dancing partners and actor in commercial performances. A few of them were lucky to have the chances of teaching in school dance clubs.

4. from 1999 to nowadays—shape-taken stage: Most of the mainstream professional dance crews established in development stage had their own studios at this stage. Because numerous dance clubs in schools came into existence, teaching these clubs is the most important income of professional hip hop dancers in Taiwan. By the way, many great students in school clubs became pro dancers. However, in about 2002, entertainment industry published street dance crews' disk records again.

In fact, every stage in the evolutional track of street dance in Taiwan could not get rid of the effects of mass media. So many hip hop dancers in Taiwan went into dance just because TV programs or movies. When they appeared on TV, some audience was motivated to participate in street dancing. Although the elements of hip hop can not avoid the destiny of being used, dumped, and used by the commercial during they are spread with American fashion culture, the extension of street dance actually works in the most practical way.

From the very beginning, the role of street dance in Taiwan was the leisure activities between the youth. Afterwards, it became a tool used by entertainment industry. Till now, it stands for different meanings because of different status in practitioners. In recent years, dance crews composed by young boys appeared in Taiwan show business, once again street dance is displayed under the mask of fashion. In the evolutional track of street dance in Taiwan, the demand-supply relationship between street dancers and entertainment industry always lies in a subtle way.

The Relationship across the Taiwan Strait and the Bidding of Mega-events in Taiwan-a Strategic Relations Perspective

Hung-Yu LIU

Department of Leisure Management

Ming Hsin University of Science and Technology

Taiwan

ABSTRACT

In this study, we examined strategic relations aspects of the nature of the evolution of sports and the impact under such circumstances between the Taiwan Strait, particularly the mega-events bidding. These aims have been addressed by the development of analysis of the Chinese Taipei position and its impact for sports development; the internal structure and history in local government and their further implications for mega-events. The empirical analysis of the issues draws on the evidence provided by key actors in the ROC/Taiwan state who have played a significant role in enabling sports policy output. In order to understand the mechanisms for bidding Mega-events from Asian Games disappointed to the 2009 World Games enabling, local politicians' perceptions provide a useful empirical picture of sports policy. Other data sources employed included government reports, and press accounts as well as interviews with key actors. The interviewees were drawn from the central government civil service, local government, the national governing bodies of sport and local politicians. It should be noted that 'strategic relations' theory is, in a sense, a meta-theory; it seeks to inform the way an adequate analysis of the state's form and its functions can be addressed in a fruitful approach to understand the formulation and function of democratic states. Jessop (1990:270) suggested that "strategic-theoretical approach has only been able to provide some abstract and formal indications about new directions for research and enquiry". It therefore poses a number of critical questions in this respect. It asks questions such as in what ways do certain forces come to be represented in policy decisions? What is the kind of relationship between the state form and society and between the state and

its wider environment? How might these inform a specific state strategy? The theoretical framework on which the study draws involves recognition that the state is influenced by particular groups. The particular make-up of these groups will vary according to the issues concerned at the particular point of time in the history of the ROC/Taiwan state on which one focuses. Such political and ethnic divisions subsequently had an impact on party political affiliations and on the geographic location of facilities and services as the North and South of the island, and those cities under the Kuomintang and Democratic Progressive Party control, vied with one another to capture resources. As provided above phenomenally and theoretically, how strategic perspective can be adopted into Taiwan sports development? The project provides four aspects. Firstly, the central government plays a significant role, but it decreased after the year of 1981. Secondly, the cooperation among the central government, hosting city and NOC for running international sports event needs right coordination in advance. Thirdly, the cooperation among central government, hosting city and NOC needs more sophisticated balance. Finally, to host international sports event needs detailed discussion on its size and level before the case being presented.

Keywords: Chinese Taipei, mega-events, Taiwan Strait, strategic relations

This project has granted by National Council on Physical Fitness and Sports, Taiwan

「台湾大学野球とグローバル化」に関する調査研究

A Research on Globalization and College Baseball in Taiwan

○林伯修(台湾師範大学) Lin Po-Hsiu (Taiwan University of Education)

平井肇(滋賀大学) Hajime Hirai (Shiga University)

1.はじめに

2006年7月現在、海外でプレイする台湾の野球選手は、メジャーリーグに19名、日本プロ野球に8名である。2006年メジャーリーグで活躍した王建民(ワニジェンミン)選手は、母国台湾でも大旋風を巻き起こした。台湾でもグローバル化に関する研究は、プロ野球選手を対象とするものが多く、プロ野球予備軍の大学野球選手に関する調査はほとんどない。Maguire, Stirling, Mansfield & Bradley (2002, p.5)は、グローバル化には移動(migrant)、技術、経済、メディアそしてイデオロギーの5つの要素がグローバルフローとして表わされているとしている。本研究では、将来が有望な台湾の大学野球選手を対象に、グローバル化が彼らに与える影響を Maguire et al. が言及した5つの次元で調査・分析を実施した。

2.研究の手順

2006年8月上旬、台湾体育学院、文化大学、台北市立体育学院の野球部に所属する選手を対象にアンケート調査を行い、有効回答数は96部であった。同月下旬、それぞれの監督と台湾のプロ野球へ進路が有望な選手6名にインタビュー調査を実施した。質問項目は全部で35問である。対象者は、「まったくそのとおり」から「全く違う」まで、1から5までの五段階で回答を得た。

3.研究対象

選手の内訳は、一年生33名、二年生26名、三年生27名、四年生13名の合計96名で、選手全員は体育学またはスポーツ学系の学生である。小学校から野球を始めた選手が83名と全体の86%を占め、中でも10歳(小学校四年生)から始めた選手が最も多く27名であった。中学校から始めた選手は16名(同17%)で、高校から野球を始めた選手はわずか2名だけであった。彼らは台湾野球のエリート選手に位置づけられ、実際に全国大会に出場を経験した持つ選手は46名、その中でも国際レベル大会に参加した経験を持つ選手は39名であった。

4.研究の結果

本研究の結果は、グローバル化の影響が台湾の大学野球選手たちに対して、どのような影響をあたえるのかという観点に立って、以下の手順で分析を行う。

(1)将来の進路について:

台湾のプロ野球に入団したいとする選手たちは61名で、海外でのプレーを希望している選手は31名であった。また、実業団(社会人)野球に進みたいと回答した選手はわずか2名、野球以外の本職とする職業に従事すると回答した選手も2名であった。ここに表れた個人差について選手たちにインタビューした結果は、大学への入学後、自分自身の実力が台湾プロ野球レベル、日本のプロ野球レベル、アメリカのマイナーレベル、メジャーリーグレベルなのかといった、どこまで「自分自身が通用できるだろうか」ということがよくわかつってきた」と回答した。各国のプロ野球で一番プレーしたい国は上から「日本」、「アメリカ」、「台湾」の順であった。

(2)世界のプロ野球への関心について:

選手たちが最も関心を持つプロ野球リーグは、上から「アメリカ」、「日本」、「台湾」であった。よくテレビで見るプロ野球は、上から「アメリカ」、「日本」、「台湾」で、全項目と同じであった。注目すべき点は、最も放送される回数が少ない日本のプロ野球中継が台湾の選手たちにとって、最も身近な台湾のプロ野球中継よりも視聴していることであった。選手の92%が「海外の野球情報が入ることはいい」と回答した。その理由としては、台湾のプロ野球の技術の底上げに効果的であるとしていた。

(3)台湾野球選手の海外流出について:

海外で活躍する台湾選手へ「関心をもっている」との問い合わせには、選手たちの84名が「まったくそのとおり」もしくは「どちらかといえばそのとおり」回答した。その一方で「どちらともいえない」には10名、「そうでもない」にも2名が回答していた。選手の「海外へ行くことは良いことである」との問い合わせに回答した選手は75名で、どちらともいえないは18名、反対は3名であった。選手が海外へ、台湾の野球とプロ野球にとって選手が「海外へ行くことは良いことである」と答えたのは全体の7割強であった。

インタービュー結果によると、海外へ行くことが良いとした具体的な理由はとしては、「よりよい環境で野球が勉強できる」、「より厳しい競争に身をおくことができる」、「より高い給料を得ることができる」という個人的なメリットであった。そして、彼らは将来的に台湾へ帰国後も、野球界に対して台湾とは違った野球観、技術、視野を与えることができると考えていた。反対の意見も約1割存在し、その理由は台湾のプロ野球のレベルを衰退させ、白熱した試合が味わえなくなるのではないかとの恐れがあるとしていた。(4)台湾のプロ野球について:

台湾のプロ野球に魅力があるとの問い合わせに、「まったくそのとおり」は32名、「どちらともいえない」28名。台湾のプロ野球経営はよいと回答した選手は46名、選手の育成システムはよいに「まったくそのとおり」、「どちらかといえばそうである」と回答した選手は47名であった。そして、これからも台湾のプロ野球が成長すると信じている人数は「まったくそのとおり」、「どちらかといえばそうである」を合わせると63名だった。台湾人が野球への関心を持つことに「まったくそのとおり」、「どちらかといえばそうである」を合わせると46名、プロ野球選手は尊敬されているに「まったくそのとおり」、「どちらかといえばそうである」を合わせると63名であった。

(5)野球という台湾の国技について:

台湾国民が台湾のプロ野球への関心を持っているとの問い合わせに「まったくそのとおり」、「どちらかといえばそうである」と回答した選手は45名、「どちらでもない」と答えたのは36名、「そうでもない」回答した選手は13名であった。しかし、63名の選手たちが台湾のプロ野球選手が尊敬されている職業であると回答した。選手たちの観察によれば、86名の選手たちが国際大会の成績は、台湾野球の発展につながると認識していた。よって、74名の選手たちは海外の台湾人選手はワールドベースボールクラシック(以下「WBC」)等の国際大会にもっと参加すべきであるとの認識であった。

(6)台湾野球の実力について:

まずWBCの成績に関する結果についてであるが、79名の選手たちが台湾チームの実力は日韓よりも低いと回答し、その中でも、88名の選手たちが台湾のプロ野球の方が日本のプロ野球に比べて「レベルが低い」と回答した。逆に台湾のプロ野球の方が「レベルが高い」と回答した選手は2名で、「同じレベル」と回答した選手は4名であった。

大学野球に関しては、台湾の方が日本と比較して「レベルが高い」と回答した選手は5名、逆に台湾の方が日本と比較して「レベルが低い」と回答した選手は49名であった。「同じレベル」であると回答した選手は25名であった。

台湾野球の発展にとって、台湾選手が海外へプレーすることへの感想は、ほとんどの選手が台湾の野球技術を向上させること、そして、台湾を世界にアピールできると記述していた。最後に台湾野球への提案については、二軍の成立、給料水準の引き上げ、日米プロ野球経営を参考にすること、そして、八百長事件をおこさないことである。

5.おわりに

グローバル化は、経済力で選手を世界中に移動させるパワーを有している。そのパワーはメディアを通じて観客を感動させ、夢を与え続ける。台湾の大学野球の選手たちはテレビで世界の野球を知り、そして、学生でもあるために技術を進歩させたいとの気持ちをアンケート綴った。また、選手たちは野球で台湾をアピールできるという答えから、野球は台湾の国技であることがここに再び証明された。

参考文献

- Maguire, J., Stirling, G., Mansfield, L., and Bradley, J. 2002. *Sport World: A Sociological Perspective*. USA: Human Kinetics.

Exploration to the factors of decrease in fans' attendance in CPBL 17th in Taiwan.

Chen-An Chuang Nation Taiwan Normal University

The purpose of this study was to explore the factors of decrease in fans' attendance in CPBL 17th in Taiwan, including the fans' demographics, satisfaction and intentions of entering again.

The purpose of research:

1. to explore the factors of decrease in fans' attendance in CPBL 17th in Taiwan.
2. to discuss the motivations and purposes of fans to attend the games in CPBL 17th in Taiwan.
3. to research the willing of which fans join more games in the future in CPBL 17th in Taiwan.

Methodology:

Subjects were baseball fans who had used internet in the past and posted messages on one of seven professional teams' official websites or forums. A random sample was drawn from internet questionnaire, and there were 375 valid samples filling this questionnaire. In this study, scale of professional baseball fans' motivations and satisfaction was used to implement this internet questionnaire research. The data gathered were analyzed by means of descriptive statistic and factor analyses.

Result:

1. Demographically, internet fans were consisted of 66.7% male and 33.3% female, aged 16 to 25(64.2%), and most of them are students(59.8%).60% of this sample had an average monthly income less than NT\$ 10000. 77.9% of this sample were university students. Compared with former researches, there was a significant difference in "supported team" in which the fans of La New bears was the most (30.9%). In fans' attendance, fans joining 5 to 10 games decreased 6.7% and 10 to 20 games decreased 0.8%; however, fans joining less than 5 games increased 6.7%. The willing of which fans attended games in CPBL 17th in Taiwan was not influenced by well-performed players overseas (71.7% of fans agreed that.).
2. In fans' satisfaction, it was composed of three subscales including "facility", "additional events" and "psychological state". Particularly in psychological state, it made fans more satisfied than others with an average 3.51 in Likert scale 5. In subscale of psychological factors, the factor, joining the game can relax my nerve and pressure, was the highest with an average 3.64. On the contrary, the subscale of facility was the lowest with an average 2.72, especially in the factor, planning of ballpark surroundings, was the lowest of all with an average 2.59.
3. In importance of joining motivation, fans' joining motivations were four subscales including "team management", "players' performance", "marketing strategies", and

"daily life environment". Subscale of Team management was the most emphasized by fans with an average 4.64; besides, the factor, manager's endeavor to the team, was the highest with 4.74. In contrast, subscale of environment is unnecessary to fans; in addition, the factor, fatigue from job, was the lowest with 3.29.

Conclusions:

Team management was the most important subscale impacting the attendance of fans, including "manager's endeavor to the team", "fans management", "welfare and salary for player", "home stadium management", and "minor league system". As to oversea players in 2006 such as Chien-Ming Wang, Hong-Chin Kuo, and Chien-Ming Chiang, 71.7% of fans thought their performance didn't influence their intentions to join games in CPBL 17th in Taiwan. There were two existed problems needing to be solved immediately to attract more fans. They were "team management" (44%) and "clean up all cheating in CPBL" (26%).

Three-concerned Relationship :
Reconsideration on the Football Association in Taiwan

Toshiyuki Yamanokuchi
(National Taiwan Normal University, Taiwan)

1. Introduction

The main island of Taiwan is located off the coast of the territories administered by China, south of Japan and north of the Philippines. Baseball and basketball are the favorites of Taiwan, but the country has actually had more success in football traditionally. Taiwan's football has a glorious history conquering the Asian Games twice in a row, in 1960 and 1968, and qualifying for the 1960 Olympic Games. The football association in Taiwan is called the Chinese Taipei football association now and it is the governing body of football in Taiwan.

Taiwan's football is run by the Chinese Taipei Football Association, which in turn runs the national teams for men and women and several domestic competitions. The Chinese Taipei football association requested assistance from the Japan Football Association and welcomed the experienced Toshiaki Imai as a head coach of the national team. He is the first Japanese head coach in Taiwan national football team. The support toward football in Taiwan is following a gentle upward curve.

2. Purpose and Methodology

In this study I hope to make clear the importance of why I focus on Taiwan's football association, now called as the Chinese Taipei football association, is so important today. This study conducted through documentary analysis and in-depth interviews to discuss it. It is beyond the scope of this study to describe the political issues that comprise the time before 1953.

3. Definition of football associations that are connected with Taiwan

The football association in Taiwan was affiliated to some international football federations and has been affiliated to them. The football federation or associations are following three international organizations.

(1) The Fédération Internationale de Football Association (FIFA):

FIFA is the international governing body of association football with 207 members on January 1st 2007. FIFA is responsible for the organization and governance of football's major international tournaments, most notably the FIFA World Cup, held since 1930.

(2) The Asian Football Confederation (AFC):

AFC is the governing body of football in Asia with 46 members, including Taiwan and Japan. It was founded in 1954. AFC is responsible for the organization and governance of

football's major tournaments in Asia, most notably the Asian qualifying tournament for the FIFA World Cup. AFC is affiliated with one of FIFA's six confederations.

(3) The Oceania Football Confederation (OFC):

OFC is the governing body of football in Oceania with 13 members. It was founded in 1966. OFC is responsible for the organization and governance of football's major tournaments in Oceania, most notably the Oceanic qualifying tournament for the FIFA World Cup. OFC is also affiliated with one of FIFA's six confederations.

4. The history of Taiwan's football and the association

Back in the 1950s, Taiwan's national team was crowned champion of Asia in the Asian Games for two consecutive tournaments, in 1954 and 1958. At that time Taiwan's football association was affiliated to FIFA as the "China National Football Association" in 1954. Their so-called golden age continued into the 1960s, where they captured third place in the 1960 Asia Cup and fourth in 1968. As other Asian countries promoted a professional league and started to improve dramatically, Taiwan retained their amateur and semi-amateur status. Compared with other overwhelmingly popular sports like baseball and basketball, football did not receive so much public attention; thus, developing a professional league was out of the question.

Taiwan's football association changed its name to the "Republic of China Football Association (ROCFA)" in 1973. At one point, Taiwan attached itself to the OFC, and the glory that once was became something of the past. The association exited the AFC in 1974 and entered the OFC as a provisional member in 1975. The association was suspended from the OFC because of name problems in 1978 to 1982. The association changed its name to the "Chinese Taipei football association" in 1981.

Chinese Taipei is the designated name used by Taiwan to participate in most international organizations. Due to the insistence of China under its version of a policy, Taiwan cannot use a name of "Taiwan" when participating in international organizations including Olympic Games.

5. Findings and Conclusion

This research discusses mainly about the history of Taiwan's football association from the perspective of sport cultures. The conclusions of three-concerned relationship are as follows:

(1) Taiwan's football association has been affiliated to FIFA as the China National Football Association in 1954 and changed its name to the Republic of China Football Association in 1973. In addition, Taiwan's football association has changed its name to the Chinese Taipei Football Association in 1981. It is found Taiwan's football association that has changed the name twice since 1954. (2) Taiwan's football associations had joined the OFC member in 1975, and had readmitted to AFC after a 14 year membership of the OFC, even though the country is located in Asia.

台湾甲組棒球に関する研究
台湾師範大学運動與休閒管理研究所 林伯修

1.はじめに

台湾の甲組野球は、日本の社会人野球と同じくアマチュア界のトップ選手を育成しているのだが、その経営に関してはやや異なる部分が見受けられる。台湾の甲組野球チームの運営内容には、それぞれのチームで違いがあり、その経営モデルは、「企業野球チーム」、「建教合作野球チーム」、「大学野球チーム」と「軍隊チーム」の四種類に分類することができる（林伯修、2006）。現在、甲組野球の軍隊チームは、完全にプロ野球の二軍としてプロ野球球団と一緒に練習、試合を行っているが、選手の身分は曖昧な状況である。当然ながら、企業野球チームの目標は、各社の「イメージアップ」と「社会への貢献」などであり、軍隊チームは義務兵役の下で、野球選手としてのキャリアを続けることが政策の根柢となっている。では、なぜ台湾においてこれら「建教合作野球チーム」と「大学野球チーム」が誕生したのであろうか。

2006年に甲組野球チームは14チームがあるが、本研究では、スポンサーシップとの協力関係の結びつきの視点から、6つの「建教合作野球チーム」と6つの「大学野球チーム」の経営について分析を行った。なお、2つの「企業野球チーム」に関してはその対象と含めない。

2. 建教合作野球チーム

「建教合作」とは学校と企業が契約で協力関係を結び、企業は主に資金面での支援を行い、学校の選手は、学校教育を受けながらスポーツの専門的な練習を行うことができるという経営パターンである。建教合作の企業は、野球チーム選手の学費もしくはチームの運営に必要な資金のいずれか、または、両方を経費として提供する。その契約は学校のニーズや企業の資金力によってそれぞれに内容が異なる。チーム経営に関しては、学校が主導的に行っている。

(1) 建教合作野球の歴史

建教合作野球チームの中で最も歴史の長いチームは、文化大学と輔仁大学である。1970年代台湾の少年野球チームは、何年間か連続してアメリカで行われた少年野球世界選手権で優勝を飾った。その少年たちが成長し、主に台灣南部に住んでいた少年たちが入学した美和高校は、1974年に高校野球の世界選手権で優勝を飾った。しかし、世界選手権での優勝の後、彼らは野球人生を続けたいと願っていたが、国公立の大学は、それら生徒たちを受け入れることができなかった。そのような状況の中、元台灣教育部部長（日本の文科大臣に相当）で当時の文化大学学長の張其昀は台湾のためとして、生徒たち全員を全額学費免除で進学をさせた。野球道具など足りない資金に関しては、竹山林という寺院が100万台湾元を寄付したが、寺院はあくまでも企業ではなく、本当の意味での「建教合作」の関係ではなかった。

当時、蔣宋美齡は台湾の高校野球名門の華興中学の理事長で、同様にキリスト教関係の輔仁大学に対して、自らが理事長を務める同校の生徒たちを進学させてもらえないかと頼んだが、輔仁大学には予算が無かつたため、葡萄王（清涼飲料会社）という企業が資金的な支援を行った。これは台湾の建教合作野球チームの第一号であり、台湾スポーツにおける建教合作という経営モデルを確立した。

(2) 建教合作野球チームの現状と運営

台湾の建教合作野球チームは、文化大学と美孚建設、環球技術学院と劍湖山遊樂園、台北

体育学院と栄工建設、台湾体育学院と富邦文教基金会（大手銀行の基金会）、國立体育学院と台湾ビール、嘉南藥理科技大学と台湾糖業の計6チームがあり、それぞれがコンビとなって「建教合作」関係を結んでいる。

パートナーシップパターンと言えば、企業側は野球チームが希望した予算を経費として提供し、学校側は大学のリーグ戦では各大学とも大学名の書かれているユニフォームを着て試合を出るが、その他の野球大会は企業名のあるユニフォームで出場して企業の宣伝を行う義務が各大学に課されている。言い換えれば、各大学は野球チームを経営していくために、大学の名称をネーミングライツとして企業に売却したという形態で、企業とのスポンサーシップ関係を結んだ。ほとんどの大学とも慣例的に契約期間は三年間であるのが、時々半年契約もある。

3. 大学野球チーム

大学野球チームには、輔仁大学、開南管理学院、立德管理学院、萬能科技大学、大漢技術学院と吳鳳技术学院など、6つの私立大学野球チームがあり、唯一の国立大学の野球チームは嘉義大学だけである。ほとんどの私立大学は学校を宣伝する目的で野球チームを作ったが、輔仁大学は建教合作のパートナーシップが廃止された影響で、大学野球チームから現在は撤退してしまった。

嘉義大学は、嘉義技术学院（前身は甲子園に決勝までいた嘉義農林学校）と嘉義師範学院が合併したできた大学である。野球チームは学校の「校寶（大学の宝物）」であり、昔からの伝統を守るために、学校側が毎年324万台湾元の予算を計上して、チームの維持を行っている。

4. おわりに

台湾の「建教合作野球チーム」と「大学野球チーム」の経営において、一番重要なポイントは「人」の問題であることが明らかになった。大学野球チームは、学校を宣伝するために直接大学から支援されるのでほとんど問題はないが、建教合作野球チームには、いくつかの課題が残っていることがわかった。それは、メディアヴァリューが低く、市場規模が小さいために、台湾甲組野球の「スポンサーシップ」の現状から鑑みると、「台湾式」スポンサーシップは、半分が「スポンサーシップ」で、もう一方が「寄付」に過ぎないということであった。

建教合作野球チームの課題は、まず、学校側と企業側がどのようにお互いの利益を交換しながら、よい協力関係を維持していくのか、ということであろう。例えば、2003年から2005年まで輔仁大学野球チームは「中興保全」という警備保障会社がスポンサーとして支援を行っていた。しかし、2006年に同社は輔仁大学の警備保障業務の入札に敗れたため、同大学のスポンサーから降りてしまった。同社担当者は「ウチの会社が六年間にわたって、約4000万台湾元（年間600万台湾元）もの資金を同大学の野球チームを支援し続けてきたのに、どうして100万、200万の業務をやらせてもらえないか？」と強烈な批判を行った。

そして、地方の企業からはどのような協力関係を結び続けるのかという問題もある。例えば、嘉南藥理科技大学と台湾糖業の半年間の契約は、ビジネスよりも、地方特有の「人情」が大きく影響して契約を結んでいた。同社の社長が辞職してからは結果的にその契約は延長されなかつた。しかし、環球技术学院と劍湖山遊樂園のケースは、地方企業と大学がよい協力関係を結んだ一つの例としてあげることができる。

Our memory, Our baseball, the Taiwanese Collective Identity

Li-Wei Hsu

Graduate student of Sports and Leisure Management, Nation Taiwan Normal University, Taiwan

Introduction

It was an abundant harvest for Taiwanese baseball field last year (2006). Chien-Ming Wang, so-called "Son of Taiwan", had 19 wins in the single period of MLB. The Taiwanese media described him as the "First One in Asia". Later on, the LANEW BEAR (pro-baseball team) defeated the SAMUNG LIONS and won the second in Asia Series. Chinese Taipei (CTP, National baseball team of Taiwan) got the third in Intercontinental Cup. It finally reached the climax that Chinese Taipei defeated the archenemy, Japan, and got the champion in the 15th Asian Games Doha. If you are not a Taiwanese, you may not understand why the Taiwanese media reported massively in the series of baseball games. You may not understand why all the Taiwanese were so crazy about the baseball? Why does Chien-Ming Wang become the one whom everybody in Taiwan tied his heart with? The Japanese baseball team which CTP defeated in Intercontinental Cup and Asian Games Doha is an unprofessional team. Why did the Taiwanese still feel so happy? When Japan, Korea, and Taiwan encountered each other in the international baseball games, they became the focus of attention in Taiwan. Was it just the atmosphere constructed by media? Or were there any other reasons? All of these are what I want to probe in this research.

Purposes of the study

1. How is the Taiwanese collective identity formed?
2. Why does the collective identity choose baseball to be the mediator??
3. Does this kind of identity exist abidingly?
4. When Taiwan national baseball team meets Japan or Korea, why do the media love to report it so much than any other matches?

Research Method

This research adopts document analysis and deep interview. The documents include two domestic baseball magazines *Baseball Professional* (Chinese) and *Passion*, the news reports about all of the baseball games in 2006 on the newspapers and the TV.

Discussion

Identity is the question that has been discussed by lots of scholars many times. In Taiwan (or so-called Republic of China, ROC), there are so many disputes about the identity that never end. For domestic, it involves in the ethnicism (Mainlander VS Taiwanese local residents) and political identity (KMT VS DDP). For overseas, we search the identity to get respect in the isolation of international society and to differentiate from the national consciousness of China. So much ambiguous identity makes Taiwanese doubt who they are and what they belong to.

Besides, Taiwan goes through the party transition recent years, but there is still political conflict between the new government and the old regime. The president and the leader of party have rigged cases. Prices for consumer goods are going up, but the salaries of people aren't. Therefore, we can say that the people in Taiwan lose their hope to the entire environment. At this time, here comes Chien-Ming Wang. Taiwanese expect him to promote to MLB, be the starter always, and to get 10 wins or even 15 wins in a single period. They also expect him to break the record for the most wins of single period in Asia. They even expect him to win the CY Young Award. Those amazing expectations make Wang become the "Super Hero of Taiwan"

Deford(1985) had subliminal concept regarded sports as a symbolic refuge. In this refuge, everyone can avoid the daily problem, pressures, and annoyances. That's why Wang means so much for Taiwanese than that Ichiro or Matsui does for Japanese. Furthermore, Chang Li-ker in his article *Baseball and Identity: An Analysis of Sports Sociology*, mentioned that baseball field is always the important field where Taiwanese construct their self-identity. And the reason why baseball prevails in Taiwan has its historic context. Besides, baseball is a minority of sports that Taiwan can win the awards in internationals. That's the reason why Wang and the CTP players could be the hero in Taiwan.

Therefore, we can understand why baseball constructs the collective identity for Taiwanese. And we can say that the collective identity is also a kind of collective memory, just like our memory for Wang's and CTP's good performance. However, this collective identity evoked via Taiwanese baseball field will never end until Taiwan has a definite position in the international society, and there is no bipartisan conflict and no antagonism between ethnic groups.

A Sports Hero's birth

-- The Deconstructing of Chien-Ming Wang Phenomenon

Liao Yung

Abstract

It's never seen before in Taiwan. Since 2006, "Chien-Ming Wang Phenomenon" became a main stream in Taiwan. Thousands of people try to purchase the products about Chien-Ming Wang, and more than hundreds of people stay up and pass a night on the street in order to buy the products endorsed by Chien-Ming Wang. Taiwan Public Television (PTS) bought the TV broadcast rights of every game which pitch by Chien-Ming Wang. Even the legislator encouraged people to wear Chien-Ming Wang's jersey to political parade. A lot of people and Medias named him "the Spirit of Taiwan", some view him as the national hero as well.

As the pitcher of N.Y Yankees in MLB, Chien-Ming Wang makes the people cohesive in Taiwan successfully. To a lot of people, he becomes an important part of their life. He also creates the "Chien-Ming Wang Phenomenon". His magic power let Taiwanese people support him transcend ages, parties, and races. It also raised many discussions in the Taiwan academic circle and society, and people from different background tried to interpret the "Chien-Ming Wang Phenomenon" in different ways and aspects. The main purpose of this paper is to try to deconstruct "Chien-Ming Wang Phenomenon" by the concept of "Sports Hero" and also realizes the formation of a sports hero.

The concept of heroes in modern society from the diviner or the theanthropic one with charisma and over-earthborn spirit in Heroes and Hero-Worship by Thomas Carlyle (Ho, 1963) to the human who can console lonely people spiritually in the biography of heroes by Romain Rolland (Lee, 1994). The research of other scholar (Nan, 1987; Lin and Yu, 2003; Nixon, 1984) pointed out heroes in modern society are the spokesman to convey the real and fine value and make the society progress. From this part, we can find out that heroes in modern society may convey some fine value or console lonely people spiritually or have excellent performance in one field.

Sports in the modern society are like a mirror to reflect some faces of society. There are some researches about sports heroes in America; Haerle (1974) pointed out the image of American's sports heroes is connected with major social value in America. Strudler (2006) also pointed out that sports become a popular field to find their heroes since 20th century by lots of scholars. The research about sports heroes in Taiwan, we can realize sports heroes play the leader role, reflect the social phenomenon, and show the social cultural value, a model people imitate, and cohere the society (Liao & Lo, 2005). From these, we can understand the coherence between sports heroes and social value. Besides, in the changing or developing society, sports heroes could be the cultural heroes and they might be formed to lead us by mass

media or government (Wang, 2000).

There is no complete research with case study or formation to the sports heroes in Taiwan. So this paper will discuss how the "Chien-Ming Wang Phenomenon" forms, and its meanings by documentary analysis and case study.

The results of this study on the formation of "Chien-Ming Wang Phenomenon" and its meanings are the five parts above. First of all, the achievement and baseball technique of Chien-Ming Wang is the most important part. He posted a 19-6 record with a 3.63 ERA along with 76 strikeouts, 407 ground outs, and 2.84 ground outs/fly outs ratio in 2006 season. He also led both leagues in wins along with Minnesota Twins ace Johan Santana.

Secondly, Chien-Ming Wang's fine personality and spirits presented by media retrieve some of the lost values in the Taiwan society. His specialty in his field and the "power of silence" are the models that the politician and people have to learn (Tsao, 2006), especially at the moment of political disorder in Taiwan. His positive image and behavior also convey the bright value to the Taiwan society. He denoted his jerseys and autographed balls to support disadvantaged minority fundraising (Lo, 2006). He also took the role as the spokesman of anti-poison, IBAF intercontinental cup, and world university games in 2009 (Wang, 2006 : Hao, 2006).

Third, the media and government strengthen the Chien-Ming Wang Phenomenon from different aspects. The media reports and chases every information about Chien-Ming Wang. The president of Taiwan commended him in the stadium of N.Y Yankees (Chuang, 2006). And the Department for Education awarded him the highest value prize (Li, 2006). He was also engaged an associate professor in his alma mater (Wang, 2006).

Last but not least, the national confidences are promoted by Chien-Ming Wang. His 19 wins in 2006 broke the record for wins in a season by an Asian pitcher formerly held by Chan Ho Park. And he is the first ethnic Asian starting pitcher to have won a post season game (Lee, 2006). Chien-Ming Wang always brings good news to Taiwanese people, and makes them feel proud and glorious at the same time. It is also an imagination for the people in Taiwan to feel like they're standing the top of Asia.

This paper provides the first step about the formation of the "Chien-Ming Wang Phenomenon". By the concept of "Sports Hero", this study finds out that there are four main elements helped to build Chien-Ming Wang Phenomenon, including his baseball technique and achievement, positive image and bright personality, broadcast by media and government, and the glorious nationality he let Taiwanese people feel. These elements also relate to each other at the same time. Hope this paper can be an important reference for the sports heroes' research in the future.

Study of the marketing of Keelung Jung Yuan Festival(基隆中元祭)

National Taiwan Normal University graduate student- Guo, Ya-Ting

Abstract

Lunar calendar July is the Taiwan folk sacrificial rituals most frequent month. Nearly everywhere all has Pu Du ceremony from the metropolis to the villages. Keelung Jung Yuan Festival has the most characteristic because it's geographical environment and the historical humanities background. The origin of Jung Yuan Festival in Keelung can be traced back to the "Changchow and Chuanchow Clash", it was a war between the people of Changchow and Chuanchow coming from Fukien Province of Mainland China that occurred in August 1851 (1st year of Ching dynasty Emperor Hsien Feng.). Many people died violently in this brutal fight. A sacrificial ceremony was performed on the verge of further revenge and provocation. Fortunately, knowledgeable people of high esteem stopped the mediate and the imminent clash did not take place. It was decided then that families would alternately by family name offer sacrifices to relieve the souls of the dead from suffering in the next world; regionalism was replaced by kinship, substituted for the undesirable customs of fracturing skulls. The sacrificial services have been conducted ever for 152 years. From 2001 Tourism Bureau has chosen Keelung Jung Yuan Festival as one of the 12 Major Events in Taiwan and gives the funds subsidy. Thus, it can be seen receives takes. However, the younger generation regard Keelung Jung Yuan Festival not to be understood and it doesn't achieve the goal, which develops the tourism by Keelung Jung Yuan Festival.

The main purposes of this study are to 1.Understand the origin in Keelung Jung Yuan Festival and the significance of each ceremony. 2. Discusses the surnames of all families in Keelung who play important role in the society. 3. Inspect the marketing of Keelung Jung Yuan Festival. 4. Make the marketing strategy offer a reference to Keelung Jung Yuan Festival in the future.

Collecting Literature and In-depth interviews were adopted in this research. Ten persons in the surnames of all families were visited. The research discovered that, 1.The members in the surnames of all families in Keelung are over 60 years old male, the number as high as 80%. 2. The funds of activities in the surnames of all families are mainly from the members' contribution. 3. Not yet provide before the subsidy in the governmental agency, all expenditure in Keelung Jung Yuan Festival was paid by the surnames of all families. 4. The principal sponsor of the surname of family can spend approximately above 1,200 million NTD, but other participation of the surname family have to spend about the 40~50 thousand NTD. Thus, it may be known that the

power of unity and approval in the surname family and how so support in Keelung Jung Yuan Festival. 5. Because the ages in members of the surname family are older, so they often held Keelung Jung Yuan Festival in the tradition methods. Sometimes they make some innovations in activities, but it doesn't have many effects. Therefore, the surname families don't make any explicit marketing strategy in Keelung Jung Yuan Festival. They are always depending on the marketing strategy from Keelung government. The reasons are that they don't make well-detailed plan, to achieve the mutual recognition in communication and make good marketing strategy so that it is not successful in holding Keelung Jung Yuan Festival.

Some suggestions in cooperation between the surnames of all families and Keelung government, as following:

1. Strengthens the coordination between the surnames of all families and Keelung government.
2. Tourism marketing talent training.
3. Convene regional tourist industry, visiting industry, catering trade to establish strategic alliance, and plan the traveling package schedule.
4. Manufacture the souvenir about Keelung Jung Yuan Festival.
5. The parade activity should be made with fine plan.
6. Hold the Festival carnival on 3~4 date that can let the creativity decorated vehicle enter and be display. The folk custom art association can be performance and provides the DIY activities about the Keelung Jung Yuan culture industry.

【Keywords: Keelung Jung Yuan Festival(基隆中元節); marketing】

**The Research on participant motivations of consumer、
consumer behavior and consumer satisfaction in fitness
center**

A case study of Taipei city Betiou sport center

Wang lin-kai

Abstract

The purpose of this study was to examine the participant motivations of consumer, participating behavior, and satisfaction of consumers visiting to Taipei City Betiou Sports Centers. This research is conducted through questionnaire survey, convenience sampling to answer three questionnaires regarding to the study. The total samples given out are 400 copies, and the effective samples collected were 346, effective sample collection percentage is 84.8%. Data was analyzed by the method of descriptive and inferential statistics, including one-way ANOVA, independent-samples t-test, Scheffe method, Pearson correlation. The conclusions were:

1. The consumers at Taipei city Betiou sport center were attending once or two to four times weekly(59.5%) and each visit about one to two hours(46.2%). And consumer consider to visit the Sports Center regarding to nearly office and location(57.9%); 6 p.m. to 10 p.m. was the most popular period of a day(45.6%); most consumers were accompanied with one person (43.4%) and visited the Sports Center at random day (69.8%). The main reason for consumers to visit the Sports Center was 「participation can improve my health concern」,「need for achievement」 received the highest rating in participant motivations of consumer.
2. The main reason for consumers satisfaction at Sports Center was a part of 「clean and sanitation of whole environment are excellent」,「accessorily facilities」 received the highest rating in consumer satisfaction.
3. Consumers at Taipei city Betiou Sports Center were significantly different on participation motives and participating behavior such as , 「Aggregate Feeling」
4. Participating behavior at Taipei city Betiou Sports Center was significantly different on participant motivations of consumer, aspect of 「need for perception」、「need for health」.

5. The findings of this research show that the aspects of Hardware Facilities relevant to participant motivations of consumer from the following aspects: 「need for achievement」, 「need for social」,「need for perception」,「need for health」.

The research was to testify that participant motivations of consumer、consumer behavior and consumer satisfaction have positive affect to participate in fitness center. In conclusion, dealers who manage the fitness center should provide multiplicate hardware facilities and sport programs for consumer to choose. In addition to design difficult program to satisfy with 「need for achievement」 of consumer. Future research should compete what different between fitness club and sport center are, besides researcher can obtain accurate information for consumer as possible as they can and put to use deep interview.

Keyword : participant motivations of consumer、consumer behavior、consumer satisfaction、fitness center

A Research on social development of the soccer participant in Taiwan

Jia-Jahng Guo

Abstract

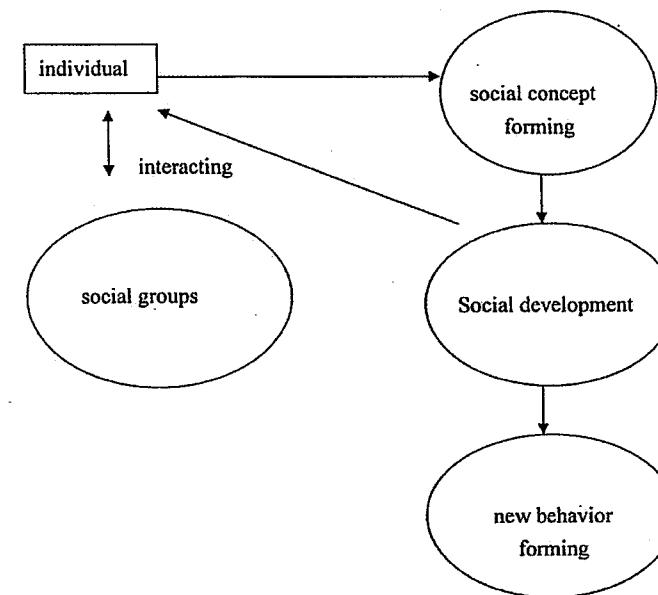
Soccer is not popular in Taiwan, but there are still a few people participating in it. The people continue to participate in soccer for a long time, and their habitual behaviors are formed from social development after interacting with social groups. Social development is a process which results in the transformation of social structures in a manner which improves the capacity of the society to fulfill its aspirations. As a result, the reason of this research is to discuss how Taiwan people gain the behaviors and values of social development through participating in soccer.

For the reasons above, the purposes of this research are to discuss what kind of social developments do the soccer Participants in Taiwan achieve : to understand the process of social development of the soccer participant in Taiwan : to evaluate the effect of social development of the soccer participant in Taiwan. This research applies two methods to analyze the result of what Taiwan people gain the social development through soccer activity, and the methods are documentary analyzing and in-depth interviews. Besides, this research interview five people participating in soccer at least one year, they are two teachers and three students. After documentary analyzing and in-depth interviews, this research concludes the results as follow:

1. The sex of five persons is all male. Their ages are from nineteen years old to forty-one years old, and they live in Hualien , Chia-Yi, Taipei, and Taoyuan, and the time they participate in soccer is form two years to ten years.
2. After participating in soccer, teachers consider team work and identification are very important.
3. When students experience the process of game and team conference, they become to make a statement firmly and try hard to achieve target.
4. All students consider playing soccer is easy to make friends.
5. Two of students want to read a lot of sport science in order to understand how to promote the skill of playing soccer.
6. All of them gain values from participating in soccer communication. The values are communication is good to promote friendship : to make allowance for others individual difference, and it is good to trust others.
7. After participating in soccer, all of their actions become serious and active for every duty.

8. All of interview samples gain social developments by interacting with friends and teammates continuously.
9. All of interview samples think if no one interacts with them, they won't get values and cognition. Besides they will not play any more without getting these experiences.

According to the results, this research makes conclusions that Taiwan soccer participant gain social developments by interacting with social groups, and the process of skeleton graph as follow:



To conclude from the graph above , Taiwan soccer participant constantly get social developments during the process and are effected by interacting with others. So their behavior and participating in soccer continuously is formed by others. Others come into being social groups. Social groups are divided into many small agents. For this reason, it can do research on the relation of social agents with the process of social developments by participating in sports in the future.

**A study in role conflict of semi-professional student players
Students in Super Basketball League and NTNU basketball team as a example**

Cheng-Hsiu, Tsai

ABSTRACT

Under the operation between Chinese Taipei Basketball Association, seven clubs, and media, Super Basketball League has been proceeding to the fourth season. As a semi-professional league, it occupies with commercial advertising through TV broadcasts. This research concentrates on the situation that most domestic basketball players have to take both students basketball players and semi-professional basketball players while they are studying. Most related literatures in the past focused on the psychological problems when they go for both students and athletes, but they did not concern about the role conflict that student players meet when they play in different teams. The purpose of this study is to understand: (1) Student players' role conflict among students and athletes. (2) Student players' role-conflict among college team and semi-professional team. In-depth research and discourse analysis are adopted for this research in view of the relevant theories. The findings can be concluded as follows :

1. It must cause problem at studying, especially when they have games with college team and semi-professional teams simultaneously. In this situation, student players should not only study harder in their spare time, but they also rely on the helps from professors and schools, even the tolerance of business. In order to balance student players studying and working, it is necessarily to come up with an agreement with students, schools, and businesses.
2. As basketball stars, the student players have been used to being reported and the situation that the other students may bother student players' studying does not work frequently. They will not get into troubles in class. For the teachers, basically if students can coordinate well with the teachers well, the teachers are able to allow them to have extra tolerances.
3. During the SBL season. They have to practice for the clubs for 4 to 5 days a week, and play 2 to 3 games a week. They have to practice for the college team for 1 to 2 days as well. The schedule is arranged by Chinese Taipei University Sports

Federation, it isn't continuous every week or month. Practice in semi-professional team is more intensive and the college team focuses on developing team chemistry. If game or practice have conflict, it depends on coach's deploy and player's self-adjust. NTNU basketball team is in the top 3 since 2002, so when they meet the team that just advanced to the first group, the star players are able to take a rest. Meanwhile, student players always sign contracts with their semi-professional teams, this make it more difficult to communicate with the clubs.

4. The value of SBL : Student players sign contracts with their clubs which give them salaries and bonus. SBL is the top level basketball league in Taiwan. Players will be motivated to play hard to increase their earnings.
5. The value of UBL : The reason that student players can attend to the universities is their basketball skills. That is, they have duty to represent their schools to compete with others. If they get good grades in UBA, it is also a great benefit to advance to graduate school.
6. In the view of schools, they must not like the student players to participate in the semi-professional teams, especially when it disturbs their studying and college's schedules. For the student players who just graduate from high school, it is not good for them to sign contacts with professional clubs too early. The halo brings corruption. However, coaches always use junior or senior students instead of freshmen in the college games, it limits the development of young players.

This research is limited to the student players who take part in both in the NTNU basketball team and SBL basketball team. Future research could expand the range to every student players in semi-professional teams. Or classify the student players, like star players, bench players et al., and make a long time observation

Keyword : Student player. Role conflict. Semi-professional league.

**Study on Current Status of the Retired Professional Baseball Players in Taiwan
-- With a Focus on the Trace Investigation of Retired Players**
台湾プロ野球選手の引退後の現状についての研究－引退した選手の追跡調査
を中心として

Wen-Tseng Chu 朱文增
Graduate Institute of Sports and Leisure Management,
National Taiwan Normal University, Taiwan
台灣師範大学, スポーツとレジャー経営研究科

1. Introduction

Professional baseball in Taiwan started since 1990. Two leagues merged from 2003 to hope to begin a new epoch. Most of the researches of Taiwan professional baseball focused on the effect of sponsorship, the service quality of teams or the league, spectators' consumer behavior, loyalty to teams, lifestyles, or their satisfaction. Very few have been found to concern on the players.

There are four customers in the professional baseball industry. The first one is the fan, the second is the media, the third is the business enterprise, and the fourth is business enterprise. However, the players are the makers of the products (games) of the professional baseball industry. They are also the main role, but most of the past researches neglecting them. We must understand that if the attractiveness of the players' job decreases, the level of the professional baseball would go down in the future without doubt. The industry would then fall into a terrible spiral.

In this paper, we collected the data of all retired players, and a questionnaire was made. Our results can give the league a comprehension of the labor relationship between teams and players. Since the Taiwan professional baseball has not free agency system (FA) yet, the results can also give it a helpful reference to construct FA.

2. Methodology

We investigated the data of all retired players including 276 players (182 fielders, and 94 pitchers) up to the 2005 season. The variables consisted of the entrance year, the retired year, the entrance age, the retired age, the played length of time, the cumulative salary, and their performance of professional baseball. As the part of the questionnaire, 96 valid copies were collected. The questions mainly regarded their current working status, income comparison between playing career and retirement, ways of financial planning, and degrees concerning about the development of professional baseball.

3. Analysis of the data of all retired players

The main results are as the following:

- (1) The average entrance age was 26.97, retired age was 30.62, played length of time was 4.62 years, and cumulative salary was about 8.5 million Taiwan dollars.
- (2) The played length of time and cumulative salary of fielders were a little larger than those of pitchers, although the difference was small.
- (3) The performance revealed a negative relation between the performance and played length of time. Of course, a positive relation between the performance and cumulative salary was recognized.

4. Current status of retired professional baseball players

The main results were shown as the following:

- (1) Among all the surveying samples, most of them become academic coaches while the second most group belongs to the Maintenance Bureau of Taipei City Government.
- (2) Most of the surveying samples are holding his first or second positions after retiring from playing career, while most of them have been on the current position for one to three years. They were mostly introduced to the current position by themselves, and more than seventy (70) percent of the surveying samples found their former professional baseball players status helpful for finding their current jobs.
- (3) Retired professional baseball players are satisfied with their income during their playing career. The survey found eighty-two (82) percent of them are receiving less wages than before, and seventy-four (74) percent of them found their savings accumulated during playing career are not enough for their retirement lives.
- (4) Most of the retired players did have other financial plans other than deposit in banks and postal savings. The survey found only few would invest with stocks, mutual funds, collective investment and insurance.
- (5) Eight-six (86) percent of the surveying sample expressed that they would still go watching the baseball games, but tend to leave the free choice for their children whether to play baseball or not in the future.

5. Conclusion.

This research mainly investigated and discussed the data of all retired players and their current status. Our results will help the league reexamine the rules and systems with a solid reference.

The comparison of the developments of therapeutic riding between Taiwan and Canada.—The cases of Northern Taiwan and Western Canada

Tzeng Chien-Chun National Taiwan Normal University

The purpose of this research is to compare the developments of therapeutic riding between Taiwan and Canada. Recently, the benefits of therapeutic riding have widely been recognized, such as physical, psychological and social benefits to people with special needs.

However, as an activity which needs lots people to engage in and costs so many resources, the promotion of therapeutic riding is very difficult at the beginning. Canada has embraced its successful development while Taiwan is going through its hard time. Therefore, comparing these two countries can not only help Taiwan learn more from Canada, but also give some reminds to the other countries which would like to start their programs in the future.

The research has found that there are many similarities between Taiwan and Canada. First, both of them have undergone approximately 10 years to ripen their programs. Second, foundations have played an important role to glean all kinds of resources, especially the financial income. Finally, the experiences from the U.S.A. are the major sources to both countries. On the other hand, the patterns of the organizations in both countries are totally different. In Canada, there is one integrated organization named Canadian Therapeutic Riding Association to be responsible of the training and license.

In Taiwan, there are no such organizations, only two NPOs are doing their own businesses. With the short of horses and people who know how to interact with horses, Taiwan has seen a much more arduous task to run its therapeutic riding than Canada. The price to get a horse is still very high in Taiwan while horses are usually donated in Canada, which is the basic difference between two countries. The fewer choices about horses the NPOs in Taiwan have, the more time they must spend to train the horses. The fact has again raised the cost to run therapeutic riding in Taiwan. Moreover, the lack of space for therapeutic riding in such a small island is another obstacle while the weather interference featuring rainy winters and hot summers also distracts the development of therapeutic riding in Taiwan.

To sum up, this research has three suggestions to the authorities concerned in Taiwan. First, integrating two NPOs can help avoid waste of resources. Second, volunteers are very necessary in the human resources. Third, building the indoor spaces is very important to overcome the bad weather conditions. Finally, inviting foreign specialists to share their experiences and translating more literatures should be a positive for Taiwan to improve its therapeutic riding.

The Research on Super Basketball League Players' Values of Games

Jun-hao Hu

ABSTRACT

Basketball in Taiwan is a sport that people usually participate in. There are plenty of people watch basketball games except baseball games, hence there are lots of people in degree take part in playing basketball and watching basketball games. Because of this, there are different games held to attract more people to watch. International games include William Jones Cup, Fiba-Asia Stankovic Cup and Asia Professional Basketball game. Internal games include amateur games, Chinese Basketball Association(CBA) which started from 1993 to 2000, and Super Basketball League(SBL) now. The basketball fans can go to the game and enjoy it, and the basketball players' skill, awareness and movement let people dream of becoming great basketball players. It can be proved that Highschool Basketball League(HBL) and University Basketball Association(UBA) are held and get more spectators to watch.

There had been a TV program shown that SBL players' attitude toward games and game involvement, comparing to they had in HBL and UBA, are changed. This research is based on the SBL players' values of games, and explores their game involvement and purpose of games.

This research investigates SBL players' values of games, what the games form basketball players' values of games, and other factors which affect basketball players' values of games to form. This research interviews basketball players who are both in Dacin basketball team and National Taiwan Normal University basketball team. This research uses Elizur(1984) and Jurgensen's (1978) views to design interview's questions. Generalizing the players' answers, and getting some findings :

1. The team's history, accomplishment and fans' support affect basketball players' game involvement. The school's regulations, support and school positioning change basketball players' purpose of games.
2. The family's support and attitude toward their children's participation of basketball games affect basketball players' game involvement and purpose. The teammates' interaction, skill and behavior affect basketball players' values of games and role positioning in their teams. The coach's qualification, specialty and interaction with players change basketball players' thought on the games.
3. Different stage of games give basketball players sense of security, including entering a school and getting a job, and these affect their attitude toward game. The benefit,

including sponsorship, salary and chance to be a spokesperson, also affect basketball players' values of games.

4. The role and positioning in the team affect basketball players' self-identification and sense of responsibility of games. The achievement, including victory, celebrity and being picked into Chinese-Taipei team, changes basketball players' values by themselves.

This research uses in-depth interview to find the similarities and differences between each basketball player's values of games, and suggests the host of the game review the game system in different way. Basketball players can develop their talent because of appropriate game system. The future studies can investigate basketball players' values of games by basketball players' growing environment, social value, ideology or other factors.

Key words: Super Basketball League: values of games

The Content Analysis of Gender of News Reporters in Sports Coverage –

An Example of 2006 DOHA Asia Games

Chen-Wei Lo

National Taiwan Normal University

Abstract

Background : The 15th Asia Games DOHA 2006 finished perfectly on December 15th, 2006 in Doha, Qatar and finally the Chinese Taipei Team got 9 golden medals, 10 silver medals, and 27 bronze medals in total. In Taiwan, several newspaper offices also set specific make-ups for the 15th Asia Games DOHA 2006 to attract readers' interests and boost the rates of reading and purchase. In fact, some scholars mentioned that the functions of mass media were to report, to entertain, to educate, and to provide consensuses. Therefore, it's extended and vast effect that the mass media affects the readers' cognition and behavior-developing. In the past, female was always regarded as a minor or inappropriate role in the sports world. Regarding the importance of the mass media and the phenomenon of sports coverage in Taiwan, the development of male and female sports may be affected by coverage of mass media.

Purpose: The purpose aimed at understanding the background and characteristics of the gender of news reporters in sports coverage in Taiwan, during the 15th Asia Games DOHA 2006, and providing something meaningful for related workers of the mass media.

Method: The subjects of this study that used content analysis method was sports coverage in Taiwan, during 15th Asia Games DOHA 2006, which included 441 content analysis unit totally from United Daily News and Apple Daily News. Data was analyzed by the method of descriptive and chi-square statistics.

Results: The major findings in this study were described as follows--

1. There were 441 content analysis unit in total which included 387 pieces written by male reporters (87.76%) and 54 pieces written by female reporters (12.24%).

Moreover, in male reporters' all sports coverage, 59.95% provided male coverage and 29.97% female coverage; in female reporters' all sports coverage, 55.56% provided male coverage and 25.93% female coverage.

2. There were no significant differences in male and female reporters to report male coverage, but there were significant differences in male and female reporters to report female coverage.

Conclusion: Based on the research results, reporters in Taiwan still gave more attention on male sports coverage, but looked into the deeper phase, there were significant differences in male and female reporters to report female coverage if we use chi-square to check this phenomenon. The results indicated that the content of female coverage which reporters gave depended on gender of reporters. In addition, the suggestions based on the conclusion will be offered to the media workers and for the further study.

Keywords: sports coverage, content analysis, gender, Asia games

A Study on Media Relations Strategy of the Sport Brand-take adidas originals in Taiwan for example

NTNU Chia-Pei Huang

The sports and leisure atmosphere prevails day by day in Taiwan, the sports and leisure industry operators hope to propagate media's channel and transmit the various kinds of advertising information. They hope to affect the satisfaction of consumers and produce the behavior of buying for the management style by public relations of marketing.

This research will define the public relations of the sporty brand including planning, carrying out and assessing the enterprise planning step inclusive, hope to encourage buying and improving consumers' satisfaction, by holding activities to have public relations of the marketing function, via the spread channel which the masses trust, transmit meeting consumer's needs, expectation, cares about and interests information and impression. And the channel of propagating the media includes: Ways , such as TV , broadcast , newspaper , magazine , network , POP (point of purchase) ,etc., is transmission carrying on information most effective but which medias are chosen? There is positive analysis of strategies that benefited to the industry's own brand image of the sports and it will be a focal point of this research.

This research takes 'adidas Originals in Taiwan' series of products for example. Using the interview and adding researcher's observation of the media to probe into why it will be serial brand tactics carried out between public relations and media. As to adidas, three leaves of Originals mark on behalf of the value of the brand and the important symbol of the index prevails. Especially the fashion that the proper fashion world global has blown a burst of classics and restored ancient ways during these years, a lot of consumers have already been regarded as adidas Originals one of the matching goods that the fashion world like using most. Adidas Originals uses different media to transmit the following information :

1. Fixed the brand becomes the fashion position : As to adidas , abundant resource of science and technology for sport and goods have been already unable to meet all kinds of consumer's different demand, for walk in fashion peak, have deep love for consumer , adidas of brand, how is it have sense of designing and have brand spiritual goods of intension to become heavy challenge even more to offer. So adidas utilizes the media to have a get-together to enable media to understand that adidas makes a position for the fashion of Originals goods again, utilize various types of party,

fashion shows, consumer's thorough fare activity, totally subvert consumers to addias pure brand impression taking movement as direction.

2. Plant brand-new brand spirit deeply : 'Once Innovative, Now Classic , Always Authentic ' that adidas Originals set out in a totally new way goods spirit, is it walk in prevailing most advanced consumer to demand. Their common characteristic stresses the personal style, brag about individualism, there are one's own life styles, and one's own group , is like designer , modeling teacher , or to absorbing the fashion trend earlier by one step than others, suitable self-confidence accept new idea and trend, such as the personage of the advertisement , trade of public relations. These influence molecule of the social fashionable fashion, are all adidas Originals targets aimed at.

3. Transmit the style of the goods : In the part of the goods, all serial goods, include the clothes , shoes and fittings, adopting the tactics with a limit on quantity, the thorough fare is by establishing the fine works shop or clicking and combining with the shop of thorough fare of the fashion; The first flagship shop in the whole world is in Berlin of Germany, no matter the decoration in the shop, or the display of the goods, adopt the extremely simple style , demonstrate quite low-key and brief back modern feeling, let the goods of adidas Originals fully demonstrate the unique fashion style. Asian first flagship shop causes numerous Fans of adidas to line up all night one day before Tokyo of Japan opens, a opening of goods with a limit on quantity is sold out, causes quite warm discussion of fashion world and echoes.

Adidas Originals goods introduced the market of Taiwan in March of 2002 and set up the flagship shop in the east district of Taipei on November 2 , 2006 。Emerge and enable consumers to find the same goods as the magazine on the thorough fare through the goods of the magazine. The marketing enterprise planning manager of adidas says: 'adidas Originals', not only introduce the fashionable serial products of adidas to consumers, sampling adidas peculiar unique life and attitude, share with consumers. Because adidas brand represented is except that it is popular index of the movement circle spiritual, it is the appearing of a kind of humane spirit in Europe even more.

Use through the pluralism of the media and combine the key information of transmitting the brand to consumers in the thorough fare : 1. Fixed the brand becomes the fashion position 2. Plants brand-new brand spirit deeply 3. Transmit the style of the goods .Consumers hoping to let all walk in popular front, can experience in person adidas Originals is strong energy and top fashion culture released.

大衆文化としてのプロレスはいつ終焉したのか。

When Did the Professional Wrestling as Mass Culture end ?

岡村正史(岡田 正)(大阪大学大学院人間科学研究科博士課程後期課程)
Masashi Okamura(Doctor's Course, Graduate School at Osaka University)

1. ロラン・バトルの翻訳をめぐって

フランスの思想家、ロラン・バトルはプロレスファンであった。三人称で書かれた自分に関する書、『彼自身によるロラン・バトル』にはこう書かれている。「彼は驚きながら、大好物として、このスポーツ風の人工物を眺めていた」。彼が「スポーツ」としてのプロレスの愛好家ではなかったことが伺える。彼が好むのはプロレスの人文性である。あるバトル研究者は次のように記している。「レスリングがバトルを惹きつける理由はいろいろある。それは、まず、ブルジョワ階級の娯楽というよりも、むしろ大衆の娯楽である。それは物語的展開よりも場面を好み、意味作用に富む劇的な身振りを次々にくりだす。」バトルの“*Mythologies*”(1957)の冒頭に置かれたエッセー‘*Le monde ou l'on catche*’は、この書がブルジョワ・イデオロギー批判、大衆文化の言葉づかいに見られる「自然しさ」を押し付けてくるものに対する批判に終始しているにもかかわらず、プロレスへの賛美に終始している。ここでは、バトルのプロレス論には深入りしない。

一般に、欧米では知識人はプロスポーツを労働者階級の娯楽とみなして無視する傾向があると言われている。ましてや、20世紀を代表する知性のひとりがプロレスというプロスポーツにとっても周縁的な存在を愛好していた事実は知識層には戸惑いを与えるを得ない。日本においても事情は変わらない。*“Mythologies”*の翻訳は最初、篠澤秀夫が『神話作用』として1967年に沙汰が出され、次いで下澤和義が2005年に『現代社会の神話』という題名で完訳を上梓した。注目すべきは、前者が‘*Le monde ou l'on catche*’を「レッスルする世界」としたのに対し、後者は「プロレスする世界」とした点である。catch はフランス語で「プロレス」を意味する。その点で、下澤訳のほうが原書に忠実である。篠澤は catch をすべて「レスリング」と訳している。これだけであれば、篠澤が知識人としてのメンタリティからなのか「プロレス」という言葉を出すのに抵抗があつただけだと推測できる。ところが、奇妙なことに、一箇所だけ「プロレス」という言葉が出てくる。原文と訳文を記す。《*Bien sur, il existe un faux catch qui se joue a grands frais avec les apparences inutiles d'un sport regulier ; cela n'a aucun interet.*》「もちろん、苦労して正規のスポーツの見せかけで行われる偽のプロレスが存在する。それには何の意味もない」(下総部岡村)。「偽のプロレス」とは何を意味するのか。エッセー全体から推測するに、一つの興行の中で五試合に一つ行われるスポーツライクな試合(反則攻撃が出ないクリーンな試合のこと)と考えられる。バトルは1952年頃にパリのエリゼ・モンマルトルという小屋で見たプロレス興行をモチーフにプロレス論を展開しているが、私がちょうど30年後の1982年に同じ場所で見物した印象からもたしかに五つに一つはスポーツライクな試合であった。篠澤がそこまでプロレスを理解していたとは考えにくい。篠澤はこの catch だけを「プロレス」と訳したのは、faux、つまり「偽の」に引き付けられたからなのではないか。「プロレス」と「ニセモノ」がイメージとして強く結びついていたからなのではないか。

篠澤(1933年生まれ)が翻訳に取り組んでいた1967年は力道山死後4年が経過しながらも、プロレスの大衆的人気はまだ高かった時代である。が、知識人がプロレスのようなものを愛好しているとは表明しにくい時代でもあった。これに対し、1960年生まれの下澤が2005年に catch をすべて「プロレス」と訳することに躊躇はないだろう。現在ではプロレスの人気凋落は決定的であるが、知識人が愛好ぶりを告白することはさほど珍しくないからである。

プロレスに関する大衆的人気はいつ終わったのだろうか。また、知識人の評価にどのような変遷があったのだろうか。ここでは、日本のプロレスの草創期から今日までのプロレス言説を振り返ることで今まで若干の考察を加えてみたい。

2. プロレスの大衆的人気の推移

(1) 各種調査結果より

① スポーツとして

ここでは1956年の読売新聞「全国世論調査」と2003年の朝日新聞「スポーツに関する世論調査」を対比する。

② テレビ番組として

ここではNHK「テレビ番組意向調査」(1955年)、同調査(1969年)、NHK視聴率調査、ビデオ・リサーチ「年間視聴率ベスト20」および、私が2002年と2003年に阪神シニアカレッジ受講生を対象に実施したアンケート調査をもとに60年代末までのプロレスの大衆的人気を実証したい。

(2) 街頭テレビの人気番組(1954~1957)

この時期には、プロレスがブーム的様相を呈し、一般紙の運動面で取り上げられたこと、また、子供の間にプロレス遊びが流行し、死亡事故が発生するもプロレス禁止論には発展しなかったことなどを取り上げる。

(3) ミッヂーブーム以降(1958~1969)

1958年8月よりプロレスはテレビのレギュラー番組となり、「金曜8時」は代名詞となるが、「テレビ・プロレス」として過剰な演出が常態化していく。テレビ視聴率は好調で、力道山の最晩年の63年にピークを迎える。力道山死後も60年代を通して人気番組の地位を維持した。

(4) 大衆文化としての最末期~70年代

団体の分裂を経験したプロレスの人気は下降するが、76年の猪木対アリの「異種格闘技戦」のように大衆にアピールする余力はまだあったといえる。この試合に関する三大紙の言説にも言及する。

(5) サブカルチャー化の80年代

80年代からプロレスに関する言説について従前とは異なる傾向が登場してくる。とりわけ、村松友視と古館伊知郎のそれは注目すべきである。

① 村松友視…「プロレス批評」の誕生

「プロレスのファン」とくにマニアたちは、試合の勝敗にあまりこだわらない。それよりも、リング上のやりとりを鑑賞することに、情熱をかたむける傾向がある。…さらには、リングの背後にいるボリティックスを、永田町の裏読みよろしく見ぬこうとするマニアもいる。その意味では、説解をしたのしむジャンルだといえる。…この傾向を、ファンのあいだにひろめたのは、村松友視の、『私、プロレスの味方です』をはじめとするいわゆるプロレス三部作からである。…敗戦後の力道山時代には、今より素朴にプロレスがたのめめたのだろう。…だが、プロレス人気がしだいに低下してきたところで、批評の言説が増殖した。ジャンルとしての総体的な衰退が言説を肥大化させるという、その典型例がプロレスにうかがえる。」(『民間学事典』「プロレス批評」の項目より)

② 古館伊知郎の実況(78~87、テレビ朝日)

ある意味で、プロレスそのもの以上に注目を浴びたプロレスについての語りを取り上げる。

(6) オタク文化として(1988~)

1988年にテレビのゴールデンタイムから転落したプロレスはライブ中心の都市型興行に転ずる。バブル期に社会現象となった前田日明中心のUWFは無意識のアメリカニズムが浸透した日本独自のプロレススタイルを追求したが短命に終わった。しかし、新しい観客層の登場などをもたらし、今日のプロレスの先駆的存在といえる。

主要参考文献

Barthes,R.,*Mythologies*,Seuil,1957(篠澤秀夫訳『神話作用』、現代思潮社、1967年)

下澤和義訳『現代社会の神話』みすず書房、2005年)

ロラン・バトル,佐藤信夫訳『彼自身によるロラン・バトル』みすず書房、1979年

ビデオ・リサーチ編『視聴率の正体』廣松書店、1983年

ショナサン・カラー,富山太佳夫訳『ロラン・バトル』、青弓社、1991年

村松友視『私、プロレスの味方です』情報センター出版局、1980年

日本放送協会編『放送50年史』日本放送協会、1977年

NHK放送世論調査所編『テレビ視聴の30年』日本放送出版協会、1983年

日本テレビ放送網編『大衆とともに25年』日本テレビ放送網、1978年

大塚英志『「おたく」の精神史』講談社、2004年

岡村正史、「カンカン小屋のキャッチ」、『別冊宝島120 プロレスに捧げるバラード』JICC、1990年

「catch はすべて「プロレス」と訳せ」、『宝島30』3月号、宝島社、1994年

「「実況」という名のプロレスー古館伊知郎考」(青弓社編集部編、『こんなスポーツ中継は、いらない!』、2000年)

岡村正史編著『力道山と日本人』青弓社、2002年

吉見俊哉『メディア文化論』有斐閣、2004年

言語学からみたスポーツ実況中継

清水 泰生
 ((社) 日本マスターズ陸上競技連合)

1.はじめに

スポーツ実況中継に関する分析は、スポーツ社会学、メディア研究、カルチャーラ・スタディーズなどの分野で行われているが、言語学からの分析は、三宅和子氏の論文(*1)と清水泰生の論文(*2)ぐらいのように思われる。本発表で、言語学からスポーツ実況中継の研究をする価値、意義について述べ、スポーツ社会学等への応用を提言したい。特にスポーツ実況中継で、スポーツ社会学であまり問題になっていない点、音声についてスポーツを当てスポーツ実況中継の考察に役に立つことを主張する。

2.音声学がスポーツ実況中継に役に立つと思われるところ

スポーツ実況中継で音声の面で貢献できそうなのは、音響分析、イントネーション、プロミネンス、休止、りきみ、すすり、リズムである。それらについて具体例を交えながら紹介したい。

(具体例)

2-1 「絶叫調」とは何か

スポーツ実況中継でよく絶叫調とか言われて、ひとくくりにすべて絶叫調であると言っているが、果たしてそれでいいのであろうか。原田選手のジャンプの実況中継と前畠頑張れの実況中継を音声から見てみたい。

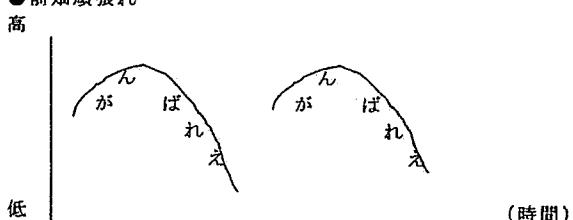
「原田選手のジャンプ」の実況中継と「前畠頑張れ」の実況中継のイントネーション、プロミネンスについては清水他(2006)で紹介した。それは次の通りである。

● 原田選手のジャンプ

高いぞ 立て 立て 立ってくれ

「高いぞ」が、じりじり上昇であり、「立て立て 立ってくれ」はわずかに上昇する「高い平坦」であると言える。一方、「前畠頑張れ」の実況中継は、下降のイントネーションで単なる反復の多様でイントネーションの山とイントネーションの山との間に肯定がなく平らである。

● 前畠頑張れ



今回の発表では、さらに音響分析(サウンドスペクトログラム、ホルマント分析、ピッチ抽出等)を見てみた。音響分析は和泉書院の『音声研究入門』に付属している『音声録聞見(フリーソフト判)』を用いた。結果は、紙面の関係上、発表、発表の資料で述べたい

が、波形の形、周波数が異なるように思われる。絶叫もいろいろなものがあると思われる。

2-2 競馬と陸上競技中距離の実況中継の違い

競馬と陸上競技中距離の実況のパターンが似ているようだが、そうであろうか。競馬「2006年阪神11R 鳴門ステークス」と世界陸上東京大会男子1500メートル決勝を見てみると、発話のパターンが大きく異なることが分かる。1500メートルの場合、文が完全であり、競馬の場合、馬の名前だけ、語の羅列が多く見られる。また、力み、極端なプロミネンス、イントネーションが見られず、同じテンポで発話していることが分かる。

世界陸上東京大会1500メートル決勝の一部

(400メートル通過)

- A1 : モルセリがすっと上がって2位に入りました
- A2 : ケニヤの中にはって入りました
- A3 : 割って入りました
- A4 : スペインのカチヨが後ろ
- A5 : その後ろにその向こう側にブルーのユニホームは
- A6 : イタリアのリナボリー
- A7 : そしてヨーロッパチャンピオンのビーター・ヘロルドが
- A8 : ちょうどインコース
- A9 : ぴったり ついています
- A10 : イギリスのユイツは
- A11 : ちょっと遅れました (_____やや力みが感じられる)
- A12 : あとは集団です (_____やや力みが感じられる)

競馬

阪神11R 鳴門ステークスの実況中継の一部

- A1 : ちょっとばらつきました
- A2 : アグヌスティンガーはうちから出遅れ
- A3 : 先行争いは真ん中から
- A4 : フルネルは好スタートを切りましたが
- A5 : うちから押しながら
- A6 : ワンダーヴィボ
- A7 : ワンダーヴィボに
- A8 : フルネル
- A9 : 三番手にゼンノバレティノン
- A10 : うちからはワインセーバー

3.まとめ

以上を見てみると言語学、音声学の視点を取り入れるとデーターの信頼性が増し、社会学的アプローチにも信頼性が増すのではないかと思う。言語学の手法、特に音声学の手法を実況中継、スポーツ社会学に応用する価値があると言える。

注1. 三宅和子の論文には、三宅和子(2004)「スポーツ実況中継のフレーム放送に向けられた聴覚者の不快感を手がかりに」『メディアとことば1』ひつじ書房などがある。2. 清水泰生(論者)の論文には、清水泰生他「スポーツとことば-「古館伊知郎」とスポーツ実況-」『スポーツ社会学研究』13などがある。

参考文献

清水泰生他(2006)「スポーツとことば-「古館伊知郎」とスポーツ実況-」『スポーツ社会学研究』13

スポーツ_くボランティアはボランティアか
——ボランティア論からのアプローチと定義の再考——

Is a Sport "Volunteer" a Volunteer?

—— the approach from volunteer theory and reconsideration of definition ——

駒澤大学大学院 博士課程 森 政晴

MORI, Masaharu (Doctor's Course, Graduate School at Komazawa University)

キーワード：ボランティア、スポーツボランティア、スポーツイベント、
イベントボランティア

1 はじめに

スポーツボランティアはスポーツ社会学や体育学領域からの議論はよくあるが、ボランティア領域からの議論があまりされてこなかったように思われる。実際にスポーツボランティア関係の文献・論文を探しても、それはスポーツや体育経営研究者によるものがほとんどであり、一方でボランティア領域の研究者が書かれた物は、あまり見つけることはできなかった。これはボランティア研究者から見て、スポーツボランティアが特殊な存在だからだと推測できる。しかしどうしてもボランティアがボランティアではないと結論づけるのではなく、ボランティアの研究者から興味を示されていないのはなぜかと考えてみたい。スポーツとボランティア、両側面からの検証が必要だと思うからである。

本研究はスポーツボランティアの中心的存在である、日常的に活動をしているクラブ・団体ボランティアと、イベントを中心に活動しているイベントボランティアを取り上げて、彼らが果たしてボランティア論で言われるボランティアなのかをそれぞれ比較し、再検証する。

2 ボランティアの語源

1. voluntas から → 自由意志、自主性

これにはイギリスの自警団やフランスの義勇兵達の意味もある。

2. will + er → 自発性

ボランティア研究者は主に2の方を主張している。

3. volo から voluntas+er 「意志する=自主性」

いずれにせよ、ボランティアの生命線と言えるものは〈自発〉や〈自主的行為〉になる。

3 スポーツボランティアとは（先行研究）

旧文部省が行った研究・調査ではスポーツボランティアは次のように定義されている。
地域におけるスポーツクラブやスポーツ団体において、報酬を目的としないで、クラブ・団体の運営や指導活動を日常的に支えたり、また国際競技大会や地域スポーツ大会などにおいて、専門能力や時間などを進んで提供し、大会の運営を支える人のこと
日本スポーツボランティア学会では改訂案として2つ提示している。

案1 「スポーツ」という文化の質の維持・向上のために金銭的報酬を期待しないで、
自分から進んでスポーツの指導やスポーツ活動の運営を手伝う人のこと

案2 「スポーツ」という文化の発展のために金銭的・物的報酬を目的としないで、
スポーツ指導やスポーツ活動の運営において自分から進んでスポーツを行う人のこと

問題点：

- 旧文部省の定義は大まかにはスポーツボランティアを定義しているが、概念上全く異なる物を一つの定義にくるんではいることは明白で、無理があるのではないか。
- スポーツボランティア学会の定義ではイベントボランティアが含まれていないニュアンスを受ける。これはイベントボランティアがボランティアではない事になる。
- 自発的行為か？中小規模のイベントによっては無償で動員される事例もある。
- 交通費程度の実費は報酬に含まれないことが定説だが、物的報酬はどうか。イベントでの様々な待遇や、制服やピンバッジの様な記念品は報酬なのか。

4 ボランティアの分類（ボランティアの研究領域から）

ボランティアの分類として福祉、医療・保険、青少年活動・教育、文化の伝承・発信、

環境保護・エコロジー、在日外国人への援助、国際協力、平和・人権、まちづくり、その他の9つに分けられているが（下線発表者）、スポーツは存在しない。スポーツボランティアは今までのカテゴリーに含まれない新規のものか、あるいは無視されているのか。

文部省の行ったスポーツボランティアの分類をこれらのフィルターにかけると、青少年活動、教育分野、文化の伝承・発信と言い換えられるが、イベントボランティアの分類は困難である。同じスポーツボランティアでも、クラブ・団体ボランティアか、イベントボランティアかで、その性格が異なる。さらにイベントボランティアの立場は任務によってボランティアの種別が異なり、非常に不安定な立場なのである。

5 経験能力でのイベントボランティア分類

どんな領域でも、過去のボランティア経験があれば活動にいかせる、と仮定すると経験と能力には整合性が生じてくる。またスポット参加のイベントボランティアでも、競技会の回数が回を重ねるに連れて参加していれば、連続活動のイベントボランティアとして考えられる。またボランティアを主体にしてイベント運営を計り組織化する事で、スタッフではあるがボランティア、という状況もある。スポーツボランティアも多様化の現象が起きていると言えよう。

6 イベント組織にとってのボランティアの検証（マネジメントとしての視点から）

イベントで現実的に誰が力を持っているかというと、組織委員会や運営本部である。この団体の形態は財団法人、社団法人、NPOと様々である。スポーツイベントでのボランティアは各団体が独自に募集するため、募集の形態、待遇・処遇、研修・教育、内容はイベントの度、異なる。またイベントを行なうからと言って、必ずしもボランティアを募集するのも限らない。彼らのボランティアの利用方法として：

- ボランティアなので給料を支払う必要がない。→経済的経費削減の道具
- 「ボランティア」の名前を利用して社会的貢献を果たしている様にアピールできる。
- 参加した人びとに利他的満足を与えられる。
- 組織化していないので、ボランティアを支配でき、従順であり、文句も言われにくい。（これは現代の「組合無き労働者支配」の構造と類似しているのでは？）

イベントボランティアの不安定要因として挙げられるのが、非組織的で自発的行為だが自主的でないことがある。よって組織の言いなりになりがちである。組織化するには事前準備の時間が必要になり、ほとんどのスポーツイベントは2週間以内で終わってしまうため、場当たり的になる。しかも大きな予算が使えるのはオリンピックとワールドカップぐらいのが現実である。

7 定義の再考：まとめに代えて

発表者による新たな定義：

自分の意志で、報酬やリターンを目的とせず、自分の経験・能力を活用して、文化と
してのスポーツ振興活動に貢献する人のこと

この定義を元にスポーツボランティアを再検証すると、団体・クラブボランティアはボランティアと言える。しかしイベントボランティアは自分のための文化的行為とも解釈できるが、一部はボランティアと言えない場合もあり、不安定だと見える。不安定状況を取り除くためには、自主的参加でかつ、組織化されている事が必須である。また金銭の授受や「報酬」だけの視点からだけでは、ボランティアかどうかを分別するには不十分だと考える。イベントボランティアが組織やスポーツ産業の道具となっている限りは、スポーツボランティアはボランティア領域からなかなか認められないだろう。

＜参考文献＞

- 内海成治・入江幸男・水野義之, 1999, 『ボランティア学を学ぶ人のために』, 世界思想社.
- 杉本敏夫・齊藤千鶴, 2000, 『コミュニケーションワーク入門』, 中央法規出版.
- 早瀬昇・牧口明, 2004, 『知っていますか？ボランティア・NPOと人権』, 解放出版社.
- 山口泰雄編, 2004, 『スポーツボランティアへの招待』, 世界思想社.
- 文部省・スポーツにおけるボランティア活動の実態等に関する調査研究協力者会議, 2000, 『スポーツにおけるボランティア活動の実態等に関する調査研究報告書』.

生活構造から捉える障害者とスポーツ
Disabled persons and sports focusing on the life structure
後藤貴浩(熊本大学)
Takahiro GOTO (Kumamoto University)

1. はじめに

これまでの障害者スポーツに関する研究(芝田, 1986, 藤田, 1998, 藤原, 1998など)では、障害者スポーツの大衆化(普及)や高度化に関する研究がほとんどであった(種目・用具の開発、身体的・精神的・社会的効果、指導者・ボランティア・施設等の環境整備、大会・イベントのあり方、競技力向上)。また最近では、障害者スポーツの社会的意味(障害カテゴリーの問題、実践の意味解釈)に関する研究も行われるようになつた(佐藤, 1999, 阿部ら, 2001, 後藤, 2002, 渡, 2005)。

これらの研究の多くは、障害者にとってスポーツが必要であること、スポーツをすることにおいては健常者も障害者も同じであること(あるべきこと)などを前提に、あるいは、そのこと自体を問い合わせることを目的に研究が進められている。

ところが、いずれの場合も、実際に障害者の生活はどうになっているのかということはあまり問われてこなかった。もちろん、それが社会福祉学(社会学)の専門的な領域であったことは言うまでもない。しかし、結果的に体育・スポーツの領域では、彼／彼女らの暮らしの部分が大きく欠落したまま、スポーツとの関係が議論されてきたといえる。

そこで、本稿では障害者(障害)↔スポーツの視点を、障害(障害者)↔生活(生活者)↔スポーツ(運動者)という視点に移して障害者のスポーツを検討してみることとした。

本稿の目的は、地域で生活する障害者の生活構造を明らかにし、彼／彼女らの運動やスポーツとの関係について検討することである。

2. 方法

本稿では、まずアンケート調査により地域で生活する障害者の生活構造分析を行うこととした。そこでは、鈴木広(1986)の分析軸を参考に階属性(小遣い、学歴、職業)、流動性(免許、職業、外出)、公共性(理想の生き方、社会活動・内容、近所付き合い)、同調性(健康番組の視聴、余暇内容)を中心に検討することとした。同時に、スポーツ実施頻度、種目、相手、場所、目的、満足度について検討した。

次に、アンケート調査で明らかになった障害者の生活構造とスポーツの関係性について、より現実に即した形で理解するためにインタビュー調査を行うこととした。このような事例分析を行うことで、生成された仮説を検証すると同時に統計的に処理されたデータでは十分に読み取ることのできなかつた主体の行為力についての検討が可能であると考えた。

具体的な調査の方法はいかに示すとおりである。

	調査方法	調査対象	有効サンプル数	調査期間
アンケート調査	留置法 (一部面接式)	熊本県芦北町在住の障害者 (15歳以上の男女)670名	392(58.5%)	2006.11~12
インタビューコンタクト	半構造化 インタビュー	熊本県芦北町在住の障害者 (15歳以上の男女)20名	18名	2006.12

3. 対象地区及びサンプルの概要

芦北町は、熊本県の南部に位置し、総面積 233.71 km² の中山間地である。町の約 80%が山林で、西側には天草の島々を望む県立自然公園指定のリース式海岸、東は急流下りで有名な球磨川に隣接している。南北に九州を縦断する国道 3 号線及び JR 鹿児島本線が走り、北は八代市、南は水俣市という地方都市に挟まれている。

今回の調査では、田浦(H17 合併)、佐敷(S 30 合併)、湯浦(S 45 合併)、大野(S 30 合併)、吉尾(S 30 合併)の旧町村別に分析を行う。国道及び JR の沿線にあるのが田浦、佐敷、湯浦でそれぞれに駅舎があり、市街地を形成している。大野、吉尾はいずれも東側の山間部に位置し非常に山深い地域である。各地区の人口、世帯数、高齢化率を下表に示した。

芦北町には現在 1,991 人の障害者(身体 1,653 人、知的 187 人、精神 151 人: 手帳受給者等)が生活しており、住民の約 10%を占める。身体障害者の 44.4%、知的障害者の 57.8%が重度であり、身体障害者の 76.5%が 65 歳以上の高齢者となつていている。

今回のサンプルは芦北町の障害者の約 20%となつておらず、下表に示したように、年齢、性別、障害の種類、等級をみても結果の一般化を大きくは妨げないと思われる。

大字名	全 体	田 浦	佐 敷	湯 浦	大 野	吉 尾
人口	20,842(100.0%)	505(24.3%)	710(34.1%)	571(42.9%)	1947(9.3%)	1014(4.9%)
世帯数(平均世帯人口)	742(2.61人)	181(0.279人)	248(0.285人)	206(0.271人)	622(0.13人)	433(0.24人)
高齢化率	33.1%	33.7%	32.5%	30.7%	33.7%	45.1%
住居までの平均距離	8.9km	8.0km	3.8km	6.0km	12.4km	20.0km
サンプル数	392(100.0%)	92(23.5%)	141(36.1%)	116(29.7%)	33(8.4%)	9(2.3%)
性 別	男=216(55.2%) 女=175(44.8%)	男=56(61.5%) 女=38(38.5%)	男=75(53.9%) 女=64(46.1%)	男=54(50.9%) 女=53(49.1%)	男=20(16.6%) 女=13(33.4%)	男=5(55.6%) 女=4(44.4%)
年 齢	50歳代以下=136(34.8%) 60歳代以上=255(65.2%)	50歳代以下=45(33.4%) 60歳代以上=77(66.6%)	50歳代以下=71(50.4%) 60歳代以上=70(49.6%)	50歳代以下=42(32.8%) 60歳代以上=103(67.2%)	50歳代以下=12(12.1%) 60歳代以上=98(87.9%)	50歳代以下=25(61.9%) 60歳代以上=58(38.1%)
障害の種類	肢体不自由=170(43.4%) 言語等=23(5.9%) 心臓腎臓等=55(15.1%) 聴覚等=53(13.5%) 知的障害=78(19.6%) 精神障害=16(4.6%)	肢体不自由=37(40.2%) 言語等=9(9.8%) 心臓腎臓等=17(18.5%) 聴覚等=20(21.7%) 知的障害=8(8.7%) 精神障害=3(3.3%)	肢体不自由=51(38.2%) 言語等=9(5.7%) 心臓腎臓等=18(12.8%) 聴覚等=16(12.8%) 知的障害=5(4.0%) 精神障害=7(5.1%)	肢体不自由=64(55.2%) 言語等=21(17.0%) 心臓腎臓等=11(9.9%) 聴覚等=6(12.2%) 知的障害=11(9.5%) 精神障害=0(0.0%)	肢体不自由=71(50.4%) 言語等=12(11.1%) 心臓腎臓等=22(24.2%) 聴覚等=6(12.2%) 知的障害=20(20.0%) 精神障害=0(0.0%)	肢体不自由=14(42.4%) 言語等=3(8.5%) 心臓腎臓等=5(55.6%) 聴覚等=0(0.0%) 知的障害=0(0.0%) 精神障害=0(0.0%)
障害の発生時期	先天性=60(19.9%) 乳幼児期=20(6.9%) 学童期=24(8.1%) 学年期=15(51.6%) 分からぬ=50(16.6%)	先天性=30(34.8%) 乳幼児期=24(28.6%) 学童期=15(16.7%) 学年期=45(63.4%) 分からぬ=5(12.7%)	先天性=24(30.1%) 乳幼児期=9(6.0%) 学童期=15(20.0%) 学年期=43(38.1%) 分からぬ=23(20.4%)	先天性=34(30.8%) 乳幼児期=29(28.8%) 学童期=9(9.8%) 学年期=41(35.0%) 分からぬ=9(11.6%)	先天性=4(15.4%) 乳幼児期=0(0.0%) 学童期=0(0.0%) 学年期=0(0.0%) 分からぬ=0(0.0%)	先天性=0(0.0%) 乳幼児期=0(0.0%) 学童期=0(0.0%) 学年期=0(0.0%) 分からぬ=0(0.0%)
障害等級	1・2級=138(44.2%) 3級以下=137(43.9%) 重度=28(9.0%) 中・程度=92(30%)	1・2級=33(34.9%) 3級以下=47(51.3%) 重度=1(1.2%) 中・程度=1(1.2%)	1・2級=54(65.5%) 3級以下=38(35.0%) 重度=25(23.6%) 中・程度=8(5.7%)	1・2級=50(52.3%) 3級以下=29(31.3%) 重度=11(12.0%) 中・程度=0(0.0%)	1・2級=5(50.0%) 3級以下=2(22.2%) 重度=0(0.0%) 中・程度=2(21.4%)	1・2級=0(0.0%) 3級以下=4(50.0%) 重度=0(0.0%) 中・程度=0(0.0%)

4. 結 果

1) 田浦

在宅(多世代)高齢者世帯で後天性軽度の障害が多い。上層一下層、土着一流動の 2 極化が認められ、一部家族内サポートあり、私化・同調傾向が強い。スポーツ実践者は 26.0%(24 名)おり、内訳は、散歩 4 名、ジョギング 2 名、体操・リハ 5 名、グランドゴルフ(ゲートボール)11 名、サッカー及びソフトボールが各 1 名であった。

2) 佐敷

施設入所で知的障害(先天性)が多い。比較的下層に位置し流动的(福祉支援のもと)である。私化一公共化の 2 極化が認められ同調傾向が強い。スポーツ実践者は 41.1%(58 名)おり、内訳は、散歩 7 名、ジョギング 3 名、体操・リハ 31 名、グランドゴルフ(ゲートボール)13 名、水泳 2 名、ミニバレー及びゴルフが各 1 名であった。

3) 湯浦

施設入所で肢体不自由(後天性)が多い。比較的高齢で重度である。比較的上層に位置し土着的である。公共化の志向があり、同調一非同調に 2 極化している。スポーツ実践者は 18.1%(21 名)おり、内訳は、散歩 1 名、ジョギング 1 名、体操・リハ 2 名、グランドゴルフ(ゲートボール)10 名、ミニバレー 3 名、ゴルフ 3 名、車椅子バスケ 1 名であった。

4) 大野

在宅(夫婦世帯)で身体障害(後天性)が多い。高齢で軽度障害が多い。階層的には下層で土着性が強い。公共化及び同調の傾向がある。スポーツ実践者は 33.3%(11 名)おり、内訳は、散歩 1 名、体操・リハ 1 名、グランドゴルフ(ゲートボール)8 名、車椅子バスケ 1 名であった。

5) 吉尾

少人数の地区であり、全てが在宅である。比較的高齢で後天性の障害が多い。階層的には下層であるが、流動性がある。公共化及び同調の傾向がある。スポーツ活動については、4 名がグランドゴルフ(ゲートボール)を行っている。

紙面の都合上、スポーツ実践者の生活構造分析及びインタビュー調査結果については省略し、詳細については発表時に報告することとする。

なお、本報告は平成 17~19 年度科学研究費補助金(基盤研究 C: 課題番号 17500434)による研究成果の一部である。

海外への武道の普及に関する一考察

—1910年代のパラグアイにおける柔術の受容を中心に—

Review about the prevalence of Budo to overseas

—Centering around the reception of Jiu-Jitsu in Paraguay in the 1910's—

薮 耕太郎（立命館大学大学院）

Kotaro Yabu (Ritsumeikan University)

問題の設定

本研究は、1910年代のパラグアイを舞台に現地で柔術の普及活動を行った福岡庄太郎（1878-1978）を題材に、現地社会の様々な場における複層的な受容の様態に着目することで、通説的な武道の普及史像の再検討を試みることを目的としている。19世紀末から20世紀初頭における世紀転換期は武道の海外普及の端緒にあたり、多くの無名の武道家や武術家が世界各地で普及活動を行っているが、一部を除き彼らの動向の詳細の殆どは明らかにされていない。特に、南米地域はアメリカや西欧と並ぶ普及対象地域にも関わらず、その傾向は顕著である。そこで、従来の研究において等閑視されてきた、市井の武術家による南米での普及活動を通じて、海外における武道普及の回路の複数性を明らかにしたい。

またこの研究は、日本独自の文化としての武道、あるいはオリエンタリズムの枠組みに依拠した武道ではない、グローバルな文化の流れにおける武道の位置づけを問い合わせ契機とするための取り組みのひとつでもある。なお、武道と武術は同義ではないが、端緒期における無名の武術家による普及の行為も一種の地ならしとなって、後に活発化する武道の海外普及に際するひとつの礎を築いたと考えられることから、本研究では武道の普及ということばを用いる。

先行研究の検討

武道の海外普及を巡る従来の研究では、「エリート」による「正しい」武道理念の普及が「普及者」の視点から語られる傾向にあった。例えば井上俊は『武道の誕生』において講道館により選抜されたエリート柔道家による柔道の普及を武道の海外普及の中心軸として設定している。また、友添秀則は「失われたものを求めて一レゲットの柔道理解が意味するものー」において、エリートであるレゲットと同じくエリートである嘉納治五郎との思想的、文化的背景と時代にそぐう規範への希求が一致したからこそ、レゲットは柔道の本質を理解しそれを本国イギリスで普及した、と記している。さらに志々田文明は「「国際化」と武道の変容」において、武道の独自性を理解したうえで寛容の精神をもって文化変容に対応する必要性を説いている。確かにこうした普及の様態を認めることは可能であり、その点において普及者側から武道に込めた理念を焦点化した研究は意味を持つものであろう。

しかしながら、ノルベルト・エリアスは、近代スポーツのグローバルな受容においては多層化する社会内部で生じる支配=被支配という関係の変化や、受容対象を再解釈することによる自己の社会的習慣への編入という作業が行われ、その過程で変種が誕生することを指摘している。またジョセフ・マグワイアは、これまでローカルあるいはナショナルな次元で捉えられてきた近代スポーツという枠組みは、いまやグローバルな単位で再解釈される必要性を示唆している。換言すれば、文化の国際的な普及という双方向的かつ重層的な行為を再検討するうえでは、特定の階層における文化普及の様態を、その文化の本質を理解する普及者側の思惑によって把握するのみでは不十分である。すなわち武道の海外普及を論じる際にも、自国の普及者側からみて「正しい」武道理念を持たない非エリートによる不完全な武道（＝変種）として退けられてきた普及行為を、他国の受容者側の視点から再度捉え直す必要があろう。そこで本研究では、不完全とみなされるからこそ現地社会によって本来とは異なる意味を付与されることが可能となつた、武道の海外普及における従来的な普及回路とは異なる回路について明らかにする。

研究方法

普及側の理念やイデオロギーに拘らない史実に基づいた歴史事象を読み解くため、報告者はパラグアイ国立図書館、アスンシオン市立図書館、アスンシオン市立公文書館における史料収集と、福岡庄太郎の息子である Raimundo Takeshi Fukuoka 氏および福岡と関係のある日系人からの聞き取り調査を実施した。収集した史料は、当時アスンシオンで発行されていた新聞 9 紙のうち 8 紙（"El País", "El Diario", "Los Principios", "La Tribuna", "General Caballero", "El Liberal", "La Libertad", "El Nacional"）を中心に当時のアスンシオン社会を記した刊行物が数点である。

これらの史料の分析をもとに、福岡のもたらした柔術が現地社会のどのような背景に沿つていかなる解釈を与えられたかについて受容側の様態から明らかにしたい。特に、柔術にそれぞれ異なる意味を付与したと考えられる 3 つの場、すなわち現地新聞、スポーツクラブ ("Club Gimnasia y Esgrima" 以下 CGE)、そして 1917 年 10 月にアスンシオン国立劇場で行われたフランス人レスラー、マックス・ギャラントとの異種格闘技戦における様相を明示する。

小括

"Jiu-Jitsu" という特集記事を組んだ "La Tribuna" 紙において、柔術は身体鍛錬の道具として非常に有効であると論じられている。そこには日本への高い興味の眼差しはあるものの、たとえば東洋の神秘といった形容に代表されるようなオリエンタリズムに彩られてはいない。身体鍛錬を要請する向きは 1900 年前後より近代化が促進されつつあったパラグアイの社会状況を汲むものであり、柔術はこの国家的要請に適うものであった。

一方、当時アスンシオンに幾つかあったスポーツクラブのうち CGE は国内最大のクラブであった。西欧の先進知識を学び啓蒙主義的な意識を有する CGE の主たる担い手は、自国民を先導する役割を自認していた。この点において、西欧型の国家を目指す彼らが柔術を優秀な身体鍛錬の装置とみなし福岡を CGE に招聘したことは、新聞の主張と合致する。また、クラブの主導者や会員が一定以上の教養を持つ閉鎖的な空間であるからこそ、身体鍛錬という目的を共有可能、その役割を柔術に付与できたと考えられる。

また、福岡とギャラントの試合は、新聞全紙で試合前後を含め大々的に扱われ、会場は満席となるなど、アスンシオン市民は高い関心を示した。また通常のイベントとは異なり、異種格闘技試合は余裕さえあれば貴賤の区別無く誰でも無料で入場することができた。競技者の肉体と技量のみを用いた勝負であり、通常社会において規定され束縛される地位や権力が介在する余地がない異種格闘技戦の場においては、柔術に身体訓練の装置という役割を背負わせることはできないが、観客は福岡とギャラントを強者対弱者といった単純な 2 項対立として捉え、柔術を娯楽として消費しながら同時に幅広い層の関心を集めた。

以上のように、現地社会の様々な位相、すなわち国家、現地のエリート、そして一般大衆の要請に適合するように、受容者それぞれが柔術に意味を付与することによって柔術は受容された。それはまさに、普及者たる福岡に確固たる普及理念がなかったことに通底する。そして本事例を、グローバルな領域で異文化が交流する際における双方向的な関係性において読み解くならば、それは日本独自の文化の劣化したあるいは粗悪な模倣を示すものではなく、受容者側による日本文化の読み替えによって成立した、従来のものとは異なる普及ルートとして提示できるのではないだろうか。

引用文献

Joseph Maguire, *Global Sport: Identities, Societies, Civilizations.*, Oxford: Polity Press, 1999

ノルベルト・エリアス『文明化の過程 上・下』, 法政大学出版局, 1977

井上俊『武道の誕生』, 吉川弘文館, 2004

友添秀則『失われたものを求めて一レゲットの柔道理解が意味するものー』中村敏雄編『外

来スポーツの理解と普及』, 創文企画, 1995

志々田文明「「国際化」と武道の変容」』『早稲田大学体育学研究紀要』第 31 卷, 1999

Night club culture in Taipei

Li Ho-Yu (National Taiwan Normal University)

There are multicolored lights, shop signs and fashion people everywhere in the night of Taipei streets, however, in a modern consumer city like here have many night activities to choose. Like night market, seafood store, "Kuai Chao" store(快炒店, Taiwanese style sea food restaurant), cinema, Karaoke, MTV box and night club. All of those activities have its own special culture, and the feature of night club most appealing me. In addition, night club have its own consuming style, so it different from other activities. Secondly, when I first come to there I found it was an amazing world. In the night club, everything is fresh to me at that time and I fell it is a place that full of joy and deluxe. All the people in there will pretend themselves to be the most beautiful person. Forbye, because the club that I want to study is a club that you can drink all the liquor when you have pay 20US dollar after, it's quit different from other kinds of club. In this kind of club because its special consuming style so everybody in here have been more avidity and dizzy. As well, because Taiwan's own history and culture so night club in Taiwan has been seen as a bad activity, this can also been seen in our media. Lastly, in the past there are very few literature about night club. So I want to find out what will happen in this kind of club and what its culture is ?

So it's a case study and club 9person will be the field that I want to study in. I want to find out what kind of tangible and intangible culture have built the night club culture. In this study I will stand at the position of a consumer and I will use observation and interview to find out the culture of night club.

Culture can be a style of life and will have its own special meaning and value. So there are tangible and intangible cultures in the club. And it also has some relation, power, code inside it.

So in my study I find out there are many tangible cultures in the club includes the decoration, light, bartender and publicist. All of those build a party of night club culture. For bye , the intangible culture also becomes an important part of the culture. So in this ambiance many relation and eroticism will accompany. Besides, this kind of club has its special operation, for example, "Ladies Night" in every Thursday. In this day women are free but it will cost 20US dollar for man. Just like Wednesday, the club will also hold some special programs at every weekend. This kind of marketing operation brings the night clubs a stable consumer flow.

After the interview, I find out some things special. First, every hour in the club has its own meaning. Secondly, everyone has his or her own reason to go to there. Lastly, every interviewer seems doesn't like one kind of people that is called 'Taikol'(台客).

Eventually, there are still many other sociological concepts in this field besides culture. So we can put more emphasis on those concepts later in the study.

第3世界における「パブリック・カルチャー」論の射程
 —A. アパデュライの「インド・クリケットの脱植民地化」を中心にして—
*Perspectives of "Public Culture" in non-Western Society
 Focusing on A. Appadurai's "The Decolonization of Indian Cricket"*

坂本幹

MIKI Sakamoto

筑波大学大学院人間総合科学研究科

University of Tsukuba Graduate School of Comprehensive Human Science

はじめに

なぜ、いま、第3世界スポーツなのだろうか。この問いは、1つ、スポーツ社会学の「第3世界スポーツ論」(石岡, 2004)において、科学的探究の対象としての第3世界の(スポーツ)をどう捉えることができるのかという、従来の認識論の批判的検討に関わるものである。2つ、その作業を経た後に提示される認識論的な前提から第3世界のスポーツを新たに問うことの積極的な意義とはいっていい何かという問題構制を含意している。本報告ではこうした関心から、最終的には第3世界の側からスポーツをめぐる議論を立ち上げていくことの意義を主張する。またそのための具体的な方法についても触れたい。

これらの作業を行う上で、本論で大いに依拠するのはアパデュライ夫妻による「パブリック・カルチャー」をめぐる一連の論考とA.アパデュライによる「近代性との戯れ—インド・クリケットの脱植民地化」の論考である。A.アパデュライに関しては、近年のグローバリゼーション研究の文脈において日本でも頻繁に採り上げられているが、妻のキャロル・ブリッケンリッジとの共同プロジェクトである「パブリック・カルチャー」論に関しては全くと言ってよいほど紹介されていない。アパデュライ自身が述べるように、「パブリック・カルチャー」論と「グローバルな文化フロー」の理論とは、車に喻えるならその両輪をなすような関係としてあり、報告者は「近代性との戯れ—インド・クリケットの脱植民地化」の事例論文においてこの両者は結晶していると考える。本報告では主に「パブリック・カルチャー」論の側に重点を置きつつ、第3世界スポーツ論の認識論をめぐる議論を進めていく。それにより、「第3世界スポーツ論」におけるパラダイム転換の糸口をつかむことを目的としている。

第3世界諸国が植民地支配からの独立を果たしてから約半世紀経った現在、政治経済的な困難を経験するそれらの社会におけるスポーツは、これまでスポーツ社会学の領域で様々な語られてきた。一際大きく語られてきたのは、スポーツの第3世界への伝播とその展開過程を植民地支配の歴史と独立後の資本主義の進展の上に重ね合わせる欧米の研究者達の主張である。スポーツはこの文脈において、第3世界の諸社会に政治的経済的な支配構造を新たに打ち立てる「道具」及びその再生産のための「装置」であるとされた。

こうした見解はその後、グラムシの「ヘゲモニー」概念に依拠するカルチュラル・スタディーズの流れを汲む論者達にさまざまに批判されることになる。かれらによると上記のような反映論的および構造主義的な見解は、文化的流れを一方通行的な関係性のもとに固定化し、相互浸透やコンフリクトの生成というダイナミズムを等閑視する決定論なのだった。それゆえ、こうした社会変革の可能性に対して身も蓋もない決定論ではなく、時代による文化的なもの意味の変化や「闘争」を捉えることのできる「ポピュラー・カルチャー」という概念をかれらは新たな認識対象として洗練させていく。それは従来の大衆文化や高級文化といった特定の階級に帰属し、単一の意味の付与された文化概念ではなく、支配者集団と從属集団の間を昇降する「動く均衡」——これはグラムシの用語だがホールはそれを「文化的エスカレーター」に喩えている——の現場として「ポピュラー・カルチャー」という認識対象を想定することだった。ポピュラー・カルチャーとしてのスポーツは、この文脈において、支配者集団と從属集団間における抵抗と支配の政治的折衝の現場であり、実体的なものではなく、関係的な認識対象として想定された。P.ドネリーなどの「文化へ

ゲモニー論」に依拠する論者が第3世界のスポーツをめぐる議論で用いてきたのは、この図式である。

こうした欧米の左翼理論家の視角に対して批判的なのは、カリブ社会の個別性に拘りながら、草の根のバスケット・ボールを照射したマンデル夫妻であった。かれらの研究で重要なのは次の2点である。1つは、夫妻が西インド諸島の地域研究の蓄積と長期に渡るフィールド調査をもとに、カリブ社会の社会構造や具体的な社会組織へとアプローチした点である。かれらはそうした知見と当該社会に固有の社会問題及びバスケット・ボールの活動をめぐる社会関係を析出し、それらの関連性の把握を試みた。例えば、トリニダード・トバゴにおいて園レベルのアマチュア・バスケット・ボール協会が政治家などの支配的な集団との協働関係に包摂される一方で、階層的に劣位に置かれる人々が活況に行うバスケット・ボールの活動は、支配者層にとって「どうでもよい」「無害な」活動であるという点に注目している。そしてそのような活動であるが故に、草の根のバスケット・ボールの活動は、統制やコントロールといった直接的な介入から一定程度の自律性を保持しているのだという。つまり、かれらが現場の個別性に拘るなかで注目したのは、こうしたカリブ社会のバスケット・ボールをめぐる独特の位置関係である。もう1つの特徴は、バスケット・ボールの活動が、下層に置かれる人々にとってプレイや試合運営の面で自分達の能力を発揮でき、また満足や達成の経験の獲得という、人生を豊かにする機会であるとして積極的な意義を与えている点にある。

マンデル夫妻は、第3世界のスポーツを支配集団と從属集団との間の政治的闘争の現場と捉える図式からは、はみ出てしまう他者の存在そしてスポーツを行うことの個別的な意義を、第3世界のフィールドの人々との交渉と様々な関係性の分析から提示しようと試みた。つまり、左翼理論家達の対象認識の前提として観念論的に前・設定された図式を疑い、それを揺さぶった点にこそ、かれらが第3世界の現場に拘ることの理論的革新があった。

よく知られるように、植民地支配期に第3世界に伝播したスポーツは、基本的に近代の西欧におけるアングロサクソンの発明物である。それが社会構造や言語、慣習等の異なる社会へと伝播し、様々な契機によって行われ、さらにグローバリゼーションの展開と共にそれぞれに独自で複雑な展開を見せて現在に至っている。こうした第3世界の諸社会におけるスポーツを西欧の価値観や歴史、社会構造の反映によって過度に単純化されたモノローグ的な議論ではなく、非西欧の側から、当該社会とそこにおけるスポーツを「ありのまま」に捉える認識論的方法論的な試みとして、新たな理論を提示するのが、本論で検討するA.アパデュライのインド・クリケットの事例であり、また夫妻による「パブリック・カルチャー」論の射程である。

ここでマンデル夫妻の試みた批判の矛先を啓蒙的なモノローグに基づく理論であるとするならば、本報告で検討するアパデュライ夫妻の「パブリック・カルチャー」論は、逆に「対話」的な側面を強く持っているといえる。それは様々な複数の他者の声を認めることでもある。具体的にこの「パブリック・カルチャー」という認識対象が可能とするのは、1つ、非西欧社会におけるコスマボリタンな文化形式の対象化であり、2つ、自分達の文化について様々なディベートの行なわれる「ゾーン」として、クリケットのようなスポーツを想定することである。報告では、グローバル化するインド社会におけるクリケットを「パブリック・カルチャー」という概念で捉えることの政治的意図とその革新的意義について検討していく。

主要文献

Appadurai, A. and Carol A. Breckenridge. 1995, *Public Modernity in India*. In C.A. Breckenridge (Ed.) *Consuming Modernity: Public Culture in a South Asian World*. Minneapolis: University of Minnesota Press.

アパデュライ, A. 2004, 門田健一訳『さまよえる近代—グローバル化の文化研究』, 平凡社
 石岡丈昇, 2004, 「第三世界スポーツ論の問題構制—認識論的検討とフィールドワークの『構え』—」, 日本スポーツ社会学会編『スポーツ社会学研究』12, 49-60
 ※詳細な引用文献及びデータは、発表当日のレジュメにて配布します。

遊び行為における役割の「重複性」に関する研究
Consideration of Dualism for the performance of role in Play

宮坂 雄悟（東京学芸大学 研究員）
Yugo Miyasaka (Graduate School of Tokyo Gakugei University)

はじめに

遊びについて、井上は次のように述べている。「ハンドルの遊び」などという表現にもみられるように、遊びという言葉は「余裕」や「ゆとり」をも意味する。それは一種の距離感覚といつてもよい。アンリオの表現を借りるなら、「遊びは何よりもまず、遊び手とその遊びとのあいだに存在する遊びによって成立する」のであり、「距離が、遊びの最初の形式なのである」(アンリオ、1974)。もともと遊びは、実際生活から影響を排除し実際生活への波及効果を統制するなど、実際生活に対して多少とも距離をとる形で構造化されている。だからこそ、楽しい経験を生み出しやすく、しばしば私たちを熱中させるのだが、同時に、熱中を生み出すその同じ構造が、熱中そのものに対してさえ距離をとる態度をも助長する。カイヨワもいうように、良い遊戯者は、遊びに熱中し、それに全力を尽くしながらも、それが遊びであること、あるいは遊びにすぎないことを忘れない。熱中のあまり、「怒ったり自棄になったり」、あるいは「勝利におごり酔い痴れ」たりする人は、距離感覚を失っており、もはや遊んでいるとはいえない。自己抑制と自己懷疑をふくむ「遊びの精神」の基本はこの距離化にあるが、それはしばしば仕事や人間関係など、遊び以外の領域にも採りいれる (カイヨワ、1973)。

井上は、もちろん一方では、チクセントミハイの議論を引き合いにして、「彼は、遊びのなかでしばしば経験する「楽しさへの没入感」「全人的に行行為に没入している時に人が感ずる包括的感覚」を「フロー(flow)」と名づけ、このフロー経験はたしかに遊びにおいて典型的に生ずるが、たとえば外科手術のような仕事の領域においても生じうると論じた」と述べ、遊びにおける「没入」の側面をも強調する。

しかしながら、この没入と距離化は、本来、正反対の態度であり、その 2 つを同時に抱える事は、実はきわめて難しいことである。遊びにおいて、こうした態度は、どのようにしてそもそも成り立っているのであろうか。遊びというものが、スポーツという文化の基盤をなしているだけに気になるところである。そこで本報告では、この課題に対して「役割」概念から、いくつかの観点を合わせ社会学的な考察をくわえることを目的としてみたい。

役割と距離

遊びの持つ「距離化」の侧面をまず考えようとするときに、すぐに思い起されるものは、ゴフマンが駆使した「役割距離」という言葉である。「役割距離」とは「一つの役割に没頭するのではなく、その役割にはおさまり切らないもう一つの「自分」を、しかも当の役割を遂行しながら表現してみせるテクニック」と辞書的には説明される(社会学事典)。ゴフマンがここで含意するものは、もちろんよく知られるように自我の問題である。帰属するものがなければ確固とした自我を持てないにもかかわらず、帰属するものへの愛着は自我を見失わせてしまう。そこで帰属=役割に対しての「距離」こそが、自我の住処になるのだというのである。

このようなゴフマンの視点からすれば、遊びにおける没入と距離化は自我の確立になんらかの仕方で関わっている、という見方を導くことになる。教育学等で、人間の成長にとって遊びの意義が強調されるひとつの理由なのであろう。確かに、遊びが貧しくなったと言われる現代社会においては、自我が見失われた状態=精神的疾病が勢いを増しているように見える。と同時に、自我が不安定であるからこそ、逆に遊びが貧しくなるということも起こるかもしれない。しかし、いずれにしても、役割をめぐって求められる「没入」と「距離化」の同時的な遂行は、日常生活における実践的態度としては大変難しい性質を持つものである。その意義や作用が説明されたとしても、その成り立ちについては不問いのままである。対面的な社会的場面において、このように相反する態度は、果たしてどのように成り立っているのであろうか。

学びの場面における「なぞり」と「かたどり」

ところで、教育学において佐藤は、学びの本質を「まねび」という「模倣」の行為に求め、「伝承」と「創造」を対立させてきた近代主義的な「学習」の再定義を試みている。「まねび=学び」における「伝承」と「創造」の関係を、他者の文化を模倣する活動を意味する「なぞり」と自己の文化を構成する活動を意味する「かたどり」の螺旋的な円環運動こそが「学び」である、というのが佐藤の議論のポイントである。また、「学び」における教師の役割としては、ヴィゴツキーの「発達の最近接領域」の概念を援用しながら、子どもの発達に先回りすることで学びを促進させようとする『なぞり』のモデルの提供」を重要なものとして、主張している。ここには、学びという行為における、「教師」という役割とその遂行の具体像が示されている。議論の焦点は、共同的な意識が構成される際に現れる、円環的な「構造化」の特性である。当日の報告において、この点を皿に詳しく検討するとともに、スポーツ社会学におけるインプレッションについて明らかにしてみたい。

"Wii"現象とは何か? -ヴァーチャルスポーツのハイブリッド化の意味について-
 How We Should Perceive the "Wii"
 : The "Hybrid Sports" Point of View

松田 恵示
 Keiji Matsuda

東京学芸大学
 Tokyo Gakugei University

社会現象としての"Wii"

昨年12月に、任天堂から発売された新しい据え置き型ゲーム機が"Wii"である。「みんなが楽しめる」というコンセプトのもと、"We"の発音をイメージして名付けられたこのゲーム機は、発売1ヶ月足らずで、アメリカ、日本の両国で100万台を超える売り上げを記録した。販売戦略もあたり、これまでのテレビゲームのユーザー層にとどまらない広がりを見せている、まさに社会現象としてのテレビゲームである。

ところで、このゲーム機の最大の特徴は、コントローラーにある。"Wii"の開発に向けては、「ゲームの複雑化に伴うゲーム離れ」が課題とされていた、と言われている。このために、「みんなが楽しめる」というコンセプトは、まず、ゲームの扱い方に集約される必要があった。こうして開発されたのが、「Wiiリモコン」である。主にスティックとボタンを駆使する従来のテレビゲーム・ユーザー・インターフェイスとは異なり、「Wiiリモコン」では、コントローラーそのものを動かすことでゲームを操作する。このことが、"Wii"に、これまでのユーザー層にとどまらない、特にテレビゲームとはこれまで疎遠であった中・高年層をよく取り込む結果となった。つまり、コントローラーを「振る」「回す」「狙う」などして操作する、体感型の優しいテレビゲームが誕生したわけである。

体感型への流れ

「技術的環境というものは人々をただその中に住まわせるというだけの受動的な容器にとどまるものではない。それは人々を作り直し、他の技術をも更新する能動的過程なのだ」(M.マクルーハン(森常治訳)、グーテンベルクの銀河系、みすず書房、1962)。M.マクルーハンはこのように述べて、メディアテクノロジーがもたらす社会への衝撃をむしろポジティブに捉えようとした。確かに、現代社会が直面しているもっとも根本的な変容の論理は、こうしたテクノロジーの革新という環境そのものであろう。この意味で、「Wiiリモコン」のもたらすものは、テレビゲームが表象してきた現実のスポーツに対してもなにがしかの影響を与えていくものであろう。現に、"Wii Sport"というソフトは、"Wii"において人気のある定番もののひとつとなっており、これまでにも述べてきたように「スポーツ」の概念を大きく変えつつあるように見えるからである。ここで、テレビゲームと「スポーツ」の関係について今一度簡単に振り返っておこう。

テレビゲームの特性は、極言すれば「インラクティビティ」という性格にある。むろん、テレビゲームだけがそうだというのではない。携帯電話やパソコン通信など近年のメディアは多かれ少なかれこういう側面を持っている。しかし、「映像」に直接対話的なかかわりを持つ点においてテレビゲームはずば抜けている。そして、このことを支えているのが先にも述べた「インターフェイス」と呼ばれる技術である。テレビゲームの場合、一般にコントローラーと呼ばれる操作系を指している。ゲームソフトは「0/1」のデジタルコードで動いているのに対して、これを操作するプレイヤーはもちろんアナログコードで動いて

- 84 -

ている。これが、インターフェイスの技術によって変換され媒介されている、というわけである。テレビゲームの面白さは、コンピューターグラフィックスやデジタルサウンド、またこれらを支えるCPUや演算システムはもとより、このインターフェイスの技術から産み出される部分が大きい。アナログ身体が、イメージとシンボルの複合体として広がるゲーム画面のデジタル身体とシンクロし、ウィーブし、リンクし感應する。プレイヤーの肉体的な操作技能が、翻訳技術によってスクリーン上に広がるイメージとシンボルの複合体としての映像世界の構築に繋がっていく。

このように肉体的な操作技能を使って行う遊びであるからこそ、テレビゲームは同じように身体を自己目的化する「スポーツ」という文化と、当初から近い関係を保ってきた。日常生活上の目的を離れ、その意味では本来「どうでもいいこと」のために身体技能を自己目的的に駆使する行為という点では、テレビゲームはスポーツと本来区別しえないわけだ。さらにこの傾向に拍車をかけているのが「体感型ゲーム」の進化である。これらのゲームは、赤外線を使ったワイヤレス仕様でラケットやバットといったコミュニケーションツールを持ち、体全体を使ってプレイするシステムが特徴であり、かなりのハードな体の動きが要求される。つまり、こうした体感型のスポーツゲームが、いわゆる「スポーツ」とまったく同様の全身的な肉体的技能と、それゆえの全身的な肉体の異化作用を持ちはじめているということである。そして、"Wiiリモコン"は、「ヴァーチャルスポーツ」における〈肉体的技能=アナログ身体〉の〈画像=デジタル身体〉への〈翻訳〉、という段階を超えて、肉体的技能と画像を直接結び付ける=〈融合〉という段階を、いとも簡単に経験させてくれるものとなっているわけである。このようなテレビゲーム・スポーツは、決して「ヴァーチャル」なものではない。それは確かに電子メディアの技術なしには成り立たないものの、それが〈翻訳〉という作業を担っておらず、「ヴァーチャル」と「ノン・バーチャル」といった境目がすでに無化してしまっている以上、まったく別種のリアリティであるとしかいいようがない。こうしたスポーツを、ここでは「ハイブリッド化スポーツ」あるいは別なところでも呼んだように「サイバースポーツ」と名付けてよいと思われる。

シンクロする身体

ここで美学者の西村清和は、次のように述べている。「テレビゲームにおけるプレイヤーのキャラとの『同一化』とは、物語の人物への共感でも感情移入ではなく、最近よく使われることばをもちいれば『シンクロ(同期)』である」「ゲーム行動にとってなによりも重要なのは、登場人物のキャラクターに支えられた物語りの展開ではなく、プレイヤーがキャラの身体にシンクロして得られるゲームの『行動感』である」(西村清和、電腦遊戲の少年少女たち、講談社、1999)。

例えばエポック社の「エキサイティングシリーズ」に見られたように、実際のラケットやバットの形をしたコントローラーによる体感型ゲームは"Wii"以前にも存在していた。しかし、これらと"Wiiリモコン"が異なる点は、まさにコントローラーが無機質な意味を持たない物体であるがゆえに、インターフェイスが意識の上で消失し、変わって現れる、映像とシンクロするプレイヤー自身の身体を出現させてしまうことである。シンクロする身体に開かれた新しいユーザー層の存在は、いったい何を意味することになるのだろうか。その社会学的含意についてさらに詳しく検討してみたい。

引用文献

- M.マクルーハン(森常治訳)、グーテンベルクの銀河系、みすず書房、1962
 西村清和、電腦遊戲の少年少女たち、講談社、1999

The Game Generation in Taiwan: The Past, Present, and Future

Chang Hung Chi

National Taiwan Normal University/Graduate Institute of Sports & Leisure
management

Abstract

With the two-day-off per week policy, the concept of healthy leisure is rooted gradually in people's mind so that the leisure sports people are engaged in appear getting more varied with each passing day and different demands become emphasized with time. In view of the historical and technical development, playing video games has played more and more important roles in the entertainment activities. Digital game start from only play games platform in the beginning, which is already gradually in different type platform budding, from arcade game, video game to computer game, even the cell phone may take along the type installment, enables the people easier and convenient to reach the game. Therefore, a variety of business opportunities and issues has derived from the video game industry. A New strength next generation game console PS3 and Wii distribute which along with 2006 the end of the year and, XBOX360 which distributes with the year before, all of them fired the next generation game console war.

Generally speaking, the development of the video games in Taiwan has grown with it in Japan. The game consoles, from the early Nintendo's Family Computer and Super Nintendo, the following PS, PS2, XBOX, to the present PS3, XBOX360, Wii, has caused considerable influences to the society during these developing stages.

By the interview in depth and documentary analysis, this study is aimed to analyze the historical development of video games in Taiwan— how the video games attracted people and invented the economic values from the past to the present. Besides, it explores the social factors from which the video games originate and develop as well as the influences which they bring to the society. Moreover, it also provides suggestions for the future development of video games in Taiwan.

The findings of this study are as follows:

1. The relating hardware and software of video games develop with the varied acoustic-optic and special effects.
2. The video game industry, considered one of the improper additions in the past,

has changed to become one of the developing industry and entertainment activities nowadays.

3. Playing video games already has become one trend and social activity, affecting people's habits and values.
4. In recent years because of information and technology developed, network popularization, thus impetus the on-line game development. The on-line game players even already to surmount the video games players.
5. The video game expense culture which already gradually formed one kind of unrest affected the people expense custom., even might be called was one fashion.

In this study, the traditional viewpoints of video games have been overturned. Likely the Nintendo's Wii, which broke the law to plays the game, enables the multi-people to participate in the game's world. It has pulled closer the machine and humanity's distance. Since more and more people are engaged in video games, the trend of video games may be believed to broaden its scope.

Keyword: The Game Generation, Video Game, Digital Game

米国プロスポーツ研究における経験的・理論的パースペクティヴ
 Perspectives for professional sport and community:
 The empirical and theoretical sport studies in America

大沼義彦・長津詩織
 Yoshihiko ONUMA and Shiori NAGATSU

北海道大学大学院教育学研究科
 Graduate school of education, Hokkaido University

はじめに

Jリーグ発足以降、プロスポーツと都市、または地域社会との結びつきが強調されるようになった。こうした背景については、いくつかの見解が示されている。例えばグルノーは、カナダ・スポーツを①ボランタリー部門で発展してきたもの、②国家との関連で発展してきたもの、③商業主義の関連で発展してきたものの三層で捉え、財政難によって①②が、市場を中心とした③に置き換わっていったことを強調した。ここでプロスポーツは、スペクタクル社会の最も魅力的なイデオロギー的特徴を体现するものと観念される。ただし、Henry & Grattonが看破したように、その分析は未だ十分ではなく、スペクタクル社会の内実も不明のままである。一方松村は、象徴や記号レベルの議論をにらみながらも、そこに地域社会を組み込んだ論を構想する。それは、「開発とスポーツ」という枠組みであった。その含意は、研究の射程に、従来の地域とスポーツ研究を包含せしめ、象徴的なプロスポーツをも同時に議論の遡上に乗せることであったと考えられる。

こうした主題に先駆けて取り組んできたのが、米国におけるスポーツ研究であった。本報告においては、その端緒に位置づけられる Ingham らのプロスポーツとコミュニティ研究 (Ingham et al. 1987; Ingham & McDonald 2003; Smith & Ingham 2003), 及びマイナーリーグ研究 (Johnson 1995) を中心に、スポーツと地域社会研究におけるパースペクティヴを確認したい。

1. 米国マイナーリーグ研究 (Johnson 1995)

マイナーリーグ研究は、その拠点が巨大都市に限らないという点で、示唆に富むものといえる。Johnson の主要な関心は、チームそのものの成功ではなく、チームの存在、より具体的にはスタジアムの建設が地域開発にどのように寄与したかという点にあった。ここでは建設理由とその論点として、①中心市街地再活性化と土地開発、②都市イメージの向上、③生活の質向上を取り上げ、整理を試みたい。

(1) 中心市街地再活性化と土地開発

すでにプロスポーツチームやイベントの経済効果予測を疑問視する声は、多くの研究者によって発せられてきた。Johnson も同様の立場をとり、それでも再活性化が叫ばれる背景に迫っていく。彼は、それが土地取引（工業団地の造成、住宅地開発、インフラ整備事業等）とセットになっていることに着目し、さらに背後にある「政治的風土」に言及した。

(2) 都市イメージの向上

マイナーリーグチームを誇る自治体の規模は、さほど大きくない。彼らの自己認識には、「印象に残らないまち」等、経済衰退時期に定着してしまったマイナスのイメージがあった。そのためチームは、地域のイメージを高め、宣伝する手段となり得るものであった。しかしながら、「マイナー」リーグであることは、必ずしも積極的イメージを付与するとは限らない、と Johnson は指摘する。また、住民の競争と都市イメージ向上とがどのような関係にあるのかともつまびらかではなかった。

(3) 生活の質向上

マイナーリーグを持つ地域の多くは、他の娯楽施設を持たないため、試合は重要な娯楽の機会となる。確かに「レクリエーションは地域の生活の質という面で重要な構成要素となる」のだが、「本当の意味でスタジアムが地域の構成要素となる目的を達成した事例はな

い」という。実際には野球に関心のない住民もおり、「野球という賭けで競争し続ける価値があるかどうか再評価しなければならない」と Johnson は述べた。

2. プロスポーツとコミュニティ研究：Ingham らのパースペクティヴ

Ingham らは、「我々はスポーツ研究において地域再生研究アプローチを助力するために、同時に、プロスポーツにおける生産者-消費者の変容に適切に接近するために何ができるのか」と問い合わせた。その問題構成は、一貫して①（プロ）スポーツの「社会的空間から抽象的空間への移行」、②表象的スポーツ（プロスポーツ）とコミュニティとの集合表象レベルでの結びつき、③米国コミュニティ研究とプロスポーツとの接合であった。

(1) 社会的空間から抽象的空間へ

Ingham らが注目するのは、「一般には資本主義にとっての、特にプロスポーツにとっての、『埋め込まれた』経済から、かつてそれが埋め込まれていた社会や文化を強力に具体化するある自律的経済構造への移行」である。彼らは、プロスポーツリーグ（カルテル化）によって、チームとコミュニティのつながりが衰滅させられてきたとみる。ここでは消費がより重視され、その傾向が都市間競争によって強く枠づけられるようになっていく。背後仮説として、ポスト・フォーディズム社会でのプロスポーツの姿があるといってよい。

(2) プロスポーツをめぐる表象とコミュニティ

プロスポーツが暗示する集合表象に「地域の一体感」がある。Ingham らは、Turner の *communitas* 概念を参照しながら、「自然発生的コムニタスは、つかの間のことであり、コミュニティそれ自体に対する基礎を形作ることができない。コミュニティは、時間と社会的コミットメント、社会関係資本の投資を含む。コミュニティは、ユートピア的の意味において、信頼と義務を含み、そして表象的スポーツは、特に北米において、そのようなものに対する基礎をなんら提供しない」とそのイデオロギー性を批判した。ここでは、儀礼一般と区別された「市民的儀礼」という独自の概念を創出し、コミュニティとのつながりの脆弱さを浮かびあがらせた。

(3) コミュニティ研究への接続

プロスポーツとコミュニティ研究を結びつけるため、Ingham らは、Bauman, Bellah, et al., Sennett, Putnam らの理論的検討を行い、パネル調査を実施した。ここでは、都市空間における「差異の政治」の強化、中流階級の「ライフスタイルの飛び地」への後退、一般的な互酬性に基づくコミュニティの変容等を念頭におきながら、「プロスポーツがコミュニティを（再）生することができるという（理論的、または経験的）支持はないと思われる」との結論を引き出した。

3. まとめにかえて

Johnson の経験的研究の主眼は、都市とプロスポーツをめぐる政治的エコノミーの解明にあったとみられる。それに対し、Ingham らは、プロスポーツとコミュニティを見ていく際、空間-表象-共同体（性）の諸関連で検討することの必要性を強く提起していたと考えられる。つまり、①スポーツの空間は所与の実在ではなく社会的に生産してきたものであること、②その空間の効果はプロスポーツという表象（市民的儀礼）を媒介に構成されること、③そのことが共同体（性）の表象と実態とにどのような影響を及ぼしているのか（表象を積極的に担う「主体」の役割を地域住民は演じるのか）、という枠組みである。
 <主要文献>

- Ingham, et al. (1987) Professional sports and community: A review and exegesis. *Exercise and Sport Sciences Reviews* 15: 427-465.
- Ingham & McDonald (2003) Sport and community/communitas. in Wilcox, Andrews, Pitter & Irwin eds., *Sporting dystopias: The making and meaning of urban sport cultures*, State University of New York Press, 17-33.
- Johnson (1995) *Minor league baseball and local economic development*, University of Illinois Press.
- Smith & Ingham (2003) On the waterfront: Retrospectives on the relationship between sport and communities. *Sociology of Sport Journal* 20: 252-274.

内海和雄氏の理論についての考察
A study on the theory of Kazuo Uchiumi

荒川和民（スポーツライター）
Kazutami Arakawa(Sport Writer)

1、はじめに

その莫大な研究量から意欲的に出版活動を行うスポーツ社会学者がいる。内海和雄氏だ。内海氏は、その華やかなプロフィール（東京大学大学院教育研究科博士課程修了→一橋大学教授）とは裏腹に、著書から伺えるのは「あくまで自力で道を模索している人」という印象を強く受ける。「無駄なく」「量より質」「方法論の確立」といったエリート主義がヘゲモニーを握る研究界において、内海氏は明らかに異彩の光を放つ。内海氏は「質より量」で勝負するタイプだ。

『スポーツの公共性と主体形成』では、スポーツの起源を労働に求め、旧東独の社会主義およびステートアマに理想を求めた。その一方で、『プロ・スポーツ論』ではあえて資本主義を善とし、プロを善とした。しかし、内海氏の眞髓はそうした大筋にあるのではない。むしろその枝葉にある。これは内海氏の莫大な研究量がなせる業なのであろう。

したがって、本研究のテクストを内海和雄著『スポーツの公共性と主体形成』および『プロ・スポーツ論』に定め、「賛同できる点」および「疑問に思う点」に分け検討していく。

2、『スポーツの公共性と主体形成』について

・賛同できる点

内海氏が唱えるスポーツの客観的な性格の構造的な把握である。それは①スポーツそれ自体②スポーツの組織、つまりチームワークを内包したクラブワークという組織運営③スポーツの社会的意義、つまり社会体制、資本、マスコミといった現代スポーツの世界の基底的レベルで作用している性質のものである。自らのスポーツ・キャリアを継続し、またセカンド・キャリアを形成していく上で、スポーツの客観的な性格の構造的な把握はきわめて重要になろう。そうでなければ、スポーツ技術そのものに志向するというスポーツ目的論は資本主義社会に利用されるばかりになるであろう。したがって、スポーツの客観的な性格の構造を把握し、自治能力をつけていくことがスポーツマンには望まれる。

・疑問に思う点

一つ目が、ダーウィンの唯物論的な進化論を引用していることである。この内海氏の言説をエリック・ダニングも裏付ける（エリック・ダニングの言説は当日資料として提出します）。私見ではあるが、内海氏、そしてエリック・ダニングの言説に対し、次のようなアンチテーゼを提示したい。

「一定期間内に、たとえば学校教育受講中に、衝動の陶冶できなかった者は、もはや体育、スポーツの世界で生き残ることはできないのだろうか。」

大切なことは、相克性を昇華した相乗性の概念であり、私にとっては学会発表、本の出版となる。

二つ目に、ヨハン・ホイジンガの『ホモ・ルーデンス』の捉え方である。ここで重要な視点を強調しなければならない。それは、「美へ志向する遊戯」である。「美へ志向する遊戯」によって、人間は（スポーツが楽しい）という思いを抱くことができ、この思いによって下部構造を照射し返すことができる。ジャン・ボードリヤールは、下層階級においては「あきらめ」が、上層階級においては「渴望の自由」が存在するとし、「渴望」の生産過程さえもが不平等である、とした。しかし、（スポーツが楽しい）という思いは、近代スポーツにおいてでき、この「渴望」の生産過程の不平等を覆すことができる。端的に言えば、下層階級に決め手となるのがスポーツ活動を維持するための労働である。こうした傾向は、大学体育会の運動部員およびプロ・ボクサーなどに顕著に現われる。その一例として、ヨット界に一つの伝説が残っている。中国地方のH大学体育会ヨット部は、ヨットの維持費等莫大な部の運営費を維持するため男子部員、女子部員ともに同じ肉体労働をしな

がら部活動を継続していた。H大学体育会の他の運動部員はヨット部の状況を気の毒に思っていた。しかし、H大学体育会ヨット部は地方の国立大学としてはきわめて異例な大学日本一の座を二度奪取している。この時、H大学体育会の運動部員には大きな衝撃が走り、興奮の増幅と化している。このように（スポーツが楽しい）という思いは、近代スポーツにおいてでき、下部構造の不平等を覆すことができる。しかし、かつてH大学体育会は大きな問題を抱えていた。それは運動競技に熱中するあまり、講義やゼミにまったく出席せず、4年で大学を卒業すべきところを、卒業限度年数ギリギリの8年をかけて卒業していく運動部員が数パーセントの割合で存在していたことである。本人たちは負い目などなかつたが、教官が頭を抱えていた。ここに6・3・3・4制の日本の部活動の限界のひとつがあるのかもしれない。

3、『プロ・スポーツ論』について

・賛同できる点

一つ目に「アマチュアリズム」である。内海氏に限らず、多くのイギリスの歴史社会学者は「アマチュアリズム」が生まれた要因として、「ブルジョアジーが賞金稼ぎのために労働者階級のパブリック・スクールで生まれたスポーツへの介入を忌み嫌った」「ブルジョアジーが労働者階級に敗北することを忌み嫌った」という点を挙げている。しかし、この当時、粗暴で荒々しい民俗的なスポーツしかしてこなかった労働者階級が、すぐにホップスルがなるブルジョアジーのスポーツで勝つことができたのだろうかという疑問が浮かぶ。これは、肉体労働者の「傷害を恐れない屈強さ」という点でブルジョアジーを凌駕していたことに勝因が見出せる。この肉体労働者の「傷害を恐れない屈強さ」という点は、現代の肉体労働者のライフヒストリーからも裏付けられる（当日、「現代における肉体労働者のライフヒストリー」という資料を提示します）。しかし、ここで特記しなければならないのが、この「傷害を恐れない屈強さ」が原因で近代スポーツの「男らしさ」が増強されたことに留意しなければならないということである。

二つ目に、内海氏の理論から「ユニバーサル・アクセス」「ネーミングライツ」といった資本主義社会の戦略を知ることができた。資本主義社会の戦略は（スポーツが楽しい）という個々人の思いを均質化、均一化してしまう危険性があるために、批判的なまなざしで考察しながら、ブレイ論の重要性を考察していきたい。

4、まとめ

私は「ブレイ論は牧歌的である」という言説には批判的である。西洋文化が非人間的であるため資本主義体制を解体しつつ、今後ブレイ論の重要性を説いていきたい。

内海氏の理論から、資本主義体制下ではスポーツの客観的な性格の構造的な把握がスポーツキャリアを継続していく上でも、セカンドキャリアを形成していくうえでも重要になることを知ることができた。また、「美へ志向する遊戯」によって（スポーツが楽しい）という思いを抱くことができ、この思いによって下部構造を照射し返すことができる再確認できた。「アマチュアリズム」についても現代の肉体労働者のライフヒストリーについての事例研究を通して再考察することができた。

総じて、内海氏の理論を通して、資本主義社会とスポーツの関係を深く考察することができた、と言える。

最後になったが、内海氏が最も力点を置いている「公共性」の概念についてはきわめて慎重に論を進めていきたい。私の立場からは「スポーツに主体的に取り組み、スポーツ技術に創造的に志向する」という仮説をもとに「公共性」の概念を考察していきたい。

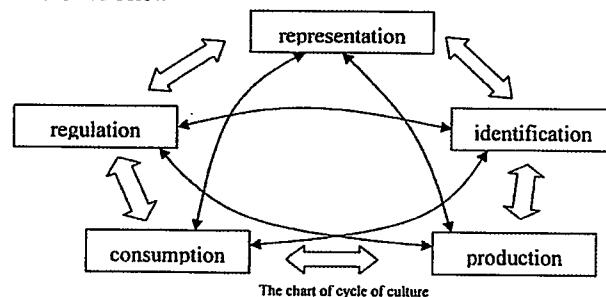
参考文献

- 1) 内海和雄著『スポーツの公共性と主体形成』不昧堂 1988
- 2) 内海和雄著『プロ・スポーツ論』創文企画 2004

Looking insight the phenomenon of Wang with the theory of cycle of culture

Lee Shane chung (National Taiwan normal university)

In 2006, the most popular topic in Taiwan is the famous baseball player Wang. He got the most wins in the major baseball league with excellent performance. He has achieved an excellent performance in baseball league. In this case, he has become the headline in all kinds of media in Taiwan. Furthermore, the products he has endorsement or some thing to do with him are has become the best-selling in Taiwan. Therefore, Wang has become the super star in Taiwan. Andrews & Jackson (2001) indicate that contemporary sport celebrities occupy as athletic labors, entertainers, marketable commodities, role models, and political figures, within an increasingly global culture economy. Adorno (1947) he is the beginner of using "culture industry" to describe of the mass culture products. It refers to all the mass culture products that created by mass media.propaganda such as public music,disney. They lack of realistic value though it represents contemporary fasion,taste and social value. Stuart Hall (1997) indicates that the composition of the certain culture is through five processes that are representation, identification, production, consumption and regulation. And they are showed below :



The five processes are form a life cycle. It is called the cycle of culture. He considers that to analyze any item of culture or artificial product the cycle of culture is the critical avenue. So the study intend to discuss Wang with the five processes.

1. representation

The baseball colonized by Japan with complex history background become 「National Ball」 in Taiwan, and Wang got illustrious performance and won the 「Nation Hero」 title. During the political dispute period in Taiwan, Wang represent in time as the exit of bad emotion of Taiwan people, thus, he was called 「Taiwan Star」

2. Identification

Wang's personalities fits to the traditional Taiwan culture and social identification, such as Simple-hearted, honest, austerity, and etc. And advertisement host used these

characters to attract fan's attention and made identification with buying Wang's merchandise. That is a model of cultural identification and connection with society culture in Taiwan.

3. Production

Wang becomes the cultural commodity is that enterprise rests on his characteristic as the best spokesman of Taiwan people diligence, effort, courtesy. Therefore the goods endorsed by him connected to our social value and the media effect of "globalization" made Wang become special commodity.

4. Consumption

A France sociologist, Baudrillard (1988) said " Things should become representation and be consumed". The consumption of people life is not only the function but consume the meaning of commodity behind symbols. Therefore, commodity needs contain enough meaning to enhance consumer's attitude to buy Wang's merchandise which fits to his personalities.

5. Regulation

Wang has many great grades in MLB for many times makes his commodity get high pricing gradually . Thus, there is a new regulation of his goods—"High value Consumption", only the guys who can afford to high price can buy the「Taiwan Star」, and the phenomenon become the exclusive behavior of some special level people.

Conclusion:

Stuart Hall (1997) has proposed that representation, identification, production, consumption and regulation are five processes to form acculturate. According to this definition, we can investigate Wang has become a special products through this five processes. Since he has become a national icon with his special attributes, which ethnicism by the consumer We can investigate Wang has become one kind of special commodity; this has through such process cycle. Through this cycle, he becomes one kind of icon, in addition to his special characteristics, which has been approved by consumer. This consumer approval and special characteristic has leaded the enterprise and the media to produce the special Wang commodity. Due to Wang himself consists the significant symbol of Taiwanese society, Hence, he has become one kind of special icon. However, this kind of symbol/icon consumption in the consumer society has a new regulation exists, that is the high price consumption can own the culture symbol. When discuss about Wang become this type of cultural commodity, We should understand the meaning behind this, and clarify Wang became a special commodity products and the relationship between consumer and Wang his living society, this will help us to understand the relation and interaction between consumer and special commodity.

The Research of Leisure-related Policies for The Elderly in Taiwan

Yu-Jen Chen

ABSTRACT

The Council for Economic Planning and Development Executive Yuan predicts that the Taiwanese elderly population will rise to 16.5% between year 2010 to 2015. It will be raised to an even higher 21.6% by year 2036. Therefore, the issues associates with the greying population become more important in Taiwan. Although the Senior Citizen's Welfare Law is the regulation to take care of the elder, there is no specific government department is responsible for establishing leisure policies.

The purpose of this study was to review the policies to indicate the government to help the elder to overcome the structural constraints. The present study examined the hierarchical model of leisure constraints proposed by Crawford, Jackson, & Godbey (1991). The main concepts of the hierarchical model were developed by Crawford & Godbey (1987). The model comprises of three distinct hierarchically ordered types of constraints that may prevent one from participating in leisure activity. They are: 1) intrapersonal constraints, 2) interpersonal constraints, and 3) structural constraints. The mainly factors of structural constraints were leisure participation and preferences included the season、the climate、the family、the financial affairs、the knowledge, and the time... etc. The data collected from the government was analyzed using content analysis.

Based on the findings, there are two aspects in which leisure-related policies may improve the leisure conditions for the elderly. The first aspect concerns the tendency toward raising the capacity for leisure participation. The second aspect pertains to the tendency toward increasing the levels of activities preferences.

In summary, the findings of the first part are as follow :

- 1) The more the "Convenience", the stronger the likelihood of participating in more of leisure activities.
- 2) The less the 'price', the stronger the likelihood of participating in more of leisure activities.
- 3) There were probably some noticeable assistance from the service providers when the elderly participated in leisure activities.

The findings of the second part were as follow :

- 1) There were more recreational facilities in community activity center.
- 2) There were a numbers of leisure activities to choose from.

Key words : Leisure-related Policies 、 Leisure participation 、 Leisure constraints 、 Structural constraints

ボウリングブームに関する諸条件の考察
A research on conditions of the bowling boom

笹生心太（一橋大学大学院社会学研究科）

Shinta Sasao

Hitotsubashi University Graduate School of Sociology

1. 研究の課題と方法

スポーツブームという、ある種目に対して人々が一気に殺到する異様な現象は、いかなるメカニズムで発生し、またそれは我々の社会に何を訴えているのか。本研究は昭和40年代のボウリングブームを題材に分析を行うことで、これらの点を明らかにする。

従来のボウリングブーム研究は、その条件を、①社会構造に求めるもの、②種目の特性に求めるものの2つに分けることができた。本研究は、ボウリングブーム発生／終息のための条件を分析する枠組みとして、「社会条件（従来の研究の①の視点）・関連団体の動向（ブームを仕掛けた主体の視点、従来の研究にはない）・種目特性（従来の研究の②の視点）」の3つを組み合わせた3層構造を採用する。この枠組みによる分析を通じて、より精緻なボウリングブームモデルを構築し、またボウリングブームの果たした役割を明らかにする。

2. ブームの条件

＜社会条件＞

ボウリングブームという現象は、レジャーとスポーツの盛り上がりが合流する地点に発生したといえる。戦後のレジャーは、技術革新、労働条件の整備、家電の浸透、労働形態の変化、消費の拡大といった諸要素によって拡大していく。またスポーツに関しては、野球やプロレス、オリンピックなどの「見るスポーツ」の盛り上がりに刺激を受ける形で、国民の「するスポーツ」欲求が高まっていく。重要だったのは、1960年代の時点では、レジャーもスポーツも福祉に位置付けられず、民間資本によって盛り上げられていった点であった。政策の代わりに、ボウリング産業が国民のレジャー欲求、スポーツ欲求を回収していったのだ。

だが一方、1970年代にはレジャー産業もスポーツ産業も変容し、ボウリングは国民のニーズに応えられなくなっていく。オイルショックをきっかけとした不況は、人々のレジャーとスポーツに対する行動を変化させていった。レジャーでは、D I Yや文化センターなどの実利的レジャーがさかんになった。またスポーツに関しては、公害の発生や労働の過密化などを背景に「健康ブーム」が発生し、ジョギングなどの健康スポーツが志向されていく。これらの動向は、ボウリングのように消費的なレジャーやスポーツではなく、楽しんだ後に何かが残るレジャーやスポーツが国民から求められるようになったということであろう。

＜関連団体の動向＞

ブーム発生期前夜、ボウリング場が多く作られ競争が激化していくと、各ボウリング場は景品や賞金を提供することで客の確保を図るようになった。だがそうした動きは青少年の非行の温床になるとして批判されていく。こうしたボウリングの娛樂的遊戯化を食い止め、健全なスポーツに変えていくこうとしたのが、全日本ボウリング協会（JBC）と日本ボウリング場協会（場協会）であった。両者は、地方税（後の娯楽施設利用税）や風俗営業法による規制に反対する中で団結を強め、深夜営業の自粛などを盛り込んだ「自粛3原則」を掲げることで、ボウリングが「健全スポーツ」であることをアピールした。これは、ボウリングの社会的イメージが向上したこと、そしてボウリング場への税負担が軽減されたこと、という2点においてボウリングブーム発生のための大きな条件となつたと考えられる。

ところが1971年、両者が結んだレーン認証協定¹⁾によって場協会に加盟しないボウリング場

¹⁾ センターに設置されているレーン設備は、各センターごとにバラバラであったため、記録を公認するためには統一的な基準が必要であった。そのため、JBCがこの統一的な基準を掌握し、各レーンを公認する権利を持っていった。

（アウトサイダー）が不当に締め出されたという疑いで、独占禁止法違反と認定された。両者はレーン認証協定を破棄するが、これをきっかけに両者は対立を深めていく。それは、JBCはJBC会員中心のアマチュアスポーツとしての方向性を目指し、一方の場協会は一般大衆も楽しめるスポーツの方向性を目指したという方向性の違いによるものであった。こうした対立によって、過剰な演出を行うボウリング場を取り締まることができなくなり、また娯楽施設利用税の撤廃運動も停滞していった。そしてボウリング場は無秩序に増加し、また一方で一向に減らない税金がボウリング場の首を絞め続けていた、ボウリングブームは終息に向かう。

＜種目特性＞

「するスポーツ」の側面から見ると、多くの先行研究において、ボウリングの特性として「手軽さ」が挙げられている²⁾。ところがこの「手軽さ」は、裏を返せば「単調さ」につながるものであった。プロボウラーも「うまい素人」と大してスコアの差がなく、競技として奥深さが不足していた。単調であるために人々に飽きられたことが、「するスポーツ」面でのボウリング離れを促進していった。

また「見るスポーツ」としての発達もまた、ボウリングブームの発生条件となっていた。特に特徴的だったのは、女性ボウラーがスターとして演出され、ボウリングという種目が華やかなイメージで語られていったことであった。これはブームの発生条件として機能したもの、次第に逆に終息の条件と変わっていく。すなわち、女性プロボウラーは次第に「色気の中山律子」などのようにスポーツとは離れた部分で演出されるようになっていったのだ。こうした演出に人々が飽き始めたことが「見るスポーツ」の面でのボウリングブーム終息の条件となつた。

ボウリングブームの発生／終息条件

	発生	終息
社会条件	レジャー スポーツ	「レジャーブーム」 スポーツの大衆化
関連団体の動向	JBCと場協会の協調	JBCと場協会の対立
種目特性	「するスポーツ」 「見るスポーツ」	手軽さ 単調さ 女性ボウラー人気
		女性ボウラー人気の終焉

3. ブームの果たした役割

レジャーに対するインパクトとしては、まずレジャー産業のモデルとなった点があった。つまり「ポストボウリング」という語が作られたように、ボウリングがブームとなることで、レジャー産業の1つの成功例として認識されるようになったのである。また国民に身体運動的レジャーという行動様式を導入した点も、ボウリングブームの果たした役割であった。肉体労働中心だったそれまでの社会では、自由時間とはすなわち身体を休める時間であったが、労働形態が変化し頭脳労働者が増加すると、自由時間に身体運動が必要とされていったのである。ボウリングブームはそうした身体運動を伴うレジャーの先駆けだった。

また、スポーツに対して与えたインパクトとしては、レジャーのスポーツ観を導入した点が挙げられる。従来の日本における「スポーツ」とは、はじめて精神・身体訓練のためのものであるという考え方方が強かった。ところがボウリングという「社会スポーツ」³⁾が、ブームとなって全国に広がることによって、国民の持つ「スポーツ」という概念に対して変化が起こったのである。関連団体の動向で見たJBCと場協会の対立の本質は、JBCが「はじめさ」を中心とする旧来のスポーツ観を支持したのに対して、場協会がより「楽しさ」を中心とするスポーツ観を支持した点にあった。このようにボウリングブームという現象は、「スポーツとは何なのか」という問題を提起した点で、大きな意義があったと考えられる。

²⁾ 主な研究は、以下のとおり。

江刺正吾・荒井貞光・近藤衛、1971、「ボウリング人口増大の要因に関する事例研究」『九州大学体育学研究』第4巻第4号。

石川弘義[編著]、1979、『余暇の戦後史』東書選書。

杉本厚夫、1988、「スポーツと流行」森川貞夫・佐伯聰夫[編]『スポーツ社会学講義』大修館書店。

³⁾ 当時用いられた語で「非常に幅の広い年齢層に容易に愛好され、大衆的な娯楽性を内蔵しているスポーツ」などの意味を持っていた。

帰化選手に描かれる日本人の「境界」
 ~サッカーでの言説を事例として~
 Boundaries of Japanese identity:
 A discourse analysis of press coverage of naturalized soccer player

早稲田大学大学院人間科学研究科修士課程
 Graduate School of Human Sciences,
 WASEDA University
 池端宏之
 IKEHATA Hiroyuki

はじめに

日本において帰化者は、1993年に1万人を越えて以降、毎年1万5千人を前後して推移しており、新たな「日本人」が毎年生み出されている。しかし、帰化に関する研究について、熊谷史は研究の蓄積が進んでいないと指摘する。その原因として、熊谷は国籍業務の管轄である法務省の情報開示の遅れと、日本社会の「單一民族」志向、帰化をタブー視する社会的な規範が定住外国人の側にあったことなどを挙げている。

スポーツにおける「帰化者（帰化スポーツ選手）」に関して、千葉直樹はラモス・瑠偉と呂比須ワグナーを手掛かりとして、両者が「日本人以上に日本人らしい」と語られていると論じ、そういう姿が逆に日本人のナショナリズムを強化すると指摘するなどいくつかの先行研究は見られるが、スポーツにおける「帰化者（帰化スポーツ選手）」に関する研究も、日本における帰化に関する研究と同様に非常に少ないといえる状況である。

目的

本研究ではスポーツ選手という背景を有した帰化者を論じる。日本へ帰化した帰化者は、サッカーにおいてだけでも、1970年に日本に帰化した吉村大志郎（ネルソン・吉村）から、2003年に帰化した田中マルクス・鶴莉王まで10名以上存在しており、現在の日本代表にも帰化者が活躍中である。

本研究の目的は、帰化選手の言説を手掛かりとして、帰化選手に描かれる「日本人」の「境界」を明らかにすることである。言説を分析の視点として、当時の社会が「日本人」の「境界」をどこに見出していたのかを分析する。

研究方法

本研究では、分析対象として株式会社ベースボールマガジン社が刊行している『サッカーマガジン』における言説を取り上げ、分析を行なう。『サッカーマガジン』を分析対象として選択した意義は、1966年に日本で最初のサッカー専門誌として発刊されており、歴史が古く、多数の言説を見していく事が出来ると考えられる点である。

背景

日本人の「血」を有していた日系ブラジル人は、日本政府が奨励していた移民事業を背景として誕生した。日本人が移住を目的としてブラジルへ渡航したのは1908（明治41）年のことであり、1908年以降、戦前の1932年、1933年を絶頂期として戦前だけで19万人、戦後には6万人の合わせて約25万人がブラジルへと移住した。移民事業の背景として日本国内の農地の不足があり、移住した者の多くは農家の次男、三男など家から引き継ぐ土地を持たない者たちであった。サンパウロ人文科学研究所の調査によると、移住者の95パーセントは出稼ぎとしてブラジルへ移住したとされ、永住の意志を持ってブラジルに移住した日本人は非常に少なかった。永住の意志が無かったにも関わらず、結果として永住することになった背景としては、当初考えていたよりも収入が上がらなかつたこと、日本が太平洋戦争に敗れた事が指摘されている。

こうした日系ブラジル人の歴史が、時を経て帰化スポーツ選手の受容の背景として大きな役割を果したと考えられる。

帰化及び国籍付与に関する既存の研究

日本における帰化行政について論じた前掲の熊谷は、日本における帰化者を「後天的」日本人であると指摘している。帰化とは行政行為によって国籍が付与されることであり、T.ハンマーは国籍とは国家による「仲間遊び(co-operation)」に基づくものであると論じている。また、熊谷は、帰化申請において行なわれる調査では「日本人としてふさわしい人間性」が問われると指摘し、国家によって「想像され」た基準に基づいて付与されていると指摘する。

「想像され」た基準に基づいて、という指摘が示唆するように、国籍という概念は全ての国家で共通する概念ではなく、国籍付与の原理は「血統主義」と「出生地主義」の二つに大別出来る。日本においては、国籍法第二条第一項において「出生の時に父又は母が日本国民であるとき」と定められているように、「血統主義」に基づいて国民を定義している。

熊谷は「血統主義」に基づき国籍を付与している日本においては、帰化者というものは「血統」によって「日本人」性が担保されないため、日本人らしい「人間性」が徹底して調査されると指摘し、日本への帰属意識が具体的で安定的でなければならないと論じている。本研究で論じる吉村は日本人の「血統」を有していたが、「血統」とともに日本人らしい「人間性」が「日本人」性の担保として描き出されていた。

日本では「血統主義」に基づき国民を定義し、帰化申請者が「血統」が無いが故に徹底して調査されることが示すように、日本において国民を考える際には「日本人の血」というものが大きな要因として意識されている。「日本人の血」が重要視されることに対して吉野耕作は「日本人の血」とは想像上の概念を通して社会的、文化的に構築された「シンボル」に過ぎないが、「日本人の血」によってアイデンティティをめぐる安定感が促進されるとしている。「シンボル」としての「日本人の血」の持つ影響力は、本研究で論じる日系ブラジル人としての出自を持つ帰化者における言説においても見られ、そこからも「日本人の血」の持つ「シンボル」性が指摘出来る。

本研究で論じる吉村大志郎（ネルソン・吉村）は、日本のサッカーにおける最初の外国籍選手であり、最初の帰化選手であった。吉村という姓が示唆するように、吉村は日系ブラジル人であり、「日本人の血」を有していた。吉村が最初の外国籍選手であり、帰化選手であった背景として、「日本人の血」を有していたことが考えられる。福岡安則は、日本社会の一般構成員達が移民の二世、三世に対して「やはり同じ日本人だ」というイメージを抱いていると論じているが、こうした意識が存在していたことが、吉村の受容の背景として挙げられよう。

※尚、語句の説明、詳細な分析に関しては当日の報告で行なう。

【主要参考文献】

- 梶田孝道, 1996, 『国際社会学のパースペクティブ』 東京大学出版会
- 熊谷史, 2004, 「帰化における「日本人」像の構築—日本の帰化行政に関する一考察」『社会学研究科年報』第11巻, pp. 133~146
- 千葉直樹, 海老原修, 1999, 「トップ・アスリートにおける操作的越境からのシークレット・メッセージ」 『スポーツ社会学研究』7号, pp. 44~54
- 千葉直樹著, 『日本人以上に日本人らしい』と呼ばれた越境者～ラモス・瑠偉と呂比須ワグナー～, 海老原修編, 2003, 『現代スポーツ社会学序説』, 杏林書院
- ハンマー, トーマス, 1999, 『永住市民と国民国家 定住外国人の政治参加』 明石書店
- 福岡安則, 1993, 『在日韓国・朝鮮人－若い世代のアイデンティティ』 中公新書 1993
- 宮尾進, 2002, 「ブラジルの日系社会論集 ボーダレスになる日系人」 『ブラジル日本移民百周年記念人文研究叢書第一号』 サンパウロ人文科学研究所 2002
- 吉野耕作, 1997, 『文化ナショナリズムの社会学 現代日本のアイデンティティの行方』 名古屋大学出版会

Jリーグにみる在日コリアンの民族アイデンティティ

Ethnic Identities of Korean-Japanese Players in the Japanese Professional Soccer League

千葉 直樹（浅井学園大学短期大学部）

Naoki Chiba (Asai Gakuen College)

1. 序論

グローバル化する社会のなかで、昨今、移民の問題や多様化する民族アイデンティティへの関心が高まっている。このような問題を検討する上で、「在日コリアン」は格好の題材を提供している。在日の呼称には、「在日朝鮮人」、「在日韓国・朝鮮人」など様々な呼び名があるが、本研究では、朝鮮半島出身者やその子孫、日本国籍を保有する韓国・朝鮮系の人々を在日コリアンと呼ぶ。

スポーツ界では、これまで数多くの在日コリアンが活躍してきた。たとえば、戦後間もない頃に日本中を熱狂させたプロレスラーの力道山や、プロ野球の張本勲氏や金田正一氏などがいる。多くの在日コリアンは、力道山のように差別を回避するために、民族的出自を公表してこなかった。彼らは、日本社会において誰もが知っているながら本当はあまり知られていない、「不可視な存在」であると指摘されている（野村、1996）。

在日コリアンに関する差別は、過去の話として片付けることができるのだろうか。最近のスポーツ界では、プロボクサーの洪昌守（徳山昌守）やヴィッセル神戸の朴康造のように、出自を公表する者が増えてきた。しかし、こうした選手は朝鮮学校の出身者が多く、日本の学校に通っていた者が公表する例は少ない。したがって、在日を取り巻く差別の問題は現在もあるといえるだろう。

これまで社会学や文化人類学の分野で、在日コリアンに関する問題は数多く研究されてきた（福岡、1993；原尻、1998）。さらに、何人かのジャーナリストは、在日コリアンのスポーツ選手について興味深い著書を出版してきた（野村、1996；矢野、1995；崔、2002）。一方で、スポーツ社会学の研究者は、在日コリアンの問題を禁忌（タブー）として研究しない傾向にあった。したがって、この研究テーマに関する業績は十分に蓄積されていないので、様々な研究設問をあげることができる。たとえば、在日コリアンのスポーツ選手は、どのような民族アイデンティティを形成してきたのか。彼らは、日本の住民比率において、少数民族であるにもかかわらず、なぜスポーツ界で優れた業績を残すことができたのか。本研究では、在日コリアンへのインタビュー調査を通して、これらの設問のいくつかに答える。

本研究では、在日にとて特別なスポーツであるサッカーに焦点を絞る。野村（1996）は、1960年代から70年代にかけて、在日朝鮮蹴球団というサッカーチームが、日本国内で無敵の強さを誇り、朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）の代表チームに、少なくとも7選手を輩出してきており、Jリーグや日本代表チームにも、韓国・朝鮮系の選手が多いことを指摘している。

本研究では、一流サッカー選手の民族アイデンティティと競技者としての成功の間に何らかの関係があるのか調査する。さらに、差別された経験や在日三世・四世の民族意識、日本と北朝鮮のスポーツ文化の違いについて聞き取りを行う。

2. 研究方法

本研究では、2004年3月から2006年8月にかけて、在日コリアンのJリーグ経験者5名にインタビュー調査を行った。4名は現役のプロサッカー選手であった。一方で、1名はインタビューを行った時点では引退しており、サッカーの指導者をしていた。Jリーグに所属する在日コリアンは、名前と出身地から判断すると、2006年シーズンに10名であった。全選手の所属球団に調査依頼を行ったが、いくつかのクラブからインタビュー調査の依頼を断られた。質問の内容は、国家への帰属意識や民族アイデンティティ、差別された経験、Jリーグの特別選手枠、マイノリティのプロサッカー選手とし

ての体験などである。

4名の現役選手は全員在日三世で、朝鮮学校の出身者であった。2名は日本の大学に進学した後、北朝鮮サッカー代表チームで活躍した。彼らには、代表選手としての経験や、日本と北朝鮮の間にあるサッカー文化の違いについて聞き取りを行った。残りの2名は朝鮮大学校の出身者であった。

3. 結果及び考察

現役の4選手は子どもの頃から朝鮮学校に通い、朝鮮人としての民族教育を受け、本名を名乗り生活してきたので、在日コリアンとしての民族アイデンティティに誇りを持っていた。したがって、彼らは日本国籍を取得するつもりではなく、在日同胞のために日本社会で活躍したいと考えていた。在日コリアンのサッカー選手にとって、北朝鮮代表チームに入ることは大変名誉なことであり、彼らは代表チームでプレーすることを目標にしていた。

代表経験のある2選手は、チームに合流した当初、言葉の問題もあり、うまくチームになじめなかつたと述べていた。しかし、練習や試合を重ねるなかで次第に打ち解けて、遠征が終わる頃にはチームの一員になることができたと語っていた。代表チームと日本の所属チームの間には、先輩・後輩の上下関係の面で大きな違いはなかった。北朝鮮代表の選手は、身体能力に優れる一方で、日本人の選手は技術レベルが高いと話していた。

北朝鮮代表としてプレーした選手は、日本人サポーターから差別的な発言を受け、所属チームのホームページ上で誹謗中傷されたことを語っていた。朝鮮大学校出身の選手も、大学の試合の時に、対戦チームから心無い野次を浴びせられたと述べていた。以上のことから、在日のスポーツ選手を取り巻く差別の問題は根が深いといわざるを得ない。

在日コリアンが日本スポーツ界で優れた活躍をできた理由について質問をすると、子どもの頃から親や周りの人々から、「日本人には絶対に負けるな」と言われてきたので、精神的に強くなつたのではないか、と回答する選手がいた。ただ、親の世代の在日二世ほど日本人への対抗意識を表に出す訳ではなく、闘志を内に秘めていたと語る選手がいた。また、遺伝的な要因から在日コリアンの優秀さを説明する者もいた。

Jリーグ各チーム1名と定められた特別選手枠（日本の高校か大学を卒業した者は、外国人でも各チーム1名だけ登録できるという規約）について質問をすると、4名の現役選手は枠の存在自体に感謝する一方で、さらに拡大してもらえば在日選手の可能性が広がると述べていた。

1名の引退したJリーグ経験者は、日本の学校に通い、通名で生活してきた在日四世であった。彼は、学生時代に家族と一緒に日本国籍を取得していた。「日本人」のなかで生活するなかで、劣等感を持つこともあり、辛い少年時代を過したと話していた。以上のことから、朝鮮学校に通うか、日本の学校に通うかによって、民族意識に大きな違いが生じることが示唆された。

付記

本研究は、トヨタ財團の2003年度研究助成を受けて行われた研究成果の一部である。

参考文献

- 崔仁和（2002）『AWAYに生まれて』集英社
- 福岡安則（1993）『在日韓国・朝鮮人』中公新書
- 原尻英樹（1998）『「在日」としてのコリアン』講談社現代新書
- 野村進（1996）『コリアン世界の旅』講談社
- 矢野宏（1995）『在日挑戦』木馬書館

The Cultural Implications of Sports movie in Native Taiwanese

~With movie (My Football Summer) for example~

NTNU Wang Szu Hong

ABSTRACT

The purpose of this research is to present the cultural implications of Native Taiwanese in the sports movie, with aspects of Native Taiwanese education, related policy of the hygiene and employment; This research is based on the movie (My Football Summer).

The cultural implications that the Native Taiwanese present in (My Football Summer):

1. Socialization.

Socialization could be achieved by joining the football team.

2. Agent of socialization.

School's football team has a big influence on students regarding the learning role

3. Significant other.

The viewpoint of judgment, behavior of the teacher, director, and coach, has influenced others of essence, role, and behavior. The Significant others could be the role model

4. Dominant american sports creed.

In the movie, the director requires the entire football team member to obey discipline.

5. Competition.

In the movie, the players attended the national junior high school sports games, football stanza in Asia, through various competitions, the victory or defeat of the decision game.

6. Flow.

The players even spend their leisure time on playing football on the street; kick football in the seaside and practice football on the drill ground of the mire, seeming to become addicted.

7. Ephemeral role.

They are players on the football games, but in reality they are still students.

8. Symbolic refuge.

With different aspects of pressures including, graduation of the basic achievement test, and many uncertainty after graduated, football team never gave up the sport.

9. Culture of risk, pain, and injury.

In the game, pain and injury may occur but players still refuse to quit.

10. Normalization of pain and injuries.

There is one team member in the film with a abnormal shape of bone caused by football practicing but the member still refuse to stop.

11. Macho.

During competition, the coach would encourage contestant by shouting out words like "be tough, work harder"

12. Sport ethic.

The center value and the standard of the exercise could be seen in the movie.

13. Antagonistic cooperation.

Even though all the young contestant are friends, arguments about chances of being in the game could still be seen.

14. Aversive socialization.

One of the characters in the movie has height disadvantage costing him to be the team's photographer for 2 years.

15. Role conflict.

While wanting to be both sides of student and athletic, pressure and conflict will arise.

16. Role strain

Several of the contestants in the slice are grown up in single parent family, and they have to take the responsibility of looking after the family, and take care the studies, and the skills at the same time.

17. Sport specialization.

After these kids joined football team, they have to participate in the trainings, practices, and competitions through the whole year.

18. Racial minority group.

The native Taiwanese in nowadays society, the position compared to promote before, but still belonged to a flock of the minority.

Key Words: Native Taiwanese, (My football summer), Cultural implications

大相撲における女人禁制の研究 5
 一平成 17・18 年 9 月東京場所観戦者の比較－
 A Survey of Nix Women in the Sumo Ring 5
 -A comparison Spectators between 2005 September Tournament and 2006 September Tournament-

○了海 諭 (東海大学) Satoru Ryokai(Tokai Univ.)
 生沼 芳弘 (東海大学) Yoshihiro Oinuma(Tokai Univ.)
 山本 恵弥里 (東海大学) Emiri Yamamoto(Tokai Univ.)

1.はじめに

平成 19 年（2007）の大相撲初場所は、横綱・朝青龍の 4 場所連続 20 回目の優勝で幕を閉じた。優勝 20 回は史上 5 人目、初土俵から 49 場所目での到達は史上最速、26 歳 3 カ月での到達は 3 番目に若いなど、多くの記録が更新された優勝でもあった。こうした記録達成がかかるなか、「満員御礼」は初日・7 日目・8 日目・13 日目・14 日目・千秋楽の計 6 日間出されている。

大相撲が興行として成功するかどうか、それには観戦者数の増減が大きく影響する。観戦者を確保するため、伝統であった絢席での喫煙を禁止するなどの試みを続けているが、近年とりあげられた大きなテーマとしては、女性が土俵に入ることを禁ずる女人禁制があげられる。平成元年（1989）に当時の森山真弓官房長官が内閣総理大臣杯の授与を申し出、平成 12 年（2000）には太田房江大阪府知事が大阪府知事賞の授与を申し出たが、どちらも日本大相撲協会により断られている。この件に関し、朝日新聞は平成 12 年¹⁾と 16 年²⁾に同問題に対し調査を行っているが、対象は大相撲観戦者ではなかった。そこで筆者らは大相撲協会の了解のもと、大相撲観戦者に対し、大相撲における女人禁制に関する調査を行ってきた。この調査は平成 15 年 11 月福岡場所 7 日目、平成 16 年 1 月東京場所 7 日目、3 月大阪場所 7 日目、5 月東京場所 7 日目、7 月名古屋場所 11 日目、11 月福岡場所 10 日目、平成 17 年 1 月東京場所 12 日目、9 月東京場所 9 日目、平成 18 年 9 月東京場所 4 日目の計 10 回行われている。

9 回目までの調査では、調査場所・調査日が統一されていなかったため、結果を単純に比較することはできなかった。しかし、平成 17 年および 18 年の九月東京場所において、それぞれ 4 日目・9 日目と平日での調査ができたため、ここでその調査結果を発表したい。本研究では、大相撲観戦者の基礎データに関して取り扱うこととする。

2.大相撲観戦に関する先行研究

昭和 32 年（1957）に和歌森太郎が調査を行っている³⁾が、この調査は 1 場所の初日、2 日目、3 日目だけの調査であり、本人がその報告の中で「これをもって相撲観客の傾向を云々することは、いさか早計のそりをまぬがれない」⁴⁾と言っているように、大相撲観戦者の動向を図る継続した調査ではなかった。

筆者らは大相撲協会の了解のもと、2003 年から大相撲観戦に関する調査を開始し、大相撲における女人禁制の研究として継続した調査・報告を行っている^{5) 6) 7) 8)}。

3.調査方法及び内容

本調査では、平成 17 年（2005）9 月（東京場所）、平成 18 年（2006）9 月（東京場所）において観戦者数及び大相撲観戦に関する質問紙調査を実施した。

観戦者数の調査は、各入り口にカウンターを持った調査員を配置し、男女それぞれの観戦者数を 30 分ごとに集計した。質問紙による調査内容は大相撲観戦・観戦者自身・大相撲の女人禁制などの伝統に関する意識に関してのものである。

調査会場及び調査日、質問紙配布数及回答数は以下の通りである。

場所	会場	調査日	配布数	回答数	回収率
平成 17 年東京場所	国技館	9 月 12 日（月）9 日目	300	177	59.0%
平成 18 年東京場所	国技館	9 月 13 日（水）4 日目	300	190	63.3%
		合計	600	367	61.2%

そこで、今回は大相撲観戦者の基礎データを中心として、以下の項目について単純集計後、男女別に分けてクロス集計を行った。

1) 大相撲観戦者の基礎データ

(1) 観戦者数 (2) 30 分ごとの入場者数

2) 大相撲観戦について

(1) チケットの入手方法 (2) チケットの種類 (3) テレビ観戦の回数（本場所の放送及び NHK 大相撲ダイジェスト）(4) 国技館までの所要時間

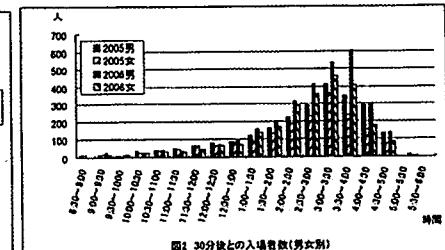
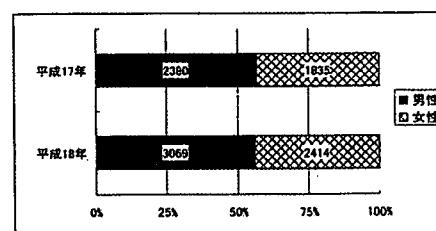
3) 観戦者自身について

(1) 年齢 (2) 性別 (3) 婚姻関係 (4) 職業

4.調査結果

1) 各年度における観戦者の男女比は図 1 のとおりである。

2) 30 分ごとの入場者数は図 2 のとおりである。



3) 上記調査結果の詳細は紙面の関係上、当日の発表会場で明らかにする。

引用・参考文献

- 1) 朝日新聞朝刊, 2002/2/24, 14 頁
- 2) 朝日新聞 be on Saturday『be between -女性と土俵-』, 2004/3/6
- 3) 和歌森太郎, 1957, 「大相撲観客調査結果報告—夏場所観客の生態と表情をさぐるー」『相撲』昭和 32 年 8 月号, ベースボールマガジン社, 203-222 頁
- 4) 和歌森太郎, 同上, 222 頁
- 5) 了海諭・生沼芳弘・山本恵弥里, 2005, 「大相撲における女人禁制の研究 1-大相撲観戦者の男女比-」, 日本スポーツ社会学会第 14 回大会抄録集, 50-51 頁
- 6) 山本恵弥里・生沼芳弘・了海諭, 2005, 「大相撲における女人禁制の研究 2-観戦者の意識に関する事例-」, 日本スポーツ社会学会第 14 回大会抄録集, 52-53 頁
- 7) 生沼芳弘・了海諭・山本恵弥里, 2005, 「大相撲における女人禁制の研究 3-外国人観戦者の意識-」, 日本スポーツ社会学会第 14 回大会抄録集, 54-55 頁
- 8) 山本恵弥里・生沼芳弘・了海諭, 2006, 「大相撲に関する女人禁制の研究 4-観戦者の年代別による意識の傾向-」, 日本スポーツ社会学会第 15 回大会抄録集, 76-77 頁

大相撲における女人禁制の研究 6 一平成 18 年（2006）九月東京場所の観客意識調査一

A Survey of Nix Women in the Somo Ring 6

—The case of The 2006 September Tournament Spectators' Opinions—

○生沼 芳弘（東海大学） Yoshihiro Oinuma (Tokai Univ.)

了海 諭（東海大学） Satoru Ryokai (Tokai Univ.)

山本 恵弥里（東海大学） Emiri Yamamoto (Tokai Univ.)

I. はじめに

2007 年 1 月 28 日に東京・国技館であった大相撲松ヶ根部屋の元幕内力士春ノ山（30）の断髪式で、女人禁制の土俵の脇で元大関若鶴洋の松ヶ根親方夫人のみづえさんが力士の頭にはさみを入れた。相撲協会には土俵に女性を上げない不文律があるため、この日は土俵のすぐ横に金びようぶの特設台を設けた。特設台の壇上で髪を切った約 420 人のうち、女性は約 130 人であった。国技館内でも土俵から離れた大広間や各相撲部屋などでの断髪では女性が加わる例があるが、今回のようなケースは初めてである。元大関若鶴洋の松ヶ根部屋では「応援してくれるのに男も女もない」と恒例で女性も断髪に参加してきた。春ノ山本人の希望もあり、最後に師所がまげを切り落とすときだけは土俵に上がった。（朝日新聞朝刊、2007/01/29）

大相撲の土俵における女人禁制に関する調査は、平成 15 年（2003）8 月に太田知事より筆者に依頼があり、筆者が協会の了解を取り付け同年 9 月 17 日に東京場所 11 日目の両国国技館で男女観客数の調査を行ったのが最初であった。その後、女性を土俵に上げるかどうかの是非を問う調査は平成 15 年 11 月福岡場所 7 日目・平成 16 年正月東京場所 7 日目・3 月大阪場所 7 日目・5 月東京場所 7 日目・7 月名古屋場所 11 日目・11 月福岡場所 10 日目・平成 17 年正月東京場所 12 日目・9 月東京場所 9 日目と計 9 回行われた。

本研究は、大相撲の土俵における女人禁制について広く国民の意見を聞くための 10 回目の調査であり、平成 18 年（2006）9 月 13 日水曜日、大相撲東京場所 4 日目の観客に行ったアンケート調査の結果報告である。

II. 調査方法

両国国技館で行われた大相撲九月東京場所四日目、平成 18 年（2006）9 月 13 日水曜日の総観客数は 5483 名、男性 3069 名（56.0%）・女性 2414 名（44.0%）であった。国技館の定員が 11060 名であるので、この日は約半数の入りであった。調査票は 300 部用意し、国技館の入り口付近で返信用封筒を添えて配布した。配布方法は、開場 8:30 から正午までの男女それぞれ 5 名に 1 部ずつ配布、正午から 4:00 までは男女 10 名に 1 部ずつ配布した。回収は入り口付近と臨時出口二ヶ所で行い、回答いただいた人には粗品として番付を差し上げた。当日回収できた調査票は 152 票、後日郵送されたものが 38 票、従って有効回答調査票は 190 票、回収率は 63.3% であった。

III. 調査結果

1. 回答者の概要

回答者 190 名の性別は男性が 103 名、女性が 81 名、無回答 6 名であった。平均年齢は全体が 50.43 歳 (SD:15.95)、男性 51.98 歳 (SD:16.26)・女性 48.46 歳 (SD:15.43) であった。週末や祭日は若い人が多いが、平日は平均年齢が高い。回答者の年齢層は 60 歳代が最も多く、定年後の時間に余裕のある世代であった。回答者の自宅は東京都が最も多く 73 名（38.4%）、次いで神奈川県の 37 名（19.5%）、以下埼玉県 27 名（14.2%）、千葉県 25 名（13.2%）、計 162 名（85.3%）が上記首都圏であった。回答者の約三割（57 名）は、本日が初めて大相撲の本場所を観戦であった。また、回答者の約半数（86 名）は二人連れて、36 名が 1 人で大相撲の観戦に来ていた。

2. 土俵の女人禁制

女人禁制に関する 11 項目について、男女別に分けて集計を行った。

1) セレモニーで女性が土俵に上ること（表 1）

「セレモニーで女性が土俵に上ること」について、賛成は 54 名（30.7%）、反対は 122 名（69.3%）であった。平成 16 年（2004）の調査では反対が 59.1% であったので、約 10 ポイント反対が増えた。平成 17 年 9 月の調査「表彰式に女性知事が土俵に上ること」では 53.8% が反対であった。

表 1. セレモニーで女性が土俵に上ること

	男性	女性	合計
1 全く賛成	11	10	21
2 どちらかというと賛成	20	13	33
3 どちらかというと反対	34	26	60
4 全く反対	33	29	62
合計	98	78	176

3) 女性が天皇になること

「女性が天皇になること」については、賛成が 122 名（70.5%）、反対が 51 名（29.5%）であった。平成 16 年（2004）の調査では 16.3% が反対、平成 17 年 9 月の同じ調査では 14.9% が反対であり、この 1 年で約 15 ポイント女性天皇の反対者が増えた。

6) 表彰式だけならかまわないのではないか

「表彰式だけならかまわないのではないか」については、86 名（50%）が表彰式だけならかまわないとしている。平成 16 年（2004）の調査「表彰時にだけ女性が土俵に上ること」では、52.8% が反対していた。

3 大相撲の伝統

大相撲の伝統その他に関する 8 項目について、男女別に分けて集計を行った。

1) 外国人力士が増えること

「外国人力士が増えること」については、104 名（57.5%）が賛成している。平成 16 年（2004）の調査では 52.5%、平成 17 年 9 月の調査では 51.2% で、女性の回答者は反対が賛成を上回っていた。今回の調査で初めて、外国人力士に賛成する女性回答者が過半数となった。

調査結果の詳細は紙面の関係上当日の発表会場で明らかにします。

IV. まとめ

大相撲の観客は土俵の女人禁制において以前より保守化（男女差別化）したといえる。また、女性が天皇になることの反対者が 15 p も増えたのは、調査の一週間前の 9 月 6 日、秋篠宮家に待望の男子（悠仁親王）が誕生し、女人禁制の象徴である我が国の男系男子天皇制存続の危機（女性天皇）が 41 年ぶりに回避されたことがその一因と推察される。

唯一「表彰式だけならかまわないのではないか」の賛否がイーブンとなった。しかし、全くそう思う（全くそう思わない）のポイントをそう思う（そう思わない）の 2 倍に換算すれば、110 対 129 で「そう思わない（反対）」が「そう思う（賛成）」を上回ってしまう。また、昨年まで「外国人力士が増えること」では女性の反対が多くなったが、今回の調査で初めて女性の賛成が過半数を上回った。モンゴルや東欧の外国人力士の活躍が影響していると考えられる。

スポーツの空間／空間のスポーツ

戦前期の都市と国家

研究委員会として標記のような課題を設定しパネル・ディスカッションをもつこととなり、報告者と題目、およびコメントーターは以下のとおりである。

報告 1 石坂友司（筑波大学）

スポーツがつくり出す都市空間：プロジェクトとしての東京オリンピック（1940年）を事例として

報告 2 関 直規（弘前学院大学）

戦間期の社会体育行政と都市空間

報告 3 吉原直樹（東北大学）

戦間期仙台の余暇空間

コメントーター 坂上康博（福島大学）

小澤考人（東京大学）
坂なつこ（一橋大学）

研究委員会で課題をスタートさせるにあたり、初期段階での意見交換では一つには「地域」に焦点をあてたテーマにしたいという点と、スポーツの概念を拡大し「娯楽」にまで視野を拡げると同時に、時間軸を入れた視野から問い合わせ直すという基本的なモチーフがあつた。そこで仮に提案することになったのは、

スポーツ／娯楽の近代化：国民国家と地域社会の「相剋」

という問題設定であり以下のような「趣旨」を示して、報告者を募った。やや長くなるがここに掲げておく。

明治維新以降の、日本の近代化の過程において、スポーツないし娯楽という領域において、国家はどのような「眼差し」を地域社会に対して向けてきたか。また、これを地域社会はどのように受け止めてきたのか。既に地域にあつたものが、どのように維持・改善・消滅されていき、また、推奨されてくる代替物とどのような関係をもってきたのか。

従来では、制度論の文脈から論じられることの多かった「スポーツ政策」や「地域スポーツ」の問題だが、ここでは国家と地域との「相剋」としてとらえようとする。国家はその都度の時代的要請に応じて、住民のスポーツないし娯楽活動を統制しようとしてきた。この側面を強調すれば、地域社会は国民国家の近代化の過程において、常に一定の枠をはめられてきたといえよう。しかし他方で、国民国家に完全に回収されることなく、そのコントロールをすりぬけ、政策を換骨奪胎していく地域社会も想定しうる。

スポーツ政策も国家政策である以上、その都度の歴史的情況に応じて組み立てられてくるのだとすれば、現在のところ話題とされることの多い「総合型」の政策も、現代という時代の産物であるといえる。おそらく、一方でボランティアやNPOに見られる住民参加の動きと、他方でバブル崩壊後の国家財政の逼迫と無縁ではありえないという、時代性をおびているであろう。

このような呼びかけを行ないながら、同時に、東京で2回にわたって事前の研究会を開催した。そこでは以下のような話題提供が行なわれ、活発な論議が展開された。

第1回研究会（2006年12月22日 於筑波大学大塚校舎）

報告 高尾将幸（筑波大学） 戦時下における「体位測定問題」とスポーツ空間
：名古屋市の公園事業を事例として

第2回研究会（2007年1月26日 於日本大学理工学部駿河台校舎）

報告1 小澤考人（東京大学） 現代日本における生活時間から生活空間への展開

：郊外都市・東京都世田谷区における「余暇空間」を中心として

報告2 石坂友司（筑波大学） スポーツがつくり出す都市空間：プロジェクトとして
の東京オリンピック（1940年）を事例として

ここまで経過を見ていると、「地域」に関しては「都市」を事例とした報告が主だったが、さしあたり「都市空間」をめぐるパネル・ディスカッションを金沢で深めることができると期待している。

スポーツから娯楽まで概念を柔軟に広げるという提案も、報告者たちは積極的に受けとめ、社会体育行政や余暇空間が取り上げられる。このように概念を拡大することによって会員以外の隣接領域から刺激を受けるという意義もあるが、さらに重要な点として、それぞれの時代、それぞれの地域における「日常性」や「生活」の問題が浮かび上がってくることがあると思われる。おおまかに捉えれば、戦前期の民衆にとって、いわゆる狭義の競技スポーツは「非日常的」なものであるだけに、たとえば「社会体育」や「余暇」（あるいは「娯楽」など）の概念は、民衆レベルでのより「身近な問題」に接近することを可能とするであろう。

提案趣旨を受けとめて、報告者たちはいずれも「戦間期」（「戦時期」「総力戦時代」「ファシズム期」）を正面から取り上げようとしている。近年は、たとえば近現代史研究の分野でも、この時期の娯楽を扱うことが増えてきているようにみられるが、「戦争体験の意味」を問うことの意義は大きいと考えている。たとえばそれは戦後（あるいは現代）との連続または断絶という興味深いテーマにつながっている。

「地域」といえば「体育・スポーツの社会学」の分野では、これまで「社会体育」「コミュニティ・スポーツ」「生涯スポーツ」「総合型地域スポーツクラブ」といった、その時代の国家政策を軸として研究がなされてきた。しかしこれらの政策から自らを「相対化」し、その社会的・歴史的な意味を問うという作業はいまだ不十分なのではないか。たとえば「社会体育」の行政的取り組みは、すでに戦前にスタートしていたわけだが、その生成や展開の過程（「戦争体験」）を自省的に問い、総括したうえで戦後から現代にいたる政策がとらえられてきたであろうか。各報告者は直接には「戦後への連続あるいは断絶」の問題を議論するものではないとしても、当学会への大きな刺激を与えてくれるに違いない。（文責：中島信博）

スポーツがつくり出す都市空間 ——プロジェクトとしての東京オリンピック（1940年）を事例として——

筑波大学 石坂友司

近年、戦前・戦中の分析、いわゆる戦時体制論が盛んである。そこにはいくつかの要因があげられるが、現代との同時代性を読みとるもの、あるいは戦前・戦後のさまざまな枠組みが実は戦時体制において成立したとする大きな転換点を読みとり、そこからの連続性を読みとろうとするものなど、新たな研究動向が見いだされる。これらの諸研究は戦前にとどまらず、「いま」を見通す問題意識を共有する。

これら一連の研究動向は、戦時下体制の特徴をなすとされる政官民一体のイベント開催について、これまで多くの研究によって描かれた像、すなわち、国家権力によって一方的に自由を奪われ、統制を加えられた人びとや、その文化的ありようについて見直しを迫る。戦前から戦中にかけての時代状況は単なる「暗い谷間」の時代だったのではなく、さまざまな領域で「文化創造の営み」があり、一定の成熟がみられた時代でもある（赤澤史朗・北河賛三編、1993、『文化とファシズム』、日本経済評論社）。そこで重要なテーマとして浮上してきたのが、政官民一体のイベントにおける国家権力による統制と自主性擁護の対抗という基軸、さらには下からの能動的参加やそれらの強調的増幅効果がいかにしてなされるかという問題である（津金澤聰廣・有山輝雄編、1998、『戦時期日本のメディア・イベント』、世界思想社）。国家権力による統制をかいくぐる主体はどうに形成されるのか、あるいはどのようにして内部に包摂されていくのかという問題を問い合わせる視角が要求されている。

ベルリン・オリンピックに代表されるように、戦前もともと有効な「文化国策」の一つとして認識されるに至ったイベントとしてのスポーツは、国民的統合に関するさまざまな仕掛けをともないその重要性を増していく。そのような歴史的展開のゆえに、「国家権力による統制とそれへの適応・対抗」、という基軸から問われるべきスポーツをめぐる戦時下的研究は、いくつかの先行研究を除いて、テーマとしてまったく放逐されてきたといつても過言ではない。これは連字符の社会学の分業意識による欠落ともいえようが、スポーツ社会学の一つの重大なテーマとして引き受けいかなければならない。

一見すると単純な二項対立に還元されかねないこの図式は、国民国家と権力の問題について、これまでのスポーツを題材とした先行研究に見直しを迫っている。これまでの先行研究はスポーツ界が国家権力と積極的に手を結んできたことを指摘し、糾弾するか、上からの統制に自由を奪ってきたことを嘆くにとどまってきた。また、その問いは通史的に記述されることで解消され、必ずしも共時的な時代状況を深く掘り下げてきたとはいひ難い。したがって、本報告では以上のような国家権力による統制とスポーツとの関わり合いを論じるために、それが生起する一つの空間としての都市から論を始める。

歴史学者の成田龍一は、戦時体制遂行のためになされる動員と組織化について論じながら、合理的、均一的な都市の建設を目指す「都市空間の制度化」という問題がそれらを規定していると指摘する（成田龍一、2003、『近代都市空間の文化経験』、岩波書店）。成田は日本の近代を問い合わせる視点として都市を焦点化し、都市史を記述する試みのなかで以下の方法論的視角を提示した（伊豫谷登士翁・成田龍一編、2004、『再魔術化する世界』、御茶ノ水書房）。第1に、さまざまな装置をもち、資本や人口が集中したり集積したりする場所=空間、すなわち、人びとが集積する境界をもつ「空間」としての都市という視点。第2に、都市に住んでいる人びとの多様性への着目、あるいは、都市が備える装置が惹起する問題に対応し、対抗する主体としての市民や住民への着目を意味する都市（=空間）

における主体の問題である。

本シンポジウムが目指す「スポーツ・娯楽の近代化—国民国家と地域社会の『相剋』—」というテーマを考えたとき、まずは「都市空間の制度化」とスポーツがつくりだす空間=「スポーツ空間」の関係性を問う視角が必要となるだろう。それにはさしあたって、歴史社会学的な視点から成田の問題設定を敷衍することが可能である。すなわち、合理的、均一的な都市空間が形づくられていいくなかで、スポーツがどのように位置づき、規定されていくのかについて、都市空間における「スポーツの制度化」の問題としてとらえ返すことである。

次に問われるのは、「都市空間の制度化」にスポーツが位置づけられたとき、そこに携わる人びと、あるいは都市における住民がどのように適応し、時には対抗していくのかということを、さまざまな主体の展開を視野におさめて明らかにすることである。

以上の作業は、都市空間の中にスポーツの果たす役割・位置を見定めたにすぎない。スポーツ空間というものを指定したとき、スポーツ空間は都市空間のなかに位置づくとともに、都市空間をつくりだすという意味で相補的な関係を築いていると考えられる。戦時下のスポーツ空間がどのようなものであったのか、本報告では都市空間との関係性からアプローチしたい。

以上の点から、本報告が照準するのは「幻のオリンピック」と呼ばれる1940年に開催が予定され、返上やむなきに至った第12回東京オリンピックである。関東大震災から復興を果たした東京によって独断的に招致が叫ばれ、やがては大日本体育協会をはじめとするスポーツ界をも巻き込んで展開されたこのオリンピックの招致・準備活動は、紀元2600年の奉祝記念行事の一環として、天皇を中心とした建国記念の奉祝、国威高揚の手段、帝都東京の繁栄を目的としたいくつの政治的意図を背負わされていった。

オリンピックは国家ではなく都市が開催するという前提が、都市に活力を与える。オリンピック開催に向けた動きはオリンピックのための競技場建設や、それに便乗したさまざまな競技場、運動公園の建設にとどまらず、大規模な都市計画として鉄道・道路網の整備、美観の名目で行われる都市の区画整理や住民の排除などが立案・実行されていく。オリンピックの醸し出す「祭り的雰囲気」に注意が向けられるながら、それら一連の都市開発は戦時下における戦時体制遂行のための国家的動員・組織化の範囲をはみ出るものではない。例えば、市街地化抑制のための緑地や公園の新設は防空を目的としたオープンスペースとして整備されていったのであり、運動競技場の建設は厚生省の設置とも相まって、陸軍を中心に体位低下が声高に呼ばれるなかでその妥当性を確保していった。このように、戦時体制遂行に向けた整備が加速するなかで、オリンピックを契機とした都市の制度化はなされていったのであり、オリンピック開催が断念された後も、2600年奉祝記念事業に引き継がれるかたちでこの制度化は展開していったのである。オリンピック返上後に相次いで計画された運動競技場の建設設計画がこのことを実証づける。

一方で、戦時下に突入しようとする緊迫した時代状況を考え合わせれば、オリンピックの開催は生活苦の人びとの日常生活からは全く遊離していたともいえる。ここに国民国家と地域（空間としての都市）の相剋が見いだせる。成田にならえば、オリンピックは戦時体制への合理化という事態を促進させる起爆剤であった一方、そこに住む人びとの主体形成の場でもある。そしてこれを架橋したものは都市の空間であり、スポーツの空間であつたのではないだろうか。

本報告は「都市空間の制度化」がオリンピックを通してどのように達成されていったのか、さらには、スポーツ空間がそこに位置づくさまを、オリンピック返上後の動向を視野におさめながら議論していきたい。そして、戦時下の都市にスポーツ空間が立ち現れる意味を探りながら、国家権力によるスポーツの統制と主体の形成についての見解を最終的には提示したい。

戦間期の社会体育行政と都市空間

The Social Physical Education Administration and Urban Space in the Interwar Period of Japan

関 直 規（弘前学院大学）

Naoki Seki, Hirosaki Gakuin University

I. 問題の所在

報告者は、これまで、社会教育学・生涯学習研究の立場から、東京市における社会教育・成人教育成立史研究に取り組んできた。歴史的に、欧米の成人教育(adult education)は、大学拡張(University Extension)や公立夜間学校(night school, evening institute)の形態に見られるように、学校教育の延長線上に誕生し、フォーマルな性格を帯びている。これに対して、日本独自の概念である社会教育は、学校教育に相対する地域ベースの制度として成立し、ノンフォーマル、インフォーマルな性格が強い。その結果、社会教育は、実際生活に即する柔軟な活動として普及したが、他方で、フォーマルな教育の相対的弱さという歴史的特質を持つことになった。こうした日本の事情の中で、東京市は、同時代の海外の成人教育・労働者教育の動向を調査・研究しながら、市内の専門的人材を登用し、組織的な社会教育事業を国内で先駆的に開発・実施したという点で、検討に値する事例の一つだと考える。

ところで、本報告に与えられている課題は、「戦間期の社会体育行政と都市空間」である。近代化過程において、都市空間の秩序を形成するための規律や規範は、個人の身体を利害と政策の対象としてきたが、学校外で民衆の身体に関わる社会体育行政は、衛生行政が、急性伝染病から慢性伝染病対策へと転換する第一次世界大戦後に始まる。この報告では、日本における社会体育行政の嚆矢である、東京市を担い手とする市民体育の形成と発展のプロセスを明らかにすることを目的とする。

東京市は、1889年の市制町村制から1943年の東京都制施行まで、約半世紀にわたって、国家と地域から様々な制約や要請を受けつつも、両者に折り合いを付け、一定の社会的な影響を与える立場にあった。そして、この地位が、都市化・産業化による大規模な人口の移動と社会変動に直面する中で、国土空間の中核にありながら、生活問題解決につながる独自の社会体育行政の組織化や事業の開発を可能にしたのである。たしかに、従来の先行研究がしばしば指摘するように、社会体育による思想善導や国民教化、軍事的統合という負の側面は批判的検討を要するが、他方で、社会体育をめぐる国家と地域の相克の諸相や、個人の身体と国家の媒体である都市の政策立案・実施過程が考察されることは少なかった。また、東京市の体育職員は、現場を重視した実践家であり、その言論活動の軌跡は必ずしも定かではないとはいえ、そうした担い手の心に目指すものや市民体育の普及に果たした役割が、十分に把握されているとは言えない。

以上をふまえ、本報告では、東京市の市民体育の理念及び実際について、東京市の一次資料を内在的に検討することによって、具体的に解明したい。検討の対象とする時期は、都市問題への対応を主たる要因に、市民体育が構想されるようになつた1920年前後から、日中戦争が始まり、軍事的・国家的見地から、大都市の市民体力強化策が重点課題となる1940年前後までとする。この時期は、一般市民を対象とする体育が、変容する都市空間において文脈を変えながら、学校・軍隊以外の場で、本格的に民衆化していく時代だった。本報告では、特に、①市民体育をめぐる制度や組織の基本的性格、②国家と個人の身体を媒介した体育職員の役割、③都市住民の体育熱と事業の相互関係の観点から、市民体育の成立と展開の過程を歴史社会的に考察する。

II. 結果と考察

後藤新平市長の下、東京市に社会教育課が新設されたのは、1921年4月のことだった。その事務分掌の一つとして、「市民体育ニ関スル事項」が含まれていたことは、知育、德育、体育、情育の四つの教育的侧面から、社会教育を立体的に構想した結果であり、当初から体育への関心が高かったことがうかがえる。その際、「日本あたりでは運動などと云ふことは子供か学校の生徒位な者の違るべきことで、紳士淑女などは運動はせぬものだ、位に思つて居る。ところが健康な身体を持つと云ふことは、生まれてから死ぬまでの、大切なことである。子供でも大人でも、男でも女でも是は常に心掛けて造らなければならぬことである」(大迫元繁・初代社会教育課長「社会生活と社会教育」『社会事業』第5巻第6号、1921年9月、32頁)と、体育を生涯化する観点もあわせ持っていた。

市民体育制度の整備が加速化したのは、関東大震災後だった。帝都復興と個人の身体の強健化が共振し、積極的衛生としての市民体育の持つ価値が高まるのである。東京市は、1924年、三橋義雄と藤本光清を講師として採用し、社会教育課内に「体育係」を設置した。初代体育係長となった三橋は、東京高等師範学校研究科(体操)卒業後、千葉県師範学校を経て、講師に着任した。1933年、教育局体育課発足に際し、体育係長に就き、1940年、市民局体力課長に就任する等、およそ二十年間、東京市体育政策の責任者の立場にあった。なお、三橋は、東京都成立直前の1943年6月に、依頼退職している。

専門的な社会体育論を著しているわけではないが、三橋の体育論は、学校体育の理解に深く達しているながら、学校・軍隊体育とは区別される社会体育の意義と自律性を評価するものだった。そして、諸外国の体育界の視察や研究を通じ、「心理に立脚し又広く人間生活を考慮して運動が組織されねばならぬ」(三橋『世界的新研究に基く今日以後の日本の体操』伊藤書房、1929年、4頁)と、対象の心身の発達や生活に応じた運動指導を志向している。また、三橋は、あらゆる運動の土台として、体操を最も重要視した。実際、「市民体操」や「家庭体操」等の都市民向きの体操を考案し、直接指導にあたる場合も少なくなかった。ここには、自己が自己的身体を配慮・管理する近代体育の論理が反映されている。

以上の総合的な体育論を基本に、各種の事業が計画された。主な事業は、①陸上競技・水泳・球技講習会、②夜間体育実行会、③体育出張指導、④体育講演会、の四つである。①は、短期集中的な種目別の実技指導であり、②は、昼間働く社会人を対象とする体操・遊戯の実践の機会である。地域の小学校を会場に、日常的な運動の場を提供した。他方、③は、要望のあった会社・工場・商店等に、市の講師が出向き、指導するやり方を探った。そして、④は、思想善導というより、体育にまつわる誤謬(例えば、運動選手短命説)を正す機会とされていた。これらの諸事業は1925年度までに出揃い、1930年代を通して、着実に実施されたことによって、体育の民衆化が進むのである。

ところで、人々の好評を得た事業は、戦時下の市民体力強化策の中に消散することはなかった。「最近体育運動の動向が、いはゆる選手万能、観衆本位、競技本位から普遍的な万人が万人誰でもがやれるといふ体育運動へと転換して来た」(東京市教育局体育課「市民の体育」東京市編『市政週報』第7号、1939年5月、5頁)と、広がりと高まりを見せる都市住民の体育熱が指摘されたが、それは、事業の帰結であり、また、その基盤をなしていた。各々の参加者の日常が焼き付ける体育熱と交差しながら、事業の影響は及んでおり、都市空間の秩序を築き上げていたのである。

主要文献

- 東京市社会教育課「市民の体育に就て」都市研究会『都市公論』第5巻第1号、1922年。
東京市役所『市民体操』1924年。
東京市役所『市民体育資料』(社会教育叢書第五輯)1924年。
東京市教育局社会教育課『健康法解説』1927年。
東京市役所『体育事務指針 事務改善叢書其の二』1937年。
三橋義雄他「市民の体力増強を語る会」東京市編『市政週報』第171号、1942年8月。
東京都立教育研究所編『東京都教育史通史編三、四』1996年、1997年。

戦間期仙台の余暇空間

吉原直樹（東北大学）

戦間期仙台の余暇空間を考察するにあたっては、まず総力戦体制期をどう位置づけるかが問われる。この点については、この間、「戦前と戦後」という問題構制の下で、その連續性の地平において地域社会のグライヒシャルトゥング（下降的均質化）の内実が取りざたされてきた。報告者自身、拙いながらも、<時間と空間>という理論地平でこのグライヒシャルトゥングの議論にかかわってきた（吉原 2004）。この理論地平でいうと、戦間期の余暇空間が上述のグライヒシャルトゥングの一翼をにないながら、戦後のいわゆるアメリカニゼーションの水脈をなしてきたのかどうかが、鋭く問われよう。

と同時に、ごく近年、「日常生活の中の総力戦」という問題構制の下で、戦間期の余暇空間のあり様が検討されていることが注目される。この問題構制自体は、アジア・太平洋戦争というより広い文脈での立論構成に拠っているが、特徴的なのは、これまで一元的にとらえられてきた翼賛と動員の体制が、地域によって、また諸主体（生活）によってバリエーションを伴っていることに着目している点である。つまり民衆動員の分節化の内容が浮き彫りにされるのである（倉沢ほか 2006）。そしてこの視点に立つなら、日常生活の中に入り込んだ戦争がグライヒシャルトゥングをおしすすめながら、多様な形態の余暇空間をつくり出してきたことがあらためて問題になってこよう。そして余暇空間にひそむ「日常」と「非常」のせめぎあい、そこに深い影をおとしている「草の根のファシズム」の体験の特異性といったものが検討されることになろう。戦間期仙台というフィールドの設定は、さしあたりこうした問題構制とのかかわりでなされ得るものである。

しかし考えてみれば、「草の根ファシズム」は通時的な側面だけでなく、共時的な側面においても解明されなければならない。そしてこの点に銳意に着目するなら、再び「戦前と戦後」の連続の地平に思いをいたす必要がある。たとえば、近年、安全・安心なまちづくりにかかわって、「ご近所力アップ」というような形での草の根動員が広範囲にみられるようになっているが（吉原 2007）、それが余暇空間に大きく食い込むようにしてなされているという点でいえば、そして現実に「戦時体験」を呼び起すようにしてすんでいることを想起するなら、上述の共時的な側面／連続の地平に視野をひろげることは避けて通れない。

本報告は、上述のような問題視角をゆるやかに共有しながら、さしあたり戦間期の余暇空間の一型態を、仙台をフィールドに据えて浮かび上らせようとするものである。併せて、余暇空間に脚をおろした、身体／スポーツの「戦時体験」のあり様について考えてみたい。なお、具体的な考察は、主に仙台市史編纂資料、東北大学百年史編纂資料などに依拠しておこなう予定である。

文献

- 倉沢愛子ほか編 2006, 『岩波講座アジア・太平洋戦争6 日常生活の中の総力戦』岩波書店
吉原直樹 2004, 『時間と空間で読む近代の物語』有斐閣
——— 2007, 『開いて守る 安心・安心のコミュニティづくりのために』岩波ブックレット

「アジアにおけるグローバリゼーションとスポーツ」

Globalization and Sports in Asia

発表者

- 1) スティーブ ジャクソン（オタゴ大学、体育教育学部教授、ニュージランド）
グローバリゼーションとスポーツ：アジアの境界内、そしてアジアを越えての現在と未来の研究領域
- 2) シン イハン（サウスカロライナ大学、社会学部教授、アメリカ）
プロスポーツ競技および競技者の興隆と没落：日本における大相撲の事例を通して
- 3) 黄 順姫（筑波大学、人文社会科学研究科教授、日本）
2006年のワールドカップサッカー、多文化的サポーターの空間、ディアスボラ

司会者

杉本厚夫（京都教育大学教授）、山下高行（立命館大学教授）

コメンテーター

カン ヒヨミン（カンウォン大学、レジャースポーツ学部教授、韓国スポーツ社会学会副会長）
文化、スポーツビジネスの側面からみたグローバル化とスポーツ

発表要旨

Steve Jackson (University of Otago, The School of Physical Education ,New Zealand)

Globalization and Sport:

Current and Future Research Dimensions Within and Beyond Asia

Globalization remains a key topic of conversation and debate. Supporters argue that globalization is stimulating the world economy, providing new opportunities for developing nations, and even contributing to the advancement of democracy. However, critics of globalization note that it is making the rich more wealthy and powerful, is exploiting the most vulnerable people in the world and that by its very nature will inevitably lead to economic, political, cultural and environmental disaster. Clearly, there are very different views on globalization but one thing that is clear is that there are effects and we need to understand them if we are to have sustainable resources, healthy communities and even peace itself. In order to do this we need to consider how globalization is impacting on all aspects of contemporary social life including sport. This presentation will examine the current debates about globalization in relation to the cultural field of sport. Specifically, the paper will discuss (1) the unique features of sport in the analysis of globalization (2) the key debates and lines of research associated with globalization and sport; and, (3) some ideas for future research in the area of globalization and sport.

Eui Hang Shin (Professor of Department of Sociology, University of South Carolina, America)

The Rise and Fall of Professional Athletes: The Case of Sumo Rikishi in Japan
The sumo is one of the most traditional sports in Japan. Historically, it has enjoyed the status of icon of the Japanese traditional culture. However, the sport has been challenged by the declining popularity among sports fans, health status of athletes, accusations of match fixing, and "invasion" of foreign-born rikishi in the recent years. The purpose of this study is to investigate the professional career patterns of sumo players in the two upper divisions of the Japanese Sumo Association, *makuuchi* and *juryo* since 1958. More specifically, in the first section of the paper we review the length of time involved between the debut to sumo and *juryo* debut, between *juryo* debut and *makuuchi* debut, between *makuuchi* debut and promotion to *sanyaku*, *ozeki*, and *yokozuna*. In the second section of the paper, we analyze the promotion, demotion, injury, and retirement rates of the rikishi. Using the multivariate regression model we examine the factors affecting the win-loss and injury rates of individual player. We consider the physical characteristics such as the ratio of height to body weight, age at debut, age at promotion to *juryo* and *makuuchi*, player's *heya*, and country of birth as the predictors of the winning and injury rates. In the final section of the paper we analyze the changing patterns of distribution of foreign-born rikishi by division and country of birth. We focus on the career paths of rikishi by debut cohorts and conduct a comparative analysis of the career mobility since the time of debut between Japanese and foreign-born rikishi. We provide the insights about the possible impacts of the emergence of foreign-born players on the future of the Japanese sumo industry in the discussion section.

黄 順姫（筑波大学人文社会科学研究科 教授）

「2006年ワールドカップサッカー・多文化・ディアスボラ」

(The 2006 World Cup Soccer, Multicultural supporter space and Diaspora)

2006年ワールドカップサッカーのサポーターたちの応援を通して、多元的共生の世界を次の二つの侧面から描き出す。第一は、国内のドマスティックな応援空間におけるグローバルな多元的応援世界。第二は、グローバル規模における自国試合サポーターの共有するディアスボラの多元的応援世界である。具体的には、一方で、スポーツバーで応援する日本の若者、ストリートや飲食店で応援する新宿大久保の在日韓国人サポーター、さらには日本人や在日韓国人に同じく応援の場所を提供する店の空間文化を通して、メガスポーツイベントが織り成す多元的共生の世界に迫る。2002年ワールドカップサッカー日韓共催及び韓流現象以後、日本と韓国両方を応援する若者および中年女性の日本人サポーターと、在日韓国人サポーターがともに楽しむ「新宿大久保」の応援空間のリアリティを描く。他方で、グローバルな規模での多元的共生の世界を描く。世界各地で自国の試合を応援するサポーターとメディアを介在して、グローバルエスにシティを共有するディアスボラの特性を分析する。両方の側面からメガスポーツイベントと多元的共生の応援世界を描いていく。さらに、参与観察や面接調査だけでなく、在日韓国人および韓国の大学生に対する質問紙調査の結果を比較することで、メガスポーツイベントへの多文化的関わり、集合的記憶、ディアスボラの関係性を多元的に描きだす。

Commentator

Hyo Min Kang (Professor of Department of Leisure and Sports ,Kangwon National University)

はじめに

作家井上靖（1907—1986）。昭和2（1927）年、20歳の時に第四高等学校理科甲類に入り、昭和5（1930）年卒業後、九州帝大から京都帝大に入学。やがて新聞記者から作家に転じ、『氷壁』やかずかずの「シルクロード紀行」を発表した文化勲章作家である。四高時代は柔道部に明け暮れて主将まで務めた人である。「北の海」に描かれているように、井上靖は体格や天分が物をいう立ち技よりも「練習量がすべてを決定する柔道」として寝技を重視し、かつ夢見て、徹底して練習に明け暮れるストイックな生活を自己に課した。「私は高校時代を金沢の沈鬱な気候の中で、徹底的な禁欲生活を送った。柔道部に籍を置いていたので、他の学生が持つような青春を享樂するといったゆとりはなかった」と回顧する。「明けても暮れても、私たちは道場で組み合っていた。冬休みも春休みもなかった。夏期休暇だけ何日間か家に帰ることができただけで、あとは柔道ばかりだった。その頃私たちはお互いに言い合ったものである。学問をやりに来たと思うな、われわれは柔道をやりに来たのである、と。」「私たちが柔道をやったのは、柔道が強くなりたいためでも、有名な選手になりたいためでもなかった。全く各自が自己に課した一つの青春の日の過ごし方であって、厳しく自分で自分を律した一時期であったのである。その後体験した軍隊生活よりもっと辛かったが、しかし軍隊生活と違うところは、一方が全く権力によって強いられているのに対し、他は自分が自分を律していることであった。その点私たちは道場という一つの修道院にはいったようなものであった。」（「青春を賭ける一つの情熱」）

こうした井上のいう「修道院」的運動部活動は、日本的な武士道の色彩を強く帯びた独特のスポーツ像でもあって、四高柔道部に限るものではなく、わが国の旧制高等学校運動部に共通する個性とも言えるものであろう。

筆者はどのようにいわれる旧制高等学校の活動形態やスポーツマインドが具体的にはどのような過程で形成されていったのかを、大正3（1914）年から昭和21（1946）年までの分が残されている旧制第四高等学校柔道部の対外試合記録『南下戦記』及び練習日誌『南下軍』（石川県立歴史博物館、第四高等学校記念館所蔵、若干名称は異なる場合がある）の記述をもとに、「部員たちの意識や行動を丹念にフォローする」（坂上2001）なかで明らかにしようと試みている。だが、これは膨大な資料であり、現段階では大正期から昭和初期まで目を通したにすぎず、その全体像の解明にはまだ数年の時日を必要としている。

今回述べようとするのは、第1に、井上靖が在籍した昭和2～3年当時の練習日誌の内容を確認し、過酷ともいえるその修道院的練習実態を明らかにすることである。第2に、大正3年の練習日誌を分析し、初期にはきわめて短期間の牧歌的練習が行われていたことを明らかにする。第3に、そうした牧歌的な練習状況が変わり始めて修道院化していく過渡期の練習日誌として、大正10・11年の練習日誌を取り上げ、その修道院化の過程を検討してみたい。

(1) 昭和2～3年の練習日誌（昭和2年8月～昭和3年7月）

日誌記述内容は、日付、練習時間、練習内容、来訪者、紅白戦結果、部員の状況、話し合いの内容、決意などである。判読困難な箇所や、当て字、誤字などもしばしば散見される。紅白戦の対戦相手や決まり技、決着時間、練習や試合に関する所感、「本日練習なし」など、部の活動が全般的に比較的細かに記されている。練習には直接参加しない立場のマネージャーが記録しているのではないかと思われる。その特色をあげる。1. 練習は通年実施され、目標は7月の夏休みに行われる高専大会の優勝である。学校当局や卒業生からも熱烈な激励や叱咤が加えられている。2. 大会に出場しない非選手部員の欠席者は多い。また試合期ではない1月から3月の間は欠席者や見学者が多く活動は停滞している。また脱落者もみられる。3. 練習は通常、授業終了後午後3時ころから約2時間、夏・冬・春の休暇時には午前・午後、各3時間に及ぶ合宿練習を行っている。寝技を多用する「ごしごし」などの練習のほか、ひとりが時に2時間を超す「五人掛」「飛行機」といった過酷な練習を課していた。

なお、昭和2年、3年とも高専大会は途中で敗退した。「七月十八日 之日不可忘 四高惨敗 吾に忘れ不可の歴史を残しぬ。嗚呼、吾軍優勝の夢遂に又成らず。七年間の臥薪嘗胆の後に於ける之の結果の余りにも慘めなる哉」（S3.7.18）と練習日誌には綴られている。

このように昭和2、3年の『南下軍』からは、高専大会の優勝に目標を置き、有望選手獲得に努力し、日々厳しい練習を重ね、それに耐えうるものだけが初めて評価を受ける四高柔道部の様子が描かれている。

(2) 大正3年の練習日誌（大正3年10月20日～大正4年元旦）

ではこうした修道院的柔道部の練習はいつから始まったのであろうか。最も古い大正3年『南下戦記』をみてみよう。冒頭に25名の寄宿先（寮）別部員名簿がある。「部律」として、稽古時間が、午後三時より約一時間、土曜日は午後一時から、日曜日は当分休（南下確定まで）があり、次に「養生」項目として、禁酒、暴食を禁ず、禁煙、他の運動及身体を労する娛樂を厳禁す、但日曜は多少の運動娛樂を許すと記されている。次に出席簿（出席簿）が個人別に作成され、出席日にはマネージャーのものと思われる印鑑が押されている。この出席簿は昭和2年以後の日誌には見られない。それでは大正3年『南下戦記』の練習日誌の内容を見ていく。10月20日「稽古日誌」という項目で始まる。

「我部は老虎南下軍の勢頭に洛陽の地を蹂躪して榆安の夢にのみ耽れる都人士を戰慄せしめて以来久しく再び其充実したる力を天下に示す機会を得ず千鈞の弩は徒に張られたのである。恰もよし来る十二月を期し京大主催各高等学校優勝試合有らしの噂伝りぬ。鬱勃たる我部の雄心禁ずる能はず、無為に苦しみし健兒の靈魂は為に湧つた。嗚呼洛陽の地、王者の活舞台に於いて吾人が静に無声堂裡に鍛え來たりし腕前を發揮して北辰の光芒を天下に輝す（＊2字不明）り。思へば愉快、即ち我部は二十五名の選手候補者を選びて猛烈なる練習を開始す。」と対外試合の確定によって高揚した気分のうちに練習開始を告げている。ただしこのような記述は対外練習試合や特筆すべき事項の見られた時だけあり、他は一般に淡淡と事実のみを記述している。例を挙げる。10月20日 稽古猛烈を極め無声堂は活氣溢る。一二中より多数練習に来る。負傷者数名を出す。10月21日 三高生五百余名修学旅行の為当地に来る。練習を休み遠来の客を犒う。10月22日 稽古猛獣。一、二中生練習に来る。10月24日 日曜日稽古休。10月25日 稽古猛烈。中村眼鏡を負傷す。10月28日 欠席者九名の多きを数ふ、遺憾千万。10月29日 練習倦怠の色あり、連日の疲れによるのであろう。

全体的な特色をあげる。1. 部の運営は部員による自主活動であり、学校が指導者を配置していたわけではない。2. 練習は練習日誌から見る限り、10月から12月の3ヶ月である。（12月冬休に南下遠征試合が組まれたことによる）3. 練習日、練習時間とも短期、短時間である。4. 出席率は70%程度であり、比較的の欠席者も多い。また「活気なし」の日も多い。5. 対外試合決定により意欲が喚起され練習も活性化されている。

このように、四高柔道部が全国高専大会で七連覇を遂げ始める大正3(1914)年の日誌を検討すると、初期には練習期間が高専大会が開催される3～4ヶ月前から、練習時間も比較的短く、ある意味では合理的、牧歌的、常識的活動内容であったことが指摘できよう。こうした練習状況はその後大正10年まで続く。

(3) 大正10（3月9日～7月18日）～大正11年（大正10年11月10日～大正11年7月21日）の練習日誌

大正10年は例年より早く大会の5ヶ月前の3月から練習を開始した。この年はチフスの流行の外に「肩をこはしたり腕関節をこはしたりで見学する人が確かに多い様な気がした」とあるように、猛練習は行った形跡がみられるが、練習期間や時間は従来方式である。大正10年11月からは「南下準備期」が開始され、翌大正11年3月から「南下軍」としての本格的な練習が開始されて、通年化の傾向を見ることができる。

終わりに

こうした練習期間の長期化と過酷化の傾向は、高専大会における勝敗結果との関連を考えることができる。大正3～9年まで四高柔道部は7連覇を遂げている。つまり連覇を続けている時の練習は大正3年の如く比較的練習時間も短く、合理的かつ常識的活動内容であったということができる。以後敗退によって、大正10～11年頃から過酷の度合いを強めていき、「選手層が充実し勝利奪還の期待が最高潮に達した昭和2～3年」（戸松）に至って、いさかか非合理な練習と悲壮感を漂わせつつ、修道院化していくと見ることができる。その修道院化を支えた社会的背景についても言及してみたいが、ともあれ井上靖が在籍したのはちょうどその時期であった。

日本スポーツ社会学会
第16回大会実行委員会事務局
〒920-1192 金沢市角間町
金沢大学 佐川哲也（大会実行委員長）
(E-mail:sagawa@ed.kanazawa-u.ac.jp)